

2020年度

アクティブ・ラーニング推進報告書

広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

目次

1. はじめに	1
2. 令和2年度大学・短大FD研修会	2
1) アクティブ・ラーニング実践報告	
2) ティーチング・ポートフォリオ研修会	
3) アンケート集計結果	
3. アクティブ・ラーニング授業紹介	26
4. C-Learning を用いた遠隔授業紹介	46
5. 学生参画型FD活動	70
6. 学外アクティブ・ラーニング研修会等報告	77
7. 授業教材ビデオ制作	83
8. オープン／ラーニング・コモンズ利用状況 及び ICT 支援員の取組	91
9. アクティブ・ラーニング実施状況	97
10. 令和元年度と令和2年度前期学生による授業評価の比較	102
11. おわりに	108
広島文化学園大学・短期大学FD委員会規程	109

1. はじめに

広島文化学園大学・短期大学 学長 坂越 正樹

令和2年1月、中央教育審議会大学分科会から「教学マネジメント指針」が提示されました。そこではFD、SDや教学IR等、教学マネジメントを支える基盤を整備し、(Ⅰ)学位プログラムごとの学修目標を具体化すること、(Ⅱ)それに基づいて体系的組織的に教育課程を編成すること、(Ⅲ)学修成果を把握し可視化することが求められています。そしてこれらのことを通してめざされるべき目標が、「学修者本位の教育の実現」です。

またこの「指針」においては、「学修者本位の教育」のための方策としてアクティブ・ラーニングが重視されています。本学では、このアクティブ・ラーニングの手法をいち早く取り入れ、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」ができるような教育環境を展開してきました。とりわけ、本学の教育・研究の基本方針である「対人援助」という観点からすると、アクティブ・ラーニングの手法である体験学習、発見学習、問題解決学習、調査学習などから、社会的能力、知識・経験などを含めた汎用能力の涵養は欠かせません。本学の教育目標を達成するには、まさにアクティブ・ラーニングの手法による教育が必要だと考えています。

しかしながら本年度はこのアクティブ・ラーニングの取組みが大きな制約を受けることになりました。昨年1月から新型コロナウイルス感染症が広がり、4月の新年度スタート時点では大学・短大のすべての授業を休講とせざるをえませんでした。5月からは本学の学修支援システムC-Learningによる遠隔授業を開始し、6月になってようやく対面授業が可能になりましたが、感染防止のため遠隔授業を併用したり学年ごとの分離登校日を設定したりする学部もありました。このような状況で、年度当初の授業計画を変更し、シラバスも修正することを迫られたのです。当然、アクティブ・ラーニングの計画も学生が密になるグループワークを中止したり、対面でのプレゼンテーション、ディスカッションを断念したりする、また実習をシミュレーションに代えるという事態に直面しました。このように学修の障害は大きかったのですが、他方でアクティブ・ラーニングは本来「主体的能動的協働的な学び」であり、必ずしも対面であることが必須の条件でないことにも気づかされました。C-Learningの機能を活用すれば、ふだん発言の少ない学生の意見をクラスで共有することができます。事前に教材を登録することで学生の事前学習が可能になり、授業ではより深い考察に重点を置くことができます。またアンケートやレポートの機能によって、学生がその授業で何をどこまで理解できたのか、評価確認することもできました。

コロナ禍が、アクティブ・ラーニングを制約したことは事実ですが、また別の可能性を示してくれました。大仰な言い方になりますが、キャンパス内、教室内という空間と一定の時間を共有して学ぶことの意味を再確認させてくれました。また同時にICTの機能を十分に活用すれば、主体的で能動的な、さらには協働的な学びも可能であることを示してくれています。これこそ学修者本位の教育であり、学修者の個別最適な学びと学修者同士の協働的な学びの統合、ベストバランスへの方向性を示すものと考えます。

ここに困難であった令和2年度のアクティブ・ラーニング推進報告書をまとめました。本報告書が、本学のアクティブ・ラーニングのさらなる飛躍の土台になることを願っております。また、本報告書をご一読のうえ、本学のアクティブ・ラーニングについて評価していただき、忌憚のないご意見を賜れば幸甚に存じます。

2. 令和2年度 大学・短大FD研修会

第1部

アクティブ・ラーニング実践報告

司会者まとめ

大学・短大FD 委員会副委員長 看護学部 看護学科 佐藤 敦子

遠隔授業におけるアクティブ・ラーニングのための心掛け

短期大学 保育学科 黒木 貴人

音声データを用いたオンライン授業の報告、そして雑感

学芸学部 子ども学科 山中 翔

ICT ツールを活用した授業実践

看護学部 看護学科 金澤 寛

COVID-19 拡大時期における実習教育の試み

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科

河野 喬, 工藤 隆治, 村上 須賀子, 磯邊 省三, 佐々木 哲二郎

社会情報学部 健康福祉学科

鶴岡 和幸

アクティブ・ラーニング実践報告の総評

学芸学部 子ども学科 山崎 晃

第2部

ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ報告

広島大学教育本部 吉田 香奈

アンケート集計結果

司会者まとめ

大学・短大 FD 委員会副委員長 看護学部看護学科 佐藤 敦子

令和3年3月11日、4名の教員によるアクティブ・ラーニング実践報告が行われた。

1 題目の報告は、短期大学保育学科の黒木貴人 先生による「遠隔授業における、アクティブ・ラーニングのための心がけ」で、C-learning の資料にボイスレコーダーを使用した音声データを加えた工夫が示された。2 題目の報告は、学芸学部子ども学科の山中 翔 先生による「音声データを用いた、オンライン授業の報告、そして雑感」では、C-learning の資料に音声データを加えた講義とその拡張の可能性について示された。3 題目の報告は、看護学部看護学科の金澤 寛 先生による「ICT ツールを活用した授業実践」で、C-learning に加え teams を活用した授業前後の実践的介入と評価の試みが示された。4 題目の報告は、人間健康学部スポーツ健康福祉学科の河野 喬 先生による「COVID-19 拡大時期における実習教育の試み」で、学内実習におけるアクティブ・ラーニング実践例が示された。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う対面授業への様々な影響がみられ、4名の先生方の実践報告から、授業内容・方法の様々な実践的工夫例を得ることができた。それぞれの報告ごとの質疑応答では、具体的で実践的な意見交換が活発に行われた。最後に、教育学研究科長の山崎 晃 先生よりアクティブ・ラーニングについて示唆に富んだ総評をいただいた。

アクティブ・ラーニング実践報告会は、今後のアクティブ・ラーニング教育について、大変意義のある研修会であった。



遠隔授業におけるアクティブ・ラーニングのための心掛け

短期大学 保育学科 黒木 貴人

1. はじめに

筆者は、特段に優れたアクティブ・ラーニングの実践をしているわけではない。しかしながら、「どうしたら学生が“主体的に”“能動的に”学ぶことができるか」ということについては本学着任当初から自分なりに模索してきたつもりである（うまく進められてきた自信はないが）。

本報告は、特定の授業に特化した実践事例というより、筆者が担当科目全体を通して学生の“主体性”“能動性”を引き出すために心掛けてきたことを徒然なるままに述べることとする。特に、今年度のコロナ禍における遠隔授業を実施する上で行ってきた幾つかの工夫について、具体例も挙げながら紹介させていただく。

2. 伝えたいこと（学ぶべきこと、考えるべきこと）を伝えきる

本学における遠隔授業はC-Learningを中心に行われたが、教材・協働板・連絡など、基本的には文字情報によるやり取りが主たる営みになる。そのため、学生がどのようにこちら側の情報を受け取るか、いつも以上に考えながら情報発信することに留意した。しかし、丁寧に伝えようとすればするほど、文字が多くなってしまふ。文字が多くなってしまふと、どうしても流し読みをする学生も増えてしまふ。そのため、いかにシンプルに、分かりやすくするかを心がけた。

一方で、文字情報をシンプルすることにより、“あそび”みたいなものがなくなることがしばらくして自分の中で課題となった。“あそび”みたいなものとは、授業の中で示される内容から派生する発展的課題、関連するような余談等であると言えようか。ここにこそ、実は授業者が学生に学んでほしいことや考えてほしいことのエッセンスがあり、そしてそれは学生が“主体的”“能動的”に学習内容を考える契機になり得ると筆者は考えている。協働板だけでその“あそび”を行おうとすると、どうしても文字入力に時間がかかってしまふ。そのような課題を乗り越える手段の一つとして、ボイスレコーダーに事前に講義を録音し、それを音声データとして教材倉庫にUPするというを行うようにした。学生と対面で講義するときのように話をしていると、その内容に関連して「こんなことも話したい、紹介したい」というものが出てくる。そのような“あそび”は、授業者としての矜持を改めて確認する事にもつながった。短大・学芸学部の4つの教職科目で実践したが、「音声データがあってスムーズに学習することができた」という授業評価アンケートの記述もいくつか見られた。

音声データを一方的に聞くだけ、という状況を乗り越えるための工夫もした。例えば、「カリキュラム・マネジメント」という内容を学ぶ回では、

- ①音声データ1と授業スライドに基づき、「カリキュラム・マネジメント」の定義や概念を知る。
- ②YoutubeにUPされている事例紹介動画を視聴し、「カリキュラム・マネジメント」の具体例を学ぶ。
- ③授業スライドに戻り、音声データ2も聞きながら動画内容の整理と発展的内容について理解を深める。

3. “主体的に” 学ぶための素材を提供する

遠隔授業においては、当然のことながらインターネットをフルに活用することになる。ただ単にこちらが示す情報のみを知るだけでは、もったいないとも言える。インターネット上に溢れる情報を学生がいかに“主体的に”活用できるか、その活用のための方途を指し示すことも遠隔事業における教員の役割と言えるのではないだろうか。

そのような意識のもと、平時の対面授業以上に発展的な内容に関する資料(新聞記事や動画等)を充実させることに努めた。例えば「教育制度」の授業では、シラバスで示す授業内容に加え、「プラスα資料」として当該授業内容に関連したコロナ禍における教育課題に関する話題を示し、それを読んだうえで考えたことを小レポートして提出させるようにした。「教育委員会」を扱う回では、教育委員会制度をめぐる基本事項を押さえたうえで、「プラスα資料」として朝日新聞電子版の記事「広島県教育長・平川理恵さんに聞く公立校のオンライン対応」を示し、コロナ禍における具体的な教育委員会の対応から、その役割を再考することを求めた。

資料を充実させようとする、教材倉庫に載せる量が多くなってしまいがちになる。よりスマートに発展的な課題を資料として提示し、学生が自宅等の環境で発展的な課題にアクセスできるような工夫として、後期からはパワーポイントの「ハイパーリンク」機能を活用した。スライドの中に URL を埋め込み、そこをクリック(タップ)することによってすぐに指定の資料を開けるというものだ。これについては、別稿(アクティブ・ラーニング授業紹介)でより細かなことを紹介しているので、興味がある方はそちらを参照していただきたい。

4. 「一緒に授業を創る」という姿勢

おそらくどの教員も同じように考え実践されていたことではあると思うが、遠隔授業に対する学生の声をしっかり受けとめ、「一緒に授業を創る」という姿勢を平時以上に持つようにした。コロナ禍における授業は、教員・学生ともに初めて経験することである。そのため、こちらも完全なものを提供できるか分からない、という断りをした上で「何かあれば何でも言ってください」ということを折に触れて発信するように心がけた。そのように、コロナ禍の授業を一緒に創り上げていこうとする姿勢を学生に対して示したつもりである。パワーポイントの作りや授業の進め方など、細かな意見もなるべく真摯に受け止めていい方向に反映できるように努めた。

また、昨年までも C-Learning を通して質疑応答を受け付ける体制を整え、都度丁寧な回答を心がけてきたが、顔が見えない分、これまで以上に真摯に丁寧に質問に答えるように心がけた。昨年までの授業以上に質の高い質問が多いという肌感覚もあり、一定の成果は示すことができたのではないかと考えている。

音声データを用いたオンライン授業の報告、そして雑感

学芸学部 子ども学科 山中 翔

1. はじめに

新型コロナウイルスの世界的流行にともなって、大学には授業のオンライン化が求められるようになった。こうした状況において、大学教員はあの手この手を尽くして、オンライン授業の方法を模索した。この意味では、あらゆる大学において史上最大規模のFD（ファカルティ・ディベロップメント）が同時期に進行したのであるⁱ。もちろん、広島文化学園大学（以下、本学）もこうした動向と無縁ではない。他の報告にもあるように、本学の教員も試行錯誤しながら、オンライン授業をおこなってきた。本報告では筆者が実施したオンライン授業の概要とそれに関わる若干の考察（というよりも、雑感に近いだろう）をおこなう。

2. オンライン授業の概要

(1) 本学におけるオンライン授業の基本方針

本学では、4月の休講期間を経て、5月からオンライン授業を実施した。その後、6月には対面授業を再開したが、必要に応じてオンラインも併用した。授業の基本的な形式は以下の通り。①オンライン学習支援アプリのC-learning上に資料をアップロードする。②学生は資料を読んで、協働版に質問や意見等を投稿する。教員は適宜コメントに返信し、新たな課題等を設定する。③授業終了後、学生は課題レポートを提出する。本学の形式はいわゆるオンデマンド型、すなわち、テキスト、そして音声や動画を該当の場所にアップロードし、学生はそれをもとに学習をすすめるというものである。この形式を採用した背景には、学生のオンライン環境の差（パソコンの有無、wi-fiの有無など）に対する配慮や本学が利用しているオンライン学習支援システム(C-learning)との兼ね合い等があったと思われる。

私が担当する授業はほとんどが講義形式であり、オンデマンド型で実施することは容易である。ただし、対面と同等の質を担保することは難しい。対面であれば口頭で説明していた内容も文章化して、資料に加えなければならない。そうすると、情報量が膨大となり、学生にとって大きな負担となる。また、授業準備にも時間がかかるため、教員も大変である。授業を録画して、アップロードすれば、対面授業に近い実現できるが、上述したオンライン授業の基本方針や私の能力不足、そして少しばかりの怠慢（率直に言えば、担当しているすべての授業を動画配信することは大変だと思った）もあって、採用しなかった。

(2) 方法

動画を用いないオンライン授業の方法としては、以下のようなものがあげられる。①ラジオ形式ⁱⁱ。これはpodcastのように音声をアップロードし、学生からの質問をメール等で受け付けて、それに応えるというもの。②メール形式ⁱⁱⁱ。数種類のテキストをメールで配信し、学生はそれを解いてメールで返答する。最後に模

範解答を教員がメールする。③「講義資料＋講義(音声ファイル)」という形式。これは学習院大学の田崎晴明氏が自身のHPで公開していた方法^{iv)}であり、筆者はこれを採用した。

方法は以下の通り。詳細については、HPを参照。

①パワーポイント等を用いて、講義資料を作成し、PDFにする。その際、学生が振り返りやすいように、ページ番号を振る。

②ボイスレコーダーを用いて講義を録音する。

(1) Windows の場合

ボイスレコーダーはデフォルトで搭載されているので、それで録音する。ただし、そのままではファイルサイズが大きいため、Audacity というオープンソースのアプリケーションを用いて、音質やビットレートを調整したファイルを作成する(ビットレートは 24 kbps もあれば十分とのこと)。Web 上の無料サービスを使用するという手(Online Audio Converter や Audio Joiner など)もあるが、推奨はしない。

(2) Mac の場合

iPhone の voice memos で録音したものを Mac に転送する。サイズを小さくするためには上述のアプリケーションやサービスを用いる。

要するに、講義資料を PDF ファイルで作成し、続いてその資料をみながら、講義内容を録音する。あとは講義資料と音声ファイルを C-learning の「教材倉庫」にアップロードし、学生はそれを視聴する。質問や意見は協働板やメールでやり取りする。あまりにも、シンプルで拍子抜けするかもしれないが、これだけである。

(3) 学生の反応

授業評価アンケートや協働板には以下のようなコメントが寄せられた。

- ・この授業のやり方わ(原文ママ)すごく良いと思います。他の(原文ママ)授業でもこれをやれば良いと思う。
- ・この授業を受けていても最初のほうは余り理解ができていませんでしたが音声ファイルを聞くにつれて段々と理解ができるようになっていったし新鮮なことばかりで自分の可能性をもっと広げられると思いました。
- ・音声を何度か聞き返したり、復習して理解できるように努めたいです。

このように、音声ファイルは学生が講義の内容を理解するうえで大きな役割を果たしていたと思われる。また、音声は繰り返し視聴することが可能なため、復習にも役立つ。ただし、対面授業の方が分かりやすいというコメントも多く、対面授業と同等の質を実現するところまではいかなかった。

また、「講義資料＋講義(音声ファイル)」は他の方法と比較して、教員の負担が少ない。方法の手軽さはさることながら、授業実施時のトラブルによる影響も少ない。たとえば、ビデオ会議アプリを用いた授業では、何らかの原因によって配信が停止した場合、すべての学生が授業を受けることができなくなる。一方、「講義資料＋講義(音声ファイル)」の場合、接続不良が起こるとしても、それは個々の学生であり、一斉に授業が中断されることはない。

3. 若干の考察

さて、以上が授業の概要である。しかし、この方法、オンライン授業に関するツールや方法が蓄積された現在では、色あせたように見える。筆者自身も次年度からは Zoom や Google Meet といったツールをより積極的に活用していこうと考えている。あえてこの方法にこだわるとすれば、学生のオンライン環境への配慮、教員の負担軽減といったところだろう。オンライン環境の問題についても、コロナ禍から約 1 年経過し、解消されている学生も一定数いると思われる。こうした状況において、本報告に何らかの意味があるとするならば、それは何だろうか。

私の考えでは、それは音声を聞くという行為にあると思われる。音声データを聞いてみると、語りが淀んだり、語りのトーンが落ちたりするとき。自分自身に問いかけたり、語り直したりするときがあることに気づく。このようなとき、他の部分と比較して、その語りは明らかに浮いているようだ。語りは意味をもった全体ではなく、意味をもたない単なる音として際立っている。そうした語りは上滑りしており、意味もよく分からない。もしかすると、授業を聞いている学生も同じようなことを感じているのではないか。

授業を一つの言語的構造体とみなすならば、浮いた語りはその構造からつま弾きにされた空虚な音である。これを別のところに組みなおすのか、それともそのまま取り除くのか。このように思考することは教員のもの見方を問い直すことであるとともに、授業を再構築することでもある。授業の振り返り、それはシラバスに記載されている目的、方法や評価の整合性、あるいはアンケートや学生の感想にもとづいておこなわれることが一般的だと思われる。もちろん、これらは重要な視点であることは言うまでもない。けれども、教員の発する言葉、意味に限らず、語りの調子や間も含めたうで聞いてみると、また違った世界がみえてくるのではないだろうか。

【参考文献・URL】

i 佐藤浩章「ポスト・コロナ時代の大学教員と FD」『現代思想——コロナ時代の大学』第 48 巻 第 14 号、2020、pp.77。

ii 以下の HP を参照。まつーらとしお「動画授業による学生のパケ死を防ぐ」
<https://note.com/yearman/n/n2dbad7c064a8>【最終閲覧日:2021 年 3 月 5 日】

iii 同じ HP の別記事。「オンライン授業をがんばりすぎないように」
<https://note.com/yearman/n/n8d8efbd780d5>【最終閲覧日:2021 年 3 月 5 日】

iv 田崎清明「遠隔授業教材作成について(教員向けメモ)」
<https://www.gakushuin.ac.jp/~881791/RLtest/tips.html#Windows>【最終閲覧日:2021 年 3 月 5 日】

アクティブ・ラーニング実践報告 —ICT ツールを活用した授業実践—

看護学部 看護学科 金澤 寛

1. はじめに

本授業では、新型コロナウイルス感染拡大防止におけるオンライン授業実施に伴い、本学で運用されている授業支援システムである C-learning の使用と合わせてオンデマンド教材を作成し、その教材を併用した双方向会議システムによるオンライン授業を実施した。

本稿では、本授業の実践報告、問題点、および今後の課題を示す。

なお、本授業において利用したツールを以下に一覧で示しておく。

Table 1 授業で使用した ICT ツール

内容	ツール
小テスト実施・質問受付・連絡送信 受付・授業感想受付 等	C-Learning
スライド教材作成	Microsoft PowerPoint
オンデマンド教材作成	Microsoft Stream
オンデマンド教材視聴	各種 Browser
授業実施（双方向会議システム）	Microsoft Teams
動画教材保存場所	Google Drive

2. 実践報告

本授業の基本的な構成は、学生は予習として次回授業の内容をオンデマンド教材にて視聴し、授業に臨む。そして、授業後は授業内容の理解度を確認するための課題を実施するとともに、授業を録画した教材にて復習が行えるといったものであり、そのための準備を教員が Table 1 に示す各種 ICT ツールを利用して実施した。

教員は、授業開始までに 90 分の授業を行うためのスライドを Microsoft PowerPoint により作成するとともに、90 分の授業内容を 3~4 つのセクションに区切り、1 セクションあたり 10 分程度のオンデマンド教材を Microsoft Stream にて作成した。

オンデマンド教材の作成は、学生が実際に授業を受けているようにスライドを表示しながら音声による解説を入れ作成した。作成した教材は Google Drive の共有フォルダから視聴できるようにした。

本授業の構成を学生の行動と教員の行動とに分け、Figure 1 に示した。

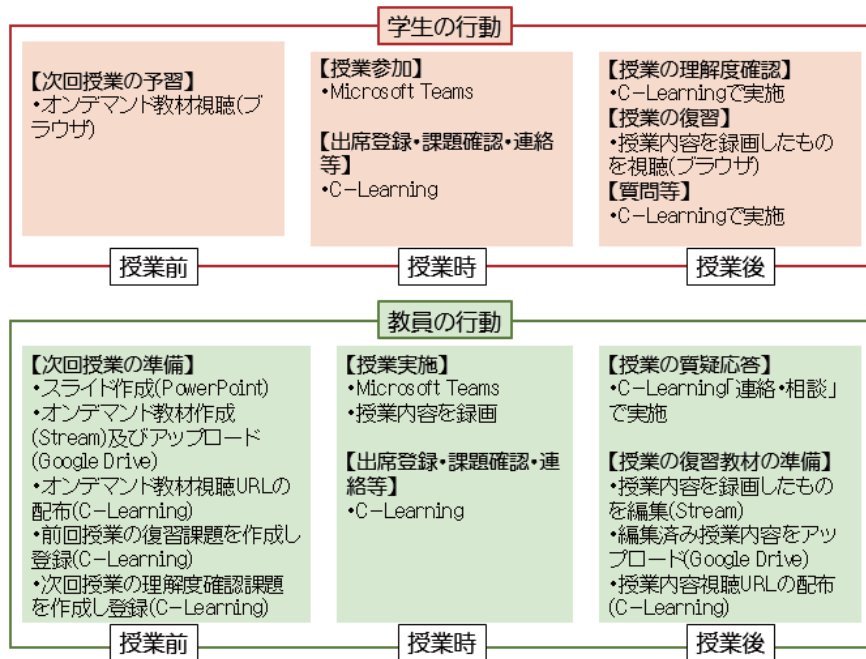


Figure 1 本授業の構成

【オンデマンド教材作成方法】

オンデマンド教材作成は、あらかじめ Microsoft PowerPoint にてスライドを作成 (Figure 2 左) し、そのスライドを用いたスライドショー画面 (Figure 2 右) を Microsoft Stream (Figure 3) にて録画した。その後、1 コンテンツの収録長さを 10 分程度に調整したものをダウンロードすることで教材資料作成を完了した。本オンデマンド教材のファイル形式は、MP4 形式とした。

講義前課題【解答】

【問題 3】
 $N(-3, 144)$ と表示された場合、この正規分布の分散はいくら？
 【解答】
 分散 $\sigma^2 = 144$

【問題 4】
 $N(7, 15)$ と表示された場合、この正規分布の平均はいくら？
 【解答】
 平均 $\mu = 7$

標準正規分布

標準正規分布とは テキスト p.86-87

◎ データの標準化

$X \sim N(\mu, \sigma^2) \rightarrow$ 標準化 $\rightarrow Z \sim N(0, 1^2)$

平均 μ 、分散 σ^2 の正規分布にしたがう確率変数 X 平均 0、分散 1^2 の標準正規分布にしたがう確率変数 Z

スライドに解説をつけたオンデマンド教材

Figure2 スライドに音声で解説が入ったオンデマンド教材を学生は視聴しながら予習

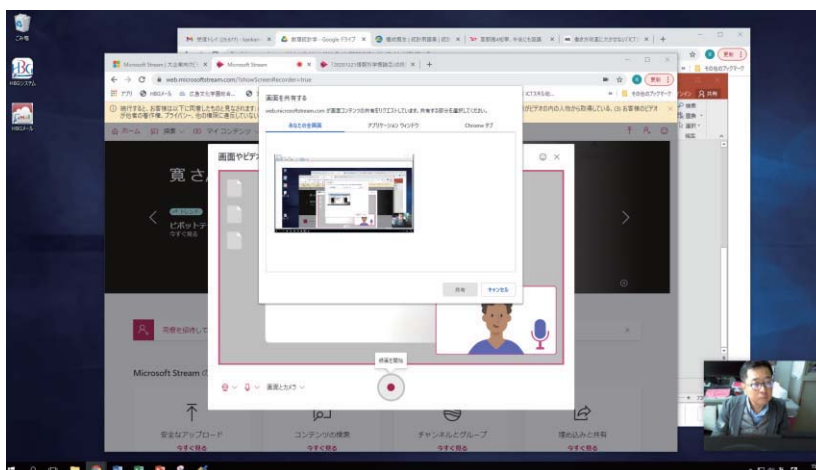


Figure 3 Microsoft Stream の録画開始画面

【オンデマンド教材のアップロード】

オンデマンド教材のアップロードは、Google Drive を利用した。Google Drive 内のフォルダを共有アイテムとして設定し、そこに教材を保存した。所定のフォルダを共有アイテムとして設定することで、そのオンデマンド教材へ直接リンクできる URL が可能となる。

【オンデマンド教材の視聴方法】

オンデマンド教材の視聴方法は、取得したオンデマンド教材へ直接リンクできる URL を学生に C-learning の連絡・相談にて配布し、学生は、その URL をクリックして視聴した。視聴はブラウザにて可能であった。

【授業実施】

学生が授業前に予習としてオンデマンド教材で学修した新しい学修範囲について、Microsoft Teams にて、オンライン授業を実施した。

【理解度確認テスト】

授業内容を振り返り、理解度確認のための復習課題を C-learning にて実施した。

【授業内容の復習】

予め録画しておいた Microsoft Teams にて実施したオンライン授業の実施内容を、オンデマンド教材と同様、Google Drive にアップロードし、その授業録画ファイルへ直接リンクできる URL を C-learning の連絡・相談にて配布しておくことで、学生は録画した授業内容を視聴しながら復習することが可能となる。

【フィードバック】

理解度確認テストのフィードバックについては、毎回授業の最初に前回の理解度確認テストの解説を行った。

【学生の感想】

本授業における学生の感想（抜粋）を以下に示す。以下に示されているように、C-learning 上に配布される資料を各自で見学修する授業方法よりも、Microsoft Teams にて授業を実施し、授業前・授業後に授業内容をオンデマンド教材にて学修を実施する方法は、学生の主体的に学ぶ姿勢を養う効果があることが明らかとなった。

- ◆ クロス集計表から期待度数を求める方法が理解できた。帰無仮説の棄却や採択の決定など、理解が不十分な部分も多くあったので改めて復習し直し、理解を深めたいと思う。
- ◆ 授業を受けてみて、前回の応用のような内容だったので復習できてよかったです。でも数値がたくさん出てきたり語句もたくさんあり、少し混乱しましたが講義資料を見返してなんとかわかることが出来ました。
- ◆ teams で先生の解説を聞くことで見ただけでは理解できないところも理解できて良かったです。来週も頑張りたいと思います。
- ◆ 今日の授業のカイ二乗検定については、前回の統計的仮説検定の手順と同じだったため、振り返りながら授業に取り組むことで適合度の検定も独立性の検定も自分で問題を解けそうなくらいに理解することができた。
- ◆ また、仮説を設定する段階で間違えて仮説を設定してしまうと答えが異なってくるため、しっかり問題を読み、グラフを見て仮説を設定することが重要だと思った。
- ◆ 2回目の teams での授業で少しずつ慣れてきました。聞き逃した、見逃した時ようにビデオを乗せてもらえるのはとてもありがたかったです。ですが、まだまだ出来ないところもあるので友達や先生に聞いて理解していきたいと感じました。
- ◆ カイ二乗検定とは、名義尺度に対する検定であることを知りました。また、前回学んだ手順に沿って帰無仮説と対立仮説の設定を行い、計算の仕方をしていく方法を学びました。計算の公式はしっかり覚えたので手順に沿って自分自身で求められるように復習をしっかりします。
- ◆ 検定統計量の実現値や棄却域の限界値などが分かった。テストが怖いですが頑張ります。
- ◆ 帰無仮説と対立仮説は、どちらがどちらにするかによって結果は変わってくるので最初の仮説の設定が大切だと感じた。独立性の検定と適合度の検定の違いや手順が理解できた。
- ◆ 授業で習う量が多く、途中で少し理解できていない部分があるところがあるので復習していきたいと思う。特に棄却域の限界値のところを理解するのが難しかった。また、クロス集計表を用いた検定では、期待度数の求め方や自由度の求め方は独特なので適合度の検定と混乱しないように気をつけたい。
- ◆ シーラーニングでの授業より、Teams の方が対面の授業受けているみたいで分かりやすかった。
- ◆ 前回の講義内容を実践するような内容で、前回より理解出来た気がした。でもこれをテストで解こうと思ったら、時間内に終わらすことが今の状況じゃ難しそうなので、復習と繰り返し解いていかないといけないなと感じた。teams でリアルタイムで画面共有して音声も聴こえてすごく良いとおもいました。

3. 問題点および限界

授業の参加，オンデマンド教材の視聴がスマートフォンでは，表示画面が小さいため映像を見づらい可能性があった。また，10分程度の動画でファイル容量が50MB程度となるため，ある程度の通信容量が必要となるため，Wi-Fi環境等の通信環境が整っていない学生にとっては課題である（希望者には阿賀 Cp での受講も可能としていた）。

限界点としては，対面授業に値する質を担保できるよう，視聴教材を作成し，Microsoft Teams を用いて双方向型のオンライン授業を実施したが，やはり対面授業と比較すると，学生の反応も把握しにくく，細かい指導が行き届きにくい点が挙げられる。

また，オンライン授業のため，授業後に学生同士が気軽に教え合うことができる場がないというのも，理解度の向上を妨げる要因にもなっているものとする。

4. 今後の課題

本授業では，オンデマンド教材による予習，さらに授業の録画による復習が可能となるような構成にしたが，学生が予習および復習の段階でどの程度の知識を習得したのかについて評価を行わなかった。今後は，予習および復習の段階で，ルーブリック等を用いて自己評価させることにより，その結果を踏まえた授業を展開でき，より高い学修効果を期待できると考える。

資料

作成したオンデマンド教材例

<https://drive.google.com/file/d/1PpiBTGUJRT3MP51AC4QK1WHFmnSyvWuj/view?usp=sharing>

<https://drive.google.com/file/d/1Ut9EdSELzKpHgSL6rlrCXD8K34Vrrfms/view?usp=sharing>

COVID-19 拡大時期における実習教育の試み

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科

河野 喬, 工藤 隆治, 村上 須賀子, 磯邊 省三, 佐々木 哲二郎

社会情報学部 健康福祉学科

鶴岡 和幸

1. 事実の経過及び概要

本学部では、本格的に感染が拡大しはじめた 2020 年 2 月末から COVID-19 パンデミックによって社会福祉士・精神保健福祉士の実習配属が困難になると予見し、情報収集をはじめた。通常の実習型実習と並行して学内実習をハイブリッド型として行った。特に学内実習については、大学設置基準等の法令及び文部科学省通知を鑑み、今年度限りの代替的教育として行うという観点から、大学内外との協議及び合意形成に注力し、特に監督庁への事前相談を経て慎重に実行した。事実の経過を表 1 に示す。

表 1 事実の経過

時期	概要
2020/02/28	・文科省・厚労省事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」を受け、学内実習の準備を始める。
2020/04/03	・ソーシャルワーク教育学校連盟会長より、6 月末までの実習自粛依頼。
2020/05/11	・本学教学支援センター「本学における遠隔授業等の実施に関する指針」発出。
2020/05/13	・教育環境整備を目的とする本学「遠隔授業環境整備支援金」が全学生に支給される。
2020/05/26	・ソーシャルワーク教育学校連盟より、COVID-19 下の教育プログラム例が示される。
2020/06/01	・他県大都市の福祉系大学から、配属型実習中止の現状と WEB 実習に関する情報収集。
2020/07/15	・北海道の施設での COVID-19 クラスタ報道。実習生に注意喚起と危機的状況を伝達。
2020/07/16	・実習福祉施設から、COVID-19 第二波に備え配属型実習の受入困難の連絡あり。
2020/07/18	・学内実習（オンデマンド・オンライン実習）の具体的プログラムを作成。学部実習教育支援委員会で審議し、教授会で諮る旨を承認。8/11 教授会で承認。
2020/07/29	・実習医療機関から、COVID-19 感染患者の受入れにより、実習受入辞退の連絡が届く。
2020/08/04	・中国四国厚生局担当官に、学内実習について事前相談。問題なしとの回答あり。
2020/08/07	・実習施設のうち、実習生受け入れ可能な施設にて実習開始。
2020/08/17	・実習生 3 名を対象に学内実習を開始（全 24 日間、9/17 まで）。
2020/09/17	・学内実習の終了。配属予定機関・施設に報告。成績評価への協力依頼・承諾。
2021/02/21	・オンデマンド型実習報告会の YouTube 動画の限定公開。
2021/03/02	・ZOOM を用いて、オンライン実習協議会を開催。

2. 「学内実習」の方法

全 24 日間の日程を、第 1 から第 4 フェーズに分け、社会福祉士科目確認指針「相談援助実習」の教育に含むべき事項を網羅するものとした。各日のタイムスケジュールは、労働基準法に定める時間制限、休憩、休日等の規定を準用し、7.5 時間までとした(図 1)。

学内実習の対象学生は、科目履修学生全 12 名のうち、COVID-19 により実習が困難となり、期間内に代わりの実習先が調整できなかった 3 名を対象とした。事前に、書面及び口頭にて、プログラム内容、学内実習に至るまでの経緯、監督官庁事務連絡等により単位認定が可能であること、学内実習を受けない選択ができること、受けない場合には次年度に再履修となることを示した上で、受講の合意を得て実施した。3 名の保護者（保証人）に対しても上記同様の報告を行い、了承を得た。

学修教材は、C-Learning 上に事前登録し、学生には、小テスト・アンケートへの回答、レポート課題の作成及び提出を行わせた。アクセス及び提出時間が記録されるため、厳格な学修管理を行いつつ、個々の学生に学修成果物を用いた個別指導及びフォローアップを行った。

併せて、学内で完結するのではなく、可能な限り大学外の社会資源に触れられるよう配慮した。具体的には、ZOOM を用いた双方向型 Web セミナーへの参加、社会福祉協議会の生活支援コーディネーターへのインタビュー調査、就労継続支援 A 型事業所及び放課後等デイサービスでの一日実習を行った。

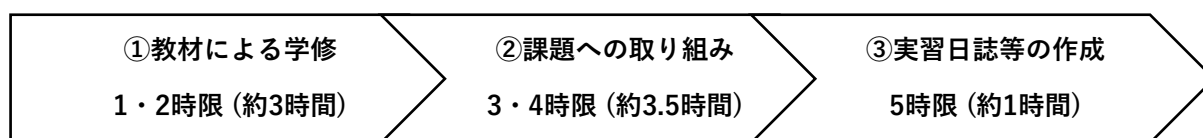


図1 学内実習一日（約 7.5 時間）の流れ

4. 結果と考察

学修成果は、日々の実習日誌及び実習報告書作成の他、面接技術動画、実習報告プレゼンテーション動画の撮影を行い、実習指導者に報告した。学内実習の成績評価について、これらの学修成果物を基に、実習指導者に依頼した。実習指導者からは、この学内実習全般に対して「オンラインでの取り組みは、施設職員として大変助かった。」、「どの学生の発表も真摯に取り組まれており、しっかり学ばれていると感じた。」といった肯定的なものであった。一方、学内実習生からは「充実したプログラムを用意してもらったと感謝している。」、「自分としては「施設実習の人に、負けていけない」という気持ちで、一生懸命に取り組んだ。」、「正直な気持ちを言うと、やっぱり現場で実習したかった。これからも実習機関を訪ねる機会を頂けるので、そのときに学び取り戻したい。」との感想が示され、成果と課題の両面が示された。

COVID-19 の終息にはまだ至っておらず、来年度も医療機関等での配属型実習が難しいことが憂慮される。大学教育の基本は対面授業（配属型実習）であることを念頭に置きつつ、危機管理上、学内実習についても、改善を行いつつ、引き続き備える必要があるものと考えられる。

資料

- 1) 岡本仁宏 (2020) 新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて 知恵と情報を共有するグループ, Facebook.
- 2) ソーシャルワーク教育学校連盟 (2020). 新型コロナウイルス感染拡大傾向に伴う社会福祉士及び精神保健福祉士養成教育に対する考えについて.
- 3) 文部科学省, 厚生労働省 (2020). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校, 養成所及び養成施設等の対応について. 事務連絡令和 2 年 2 月 28 日付.
- 4) YouTube 動画「HBG 実習報告会 2020 (社会福祉士・精神保健福祉士)」, URL: <https://youtu.be/kTeUqypqr80> (2021.限定公開)

アクティブ・ラーニング実践報告の総評

学芸学部 子ども学科 山崎 晃

今回行われた FD 研修会でのプレゼンテーションを拝聴して感じたことや考えたことなどについて記します。今回の研修会の目的は、『「対話」の教育を基盤としてアクティブ・ラーニングを始めとする教育方法の改善・充実を図るために、十分な学びのための体制をどのように整えたかに関する情報の共有を図り、それをヒントにして自らの授業について省察し、改善するため』であったと捉えました。結論から申し上げますと、「教育方法の改善・充実を図るために、十分な学びのための体制をどのように整えたか」について、今回のFD研修の目的は、達成されたと言えると思います。それは以下のような理由からです。

今回のプレゼンテーションは、新型コロナウイルスの感染拡大により生じた、『オンライン授業におけるアクティブ・ラーニング』に関して授業の準備から実際の授業とその後の対応に関する気づきや課題、対応策など、についての内容であったと思います。具体的には、以下のような情報提供・話題提供としてまとめてみました。

1) アクティブ・ラーニング実践の多様さと活用方法

C-Learning の活用、オンライン授業における音声データの活用、様々な ICT ツールを活用した授業実践、実習教育に関する試み等の紹介がありました。授業内容に係る情報を、C-Learning の教材倉庫や GoogleDrive などに保存し、学生が自由に復習することができるシステムを構築するアイデアはとりわけ興味深いものでした。

また、このような工夫をすることによって教員自身が授業の内容やそこでの話し方、プレゼンテーションの仕方などを振り返る機会になったという話は、どの教員にも大いに参考になるものであると思います。

2) 多様なツールの活用と検証

C-Learning、音声データ、ビデオ映像データに加えて、さらなるツールの開発や活用が進み、今後さらに多くの授業で多様なツールが使われるようになることは疑いのないことだと思います。そのことに関していくつか考えておいた方がよいと思われる点を述べます。

(1) 活用と検証

今回の FD 研修会におけるプレゼンテーションは、授業の見直し・改善のヒントとなり、今後の授業の在り方を示しているとともに課題を浮き彫りにする機会になりました。アクティブ・ラーニングと授業との関係について深く考えるきっかけとなったと言えます。申し上げるまでもなく、アクティブは主体的な活動が主となりますが、どれほど学生が主体的に学んだのか、どのような工夫・提示がアクティブな学習につながったのかについて考えてみる必要があるのではないでしょうか。すなわち、それらのツールを授業のどの段階、どの過程、どこのタイミングで活用することがアクティブな学習につながるのか、一人一人の教員が自らの授業について、その効果を検証することは必然であると思います。

(2) 一般化の可能性：シラバスや授業への反映

今回のプレゼンテーションで紹介された手法や技術がどこまで一般化や活用ができるのかについて、検討する必要があると思います。とりわけ、「実習」や「演習」などの授業について、ど

のように広げていくことができるか、15回の講義の中のどこで活用することが効果的かなど検証していく必要があるように思います。

言い古されたことかも知れませんが、改めてPDCAの実施・確認が必要なこともありそうです。例えば、全国の大学でオンラインによる授業についての学生の評価は、概ね対面授業よりも高いか同等であるようです。しかし、平均値は高いか同等であったとしても、評価に関する得点分布なども合わせて確認する必要があります。また、リモートでの授業が良い、合っているという学生もいますが、反対に対面授業がよいという学生もいるようです。多様な学生の特性・ニーズをどのようにくみ取り、どのように対応するかを考えていく時期に来ていると思われれます。

学生を対象とした調査について、調査内容と手続きを工夫する必要もあります。回答の質を保証できるような質問を入れた質問項目にすることも必要です。

最後に、今回のFD研修会は、「主体的・対話的で深い学び」、「積極的・能動的な授業・学習」、「双方向の対話・情報交換」などアクティブ・ラーニングの基本構造をどのように実現してゆくかという課題に対するヒントとなったと思います。先生方から提供していただいた情報とアクティブ・ラーニングとを関連づけ、消化するまでには少し時間がかかりそうです。しかし、今回のプレゼンテーションから多くの情報や示唆が得られことから、貴重な研修でした。コロナ禍における大学教育、授業がどうあるべきかを考えるきっかけともなりました。

最後になりますが、ご発表いただきました4名の先生方に心より御礼申し上げます。

ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ報告

広島大学教育本部 吉田 香奈

1. はじめに

2021年3月12日(金)13:30より約3時間にわたってティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップの講師を担当させていただきました。当初は対面型でのワークショップを予定しておりましたが、コロナ感染の危険からオンラインでのワークショップに切り替えての実施となりました。年度末のご多用中にも関わらず多くの先生方にご参加いただき大変ありがとうございました。また、今回、講師としてお招きいただきました坂越正樹学長、松元健治副学長、FD委員長の山崎昌廣先生に心より御礼申し上げます。以下、ワークショップの概要をご報告させていただきます。

2. ワークショップの概要

(1) 事前準備

今回、ワークショップに先立ち、「ボトムアップ法ワークシート」、「スタートアップシート」の2つを作成して前日までに提出して頂きました。ボトムアップ法とは日頃の具体的な取り組みから理念を明確にする方法です。この方法により、ティーチング・ポートフォリオ(以下TPと略記します)の構成要素である教育の理念—方法—成果—今後の目標を1枚のシートに整理することができます。通常は印刷されたワークシートを使用し、ふせんを貼りながら作業を行いますが、今回はオンライン研修のため、パワーポイント上で作業を行っていただきました。これをスタートアップシートの作成と組み合わせることで、TPの作成にスムーズに進むことが可能になります。前日までに看護学部27名、人間健康学部4名、学芸・子ども学科3名、短期大学4名の計38名の先生方からご提出いただきました。

(2) 当日の流れ(前半)

当日は事前課題をご提出頂いた先生方以外にも、見学のみの方を含め、70名を超える皆さまにワークショップにご参加いただきました。

ワークショップ前半では、まず「ティーチング・ポートフォリオの作成について」と題して講師よりTPの概要説明を行いました。



スタートアップシートの作成

- スタートアップシートとは「ティーチング・ポートフォリオを書くための準備」を行うためのシートです。Wordで作成します。
- 所要時間は1~2時間です。

※このシートは、ワークショップの事前課題として提出していただく必要があります。

ワークショップの流れ


13:30-14:20 (50分) ティーチング・ポートフォリオの作成について

14:20-15:20 (60分) グループディスカッション

- Microsoft Teamsのブレイクアウトルームで実施
- 各自のボトムアップ法シートの発表&情報交換(各5分程度)
- ※二人以上が同室にいる場合はマイク付きイヤホンでご参加ください

15:20-15:50 (30分) 全体討論

15:50 閉会



TPは大学等の教員が自分の授業や指導において投じた教育努力の少なくとも一部を、目に見える形で自分及び第三者に伝えるために効率的・効果的に記録に残そうとする教育業績ファイルであり、北米で生まれ、現在は世界の3,000以上の大学で採用されています。その主な目的は(1)採用・テニユア取得・昇任人事における教育評価、(2)自己省察を通じた教育改善、にあります。日本では、1990年代後半にはすでに北米の動向が紹介されていましたが、2000年代半ば以降ワークショップを通じて作成する大学が増加し、文部科学省の調査では2018年現在、約3割の大学で作成されています。TPの分量はA4で7-10枚程度であり、自身の教育活動を省察しながら、資料(エビデンス)に基づいて執筆を行う点に大きな特徴があります。内容は、1)教育の責任、2)教育の理念、3)教育の目的・方法、4)教育の成果、5)教育改善の取り組み、6)今後の目標、7)添付資料、で構成されるのが一般的です。TPは一人でも執筆することはできますが、可能であれば第三者に目を通してもらい、対話を通じた「気づき」を得ることによって深い省察が可能になると言われます。日本国内で実施されているTP作成ワークショップではメンティとメンターの1対1の対話(メンタリング)と、それを踏まえた執筆が行われることが多い傾向にあります。今回の研修では、メンターの役割、ワークショップの開催方法、TP作成のメリット等についてもご紹介させていただきます。

(3) 当日の流れ (後半)

ワークショップ後半では、事前課題として提出したボトムアップ法ワークシートを用いたグループワークを実施しました。これは、お互いの教育理念や教育方法を知り、情報交換を行うことを目的としたものです。1グループを3~4人で構成し、Microsoft Teamsのブレイクアウトルームを利用して11グループに分かれ、約1時間にわたるディスカッションを行いました。ワークシートの画面共有が上手くいかない等のトラブルも若干ありましたが、概ねスムーズに行われました。

グループディスカッション(60分間)の進め方



これよりブレイクアウトルームに移動します。移動後、カメラと音声をONIにしてください。

- (1)簡単な自己紹介を行います。
- (2)司会者、報告者を決めます。
司会者…グループワークの司会、タイムキーパー
 報告者…グループワークの内容を全体討論で報告
- (3)報告の順番を決めます
- (4)1番目の報告者は自身の「ボトムアップ法ワークシート」を立ち上げて画面共有してください。

①ワークシートを用いて教育活動、教育方法、教育理念、成果、今後の目標を説明する(10分)

②情報交換(5分)

※全員の報告終了後、グループワークの感想を出しあってください

最後に、メインルームに戻って全体討論を行いました。まず、各グループよりグループワーク報告をして頂きましたところ、「改めて教育理念や方法を見直す良い機会になった」「他学部の先生と教育方法についてお話することができて良かった」等の意見が寄せられました。さらに、TPの完成に向けて必要なことやTPの普及に向けて必要なことについても議論を行いました。フロアの先生方からはTPの評価への活用やメンターの役割などについてご質問・ご意見が寄せられました。

3. おわりに

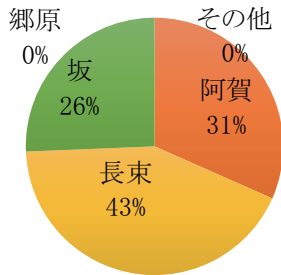
今回、ワークショップの講師をさせていただき、先生方が各グループで活発にご議論されている様子を拝見することができて大変嬉しく、また私自身も大きな刺激を受けました。今後、貴学においてTPの作成が進み、ますます教育活動が充実したものになることを心よりお祈りしております。

アンケート集計結果

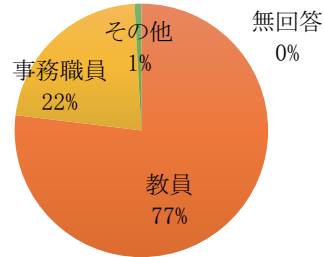
アンケート回答数 117名

参加者 第1部・第2部両方 51名
 第1部のみ 63名
 第2部のみ 3名

1. 所属

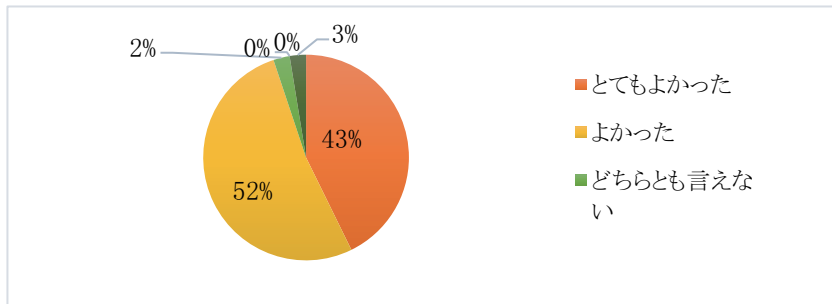


2. 教職員の区分

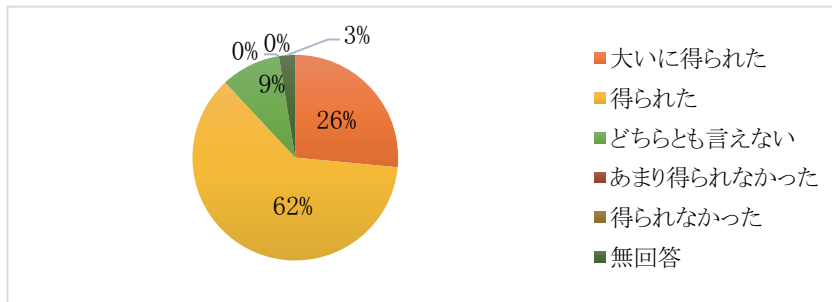


3. 第1部「アクティブ・ラーニング実践報告」について

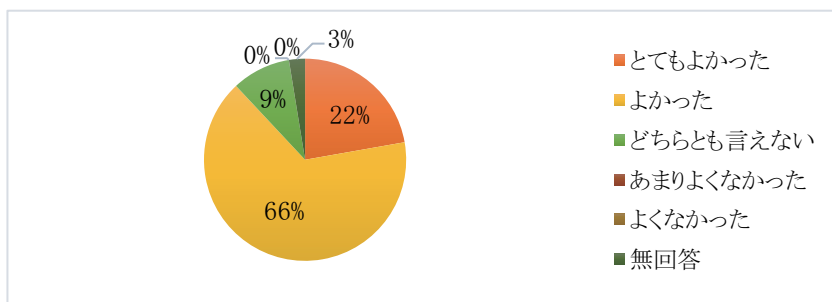
1) 実践報告の内容はいかがでしたか。



2) 今後に生かせそうな情報やアイデアが得られましたか。



3) 進行・スケジュールはいかがでしたか。



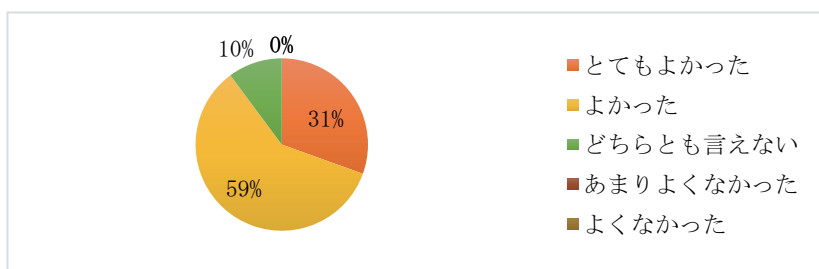
- 4) 第1部について、改善した方がいいと思われることがありましたらご記入ください。
- ・入学支援センターでも高校生向けの WEB ガイダンスを1年間やってきて、受け手の反応が見えず、非常に苦労した1年間だった。今回、主体的に参加してもらい取り組み例が提示されたので、非常に参考になった。特に参考になったのは、「録音・録画しておくことでゆとりを持って講座を進められる、省みることができる」というところでした。C-Learning がどんなものか見たことがないので、実際に使用されている教材を見れるとイメージがわいて嬉しいです。
 - ・授業での取り組みをお聞きし参考になりました。
 - ・マイクが雑音も拾ってしまい、聞き取りにくいところがあった。
 - ・特にありません。勉強になりました。
 - ・馴れない Teams で音声が出ず、近くの教員と一緒に研修会に参加した。
新たな試みをする場合、こちらの事前勉強もだが、分からない人に教えることを考えて「作業の進め方」を作成してほしい。資料と違う画面が出ると不安になった。
 - ・司会者の画面が暗いので照明入れてほしいです。また、発言者のマイクが内臓マイクでホワイトノイズが気になりました。発表者には簡易的なオーディオインタフェースでマイク接続してはどうでしょうか。
 - ・アクティブ・ラーニングの部分がもう一つだった。
 - ・ICTに堪能な方ばかりの発表だったと思いますが、苦手な中で何とかやり終えたという方の発表もあるとよかったです。
 - ・オンライン授業と対面授業との比較ですが、これはそれぞれが特徴を持っているのでその効果の違いをデータで示していただければと思いました。また、C-Learning はオンライン授業の一部かもしれませんが、どちらかといえばメールでのやり取りといった感じですが、これも特徴を持っていますが、対面とは大きく違った感じですか。コロナ禍では、学生の孤立化が問題とされています。この方面での解決策として、効果的なものはないのでしょうか。
 - ・内容はどの発表も参考になり、自身が今年度コロナ対応の中手探り状態で行ってきた教育活動に対する評価につなげることや、今後の参考になる内容ばかりでした。
 - ・具体的な内容例があると、とても分かりやすい。
 - ・もっと時間が欲しい。
 - ・質問時間のために事例を少なくする。
 - ・長東キャンパスは、C-Learning で動画を使用することに対して、厳しく制限されたと思います。Teams とか使用しても良かったのかと思って、驚きました。
 - ・先生方の教育に対する熱意が感じ取れました。
 - ・実践報告はとても参考になります。改善点は特にないです。
 - ・手を挙げるボタンをスルーされていた先生がいたので（制限時間前に）、拾って差し上げた方が良かったかなと思いました。
 - ・教員の取り組まれているアクティブ・ラーニングや C-Learning の実践を伺うことができ大変興味深かった。ただ、発表される教員によっては時間をオーバーされていたので気になった。
 - ・発表時間や討論の時間を長くしてほしい。
 - ・もう少し意見交換ができれば良かった。
 - ・時間配分の工夫があると良かったと思います。最後は押し押しでしたし。総評の時にプレゼン

テーションがうまくいかなかったことは反省でした。発表を窺ってからと思いましたが、事前に提出できず失礼しました。リハーサルの際に確認すればよかったと反省しています。

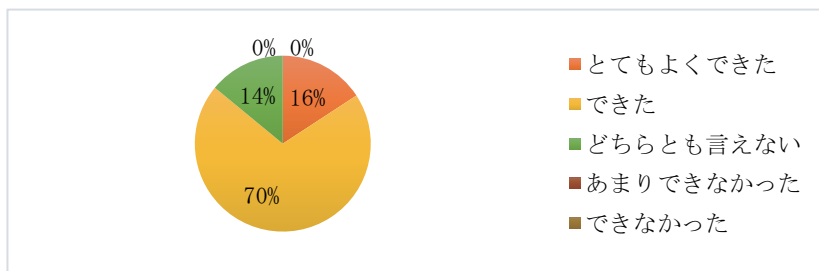
- ・教員の皆様が日頃どのような視点でアクティブ・ラーニングを実践されているか、お聞きできてよかったです。
- ・DVD 活用の授業プランが多いように思いました。
- ・意見ですが、口頭での質疑と並行して、チャット等への意見の書き込みを活用するのもよいのではないかと思います。
- ・今後 online 授業が増えてくると思いますので、①教員の提供するシステムを統一したほうが良いのではないのでしょうか？ ②学生側ではスマホでは限界があるので、全員コンピューターを所持する体制作りが必要です。
- ・アクティブ・ラーニングを実践しておられる先生方のアイデアの賜物です。参考になりました。
- ・発表者が次への課題や問題点を明確にされているので、それに対して本学ではどのように取り組む必要があるのかを検討する場や時間があるとさらに良かったと思います。

4. 第2部「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」について

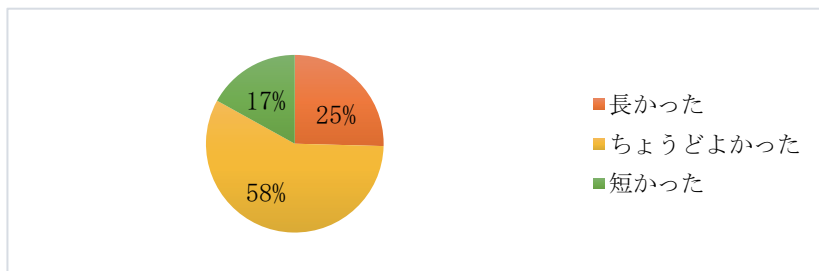
1) 研修内容はいかがでしたか。



2) ティーチング・ポートフォリオについて理解を深めることができましたか。



3) 研修時間はいかがでしたか。



4) 第2部について、ご意見・ご質問等がありましたらご記入ください。

- ・ポートフォリオを作成するのは大変でしたが、完璧ではない状況でありながらも何を大切に教育活動を行っているのかを見つめることができました。この先も引き続き取り組むべきことがあると思うと恐ろしいですが、経験則に基づいて教育活動をしている面が強いこともポートフォリオ作成で実感したので、経験則ではない教育活動へシフトチェンジしていけるよう取り組んでいけたら・・・・・・・・・・と思いました。
- ・教育について話し合えて、楽しい時間でした。
- ・ディスカッションの時間が短かったのが残念。
- ・Mentee や Mentor の用語は日本語になじんでいない気がします。相談者・実行者や支援者の様に変えられたらと思います。
- ・第2部は最初の講師のお話のみ視聴しました。
- ・ワークショップの前の説明を聞いただけですが、先生の説明が分かりやすかったです。ティーチング・ポートフォリオを作成する大変さが理解できました。
- ・自分の教育実践に活かしたい。
- ・大変そうだな、と思いました。
- ・足早だったので、もう少しディスカッションできる環境があればと思う。
- ・第2部は、最初のご講義部分だけ参加いたしましたので、少しでも実際に自分で作成した資料をもとに参加できたら、さらによかったのだらうな…と参加した教員から聞いて思いました。
- ・知らないことが多く、大変ためになった。
- ・ポートフォリオを完成させる仕組みが必要
- ・グループワークでの対話を通して TP への理解が深まっていたと思います。
- ・作成するところまでの導入があってほしい。
- ・ポートフォリオの作り方がわかったが作成に時間がかかるため、作成する意義などを考えて採用すべきだと感じた。
- ・学部学科が違うメンバーでグループになると細かな説明が必要なので時間が足りなかったよう。研修の内容にもよるが、今回の内容と時間配分の場合は同じ学科でのグルーピングの方がよかったと思った。
- ・前日までに、ポートフォリオ作成の意味があったのだろうか？
- ・グループ番号をはやめに知らせて欲しかった。
- ・自分の授業について理念との関連などをあらためて考えることができましたし、他の教員の授業の工夫なども具体的に知ることができ、とても参考になりました。
- ・ポートフォリオの最終形がまだ良くわかっておりません。
- ・継続しての学習調整機会が必要と思います。
- ・後半に関しては当然事前の準備がされていないと参加は難しいが、そのような事前のお知らせが受講者に届いていなかったような気がします。前々日の教授会で初めて知りました。
- ・今回は作成の準備段階という感じであったが、今後きちんと仕上げていくために、大学としてどのように進めていくのかについて早めに示してもらうのがよい。
- ・現在、自己点検評価や教育評価も行っていて、さらにティーチング・ポートフォリオを導入？補助金のためといっても、それが学生に還元できるように効率よく工夫する仕組みが必要ではな

いでしょうか。IT 技術を駆使していく必要がありそうです。

- ・ 2 部の講義のみ参加しました。

5. 全体を通して FD 研修会へのご意見・ご感想等がありましたらご記入ください。

- ・ コロナの影響で、先生方が様々工夫された結果が知れてよかった。今後に生かしたい。
- ・ いつも、日頃に活かせる内容をありがとうございます。
- ・ 先生方の教材作成の工夫を学ばせていただけて、大変参考になりました。貴重な時間をありがとうございました。
- ・ 先生方の取り組みや問題点・改善点を知ることができ、勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 新しい言葉を知り、検索しながら研修できてよかった。
- ・ 午後の参加が難しいので第 1 部終了で回答させていただきます。本日はありがとうございました。今年度、想定外の緊急対応の中、先生方が色々ご苦労されている点、気付かせていただいたように思います。今後も、ご健康には十分に留意されて学生さんにとってより充実した授業をされるように願っています。
- ・ 授業者が授業の在り方をどのように考え実践されているのかを知ることができるきっかけとなる内容で参考となりました。ありがとうございました。
事務方が研修に参加して、「研修内容は聞くだけで、その後どうするのかは自分で考えね」では、研修のねらいが薄れて、寂しし研修になるとお粗末すぎ心配しています。事務方は研修から何を学ぶのかなど、具体の方向性はある程度、委員会で示して、参加をうながさないと事務方からは不満が溜まり、教職協同が名ばかりになってしまう懸念を感じています。
- ・ オンラインで研修が視聴できて良かったと思います。先生方の工夫された取り組みなどが学べましたので、参考になりました。ありがとうございました。
- ・ キャンパス移動をせずに受講できる、オンライン開催はありがたい。遠隔授業を受講する側の心理も体験できる。今後も可能な限りオンライン開催を希望するが、同時にいつ発信者側になっても良いように、配信方法も学ばなければならないと感じた。meet、zoom などの配信方法の研修も今後あるとありがたい。
- ・ 今後取り入れたい C-Learning の使い方を知ることができました。ありがとうございました。
- ・ 他学部の先生方とのディスカッションは多角的な見解を得る機会となりとても有意義でした。ありがとうございました。
- ・ 全員の TP 完成まで、支援してほしい。
- ・ とても充実した研修会でした。もっと時間が欲しかった。意見交換、発表の時間の確保。
- ・ 全て良かったです。もっと時間がほしかった。
- ・ 勉強になりました。有難うございました。
- ・ 第 1 部では、先生方の取り組み内容を拝聴し、自身の授業で取り入れることができることを見つけることができました。第 2 部では、事前準備は大変でしたが、ワークに参加することで意見交換でき、大変参考になりました。シートの作成は大変でしたが、今後に繋がる研修となりました。ありがとうございました。
- ・ 金澤先生の報告はとても分かりやすかったです。これからも、就職キャリア支援の実践の中で、

遠隔による支援の可能性を探っていきたいと思います（例、①看護学部と食物栄養学科の学生の交流、②看護学部、子ども学科と保育学科の学生の交流、③子ども学科と食物栄養学科の学生の交流…などによるキャリア意識の形成など）。また、ルーブリックについて、改めて振り返るきっかけとなって良かったです。就職キャリア支援を通じて、キャリアセンターも学生の自立を促していくわけですが、ルーブリックの考え方の特徴を生かし、学生個々の課題と向き合って、一人ひとりの夢の実現に向けた支援を行っていきたいと思います。

- ・早い段階から創意工夫をされながら、遠隔授業を確立された様子がよく分かりました。勉強になりました。
- ・オンライン研修とてもよかったです（PPTなどが見えやすい、質問もチャットでもできる）。今後も続けていただきたいです。長束⇄坂の交通費減にもなると思います。
- ・各教員が授業をよく工夫されていることが分かり、参考になりました。
- ・実践交流は自らの実践を反省する上で大変参考になった。
- ・オンライン開催のご準備おつかれさまでした。一度で理解できなかったところは、改めて勉強していこうと思います。きっかけをいただき、ありがとうございました。
- ・年度末の研修は避けてほしいです。事前課題にかなり時間が必要な場合は尚更です。今年は予定が延期延期でしたようなので仕方ないとは思いますが・・・。
- ・勉強になりましたが、ポートフォリオ作成には時間を要し、きつかったです。
- ・他の方の実践をお聞きすることは、とてもためになります。特にオンライン授業のことや、アクティブ・ラーニングのことなど、ヒントになることが多くあるのでありがたいです。
- ・大学内のシステムに感激しました。通信状態がよくないこともあるのかなとおもっていました。Webで開催されても内容がよくわかった。
- ・自分自身の授業を客観的に見直す良い機会となりました。
- ・今後もオンラインをうまく活用しながら取り組むのがよい。
- ・事前課題のある研修会は3月を外してほしい。
- ・オンデマンドで研修を受けれるようにしてほしいです。

（第2部）ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップの様子



講師 広島大学教育本部 吉田香奈先生

3. アクティブ・ラーニング授業紹介

「セミナーⅡ」におけるアクティブ・ラーニングの実践

ークリスマスイベントの企画・実施への取り組みー

コミュニティ生活学科 廣澤 美花

食物栄養学科の「調理学」におけるC-Learningを活用した授業の実践

食物栄養学科 村田 美穂子

遠隔授業におけるアクティブ・ラーニングのための幾つかの技術的工夫

保育学科 黒木 貴人

主権者教育における模擬投票授業の実践報告

学芸学部 子ども学科 二階堂 年恵

声楽教育におけるアクティブ・ラーニングの活用と課題

学芸学部 音楽学科 藤井 雄介

アクティブ・ラーニングによる看護技術教育の実践

ー授業科目「援助方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」でICEモデルを活用した講義・演習の展開ー

看護学部 看護学科 石川孝則、迫田千加子、新川雅子

川田綾子、武智朋子、佐々木秀美

広島文化学園大学アクティブ・ラーニング実践報告

コロナ渦における保健体育科教育法の実践について

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 前田一篤

「セミナーⅡ」におけるアクティブ・ラーニングの実践 ークリスマスイベントの企画・実施への取り組みー

コミュニティ生活学科 廣澤 美花

1. はじめに

コミュニティ生活学科では、セミナー活動や2年間の集大成である卒業制作発表等のイベント実施を中心に、コミュニケーション能力、チームワーク力、向上心や責任感等を身につける取り組みを行っている。特に、ブライダルセミナーに属する学生は、種々のイベントを企画・実施する授業科目を受講している場合が多い。2年前期の「ブライダルプランニング」では、オープンキャンパスに参加する高校生を対象としたブライダルイベントを企画・実施し、2年後期の「ブライダルコーディネイト演習」では、卒業制作パーティーのなかでブライダルショーを行う。

そのため、セミナー生には、オープンキャンパスのイベント・卒業制作のブライダルショー開催に向け、アクティブ・ラーニングの手法を使いながら、受講生全員が協力して取り組んでいくコミュニケーション力（聞く力・話す力・発表する力等）を、段階を踏んで身につけてほしい。

その第一段階の学びとして、1年後期「セミナーⅡ」の授業で取り組んだクリスマスイベントの企画・実施について報告する。

2. 「セミナーⅡ」授業概要

(1) 受講学生

コミュニティ生活学科1年生 ブライダルセミナー17名

クリスマスイベントの実施は、フードセミナー（7名）と合同で行う。

(2) 講義期間

令和2年9月23日（水）～令和3年1月20日（水）

(3) 授業計画

「セミナーⅡ」の授業計画（内訳）は以下である。

後期授業計画について①、キャリアセンター主催の就職ガイダンス①②③、卒業研究に向けて①②③、社会人としてのマナー①②③、クリスマスイベント①②③④、後期のまとめ①、計15回

3. クリスマスイベント実施のための授業内容

(1) 授業目的

クリスマスイベントを実施するにあたり、教員による一方向的な講義形式ではなく、セミナー生たちの主体的・能動的な学習（書く・話す・考える・発表する・実践する等）を促す。

(2) 授業の進め方

①まず、イベント開催の基本事項を教員より伝え、各人確認する。

②グループ分けについて考える。その後、各グループに分かれ、話し合いを行う。

③グループのリーダー・サブリーダーが取りまとめた内容を発表する。

他の意見を受け取り、内容の修正・追加等を行う。

- ④グループ毎に、それぞれ必要な準備を行う。
- ⑤全体のリハーサルを行う。
- ⑥クリスマスイベントを実施する。

(3) クリスマスイベント実施内容

実施日は「セミナーⅡ」の年内最終日 12月16日(水)3限とし、会場はブライダルセミナーが通常授業を行っている8101教室を使用する。

話し合いの結果、会場のレイアウトは写真1に決定した。

グループ分けは、以下の4つになった。

- ① 料理担当グループ (フードセミナー)
- ② 会場装飾担当グループ
- ③ ドリンク担当グループ
- ④ ゲーム担当グループ×2

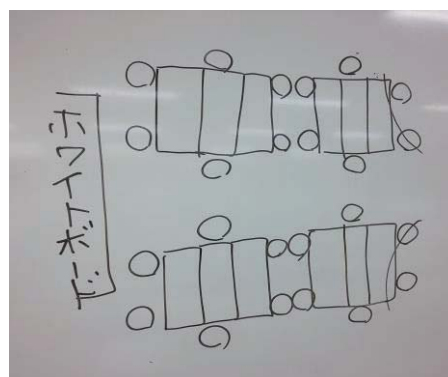


写真1 会場レイアウト

(4) クリスマスイベント当日

イベント実施に向け準備を進めていたが、新型コロナウイルスの感染者数が増加してきたため、当初予定していた実施日12月16日(水)を12月2日(水)へ前倒しに変更し、会場のレイアウトも対面を避けるためシアター形式に変更した。

また、フードセミナーの料理担当グループは、クリスマスイベント用のケーキや料理メニューについて話し合い、試作を行っていたが料理提供は取りやめた(写真2)。ドリンク担当グループは、参加者から好みの飲み物についてアンケートを行い、集計し、準備を進めていたが、こちらも提供を取りやめた(写真3)。さらに、ゲーム担当グループのゲーム内容も、できるだけ接触の少ない内容へ変更した(写真4・5)。

したがって、実施する内容は大幅に削減されることになった。その結果、会場内の装飾は、担当グループに関係なく、みんなで飾り付けを行い、会場の準備をすることにした。



写真2 てまり寿司(試作)

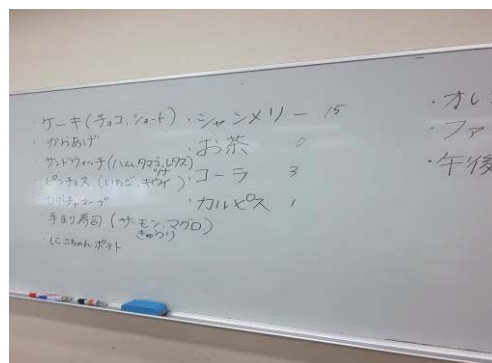


写真3 料理・ドリンクメニュー



写真4 ゲーム① じゃんけん大会



写真5 ゲーム② ビンゴ大会

4. クリスマスイベントを終えて

「セミナーⅡ」初回の授業で、クリスマスイベント実施について伝えたところ、セミナー生たちが大変喜んだ姿が印象に残っている。4月に入学して以来、オンラインの授業期間があり、学内のイベントが軒並み中止になっていたため、交流を深める機会が少なかったことが理由として考えられるだろう。しかし、コロナ禍でのクリスマスイベントの実施は、社会情勢を考慮して、日程を早め、内容も大幅に変更することになった。残念な結果ではあるが、そのような状況であっても、みんなで話し合い、協力して準備を行い、楽しそうに参加している姿を見ることができた（写真6）。



写真6 集合写真

5. まとめ

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、私たちを取り巻く社会、生活様式や学校教育等が大きく変化した。今回の感染症の影響下において、「できる範囲で、できることを考え、話し合い、実践する」という新しい取り組みに挑戦できたことは、貴重な経験になった。

今後、企画・実施するイベントでは、お互いの立場や考えを認めながら、チームの目標に向かい協力することにより、継続的にコミュニケーション力を伸ばしていきたい。

食物栄養学科の「調理学」におけるC-Learningを活用した授業の実践

食物栄養学科 村田 美穂子

1. はじめに

令和2年度前期は、C-Learningを使用したオンライン授業と対面授業の両方の授業形態で「調理学」の授業を実施した。対面授業においても、C-Learningのコンテンツを活用した授業を行ったので、今回の実践について報告する。

2. 授業概要

(1) 授業科目

調理学（食物栄養学科1年生の前期開講科目、卒業必修科目、栄養士免許必修科目）

(2) 授業の目的

調理学は、栄養士として必要な給食の運営に関する最新の知見を取り入れた専門的知識を理解させるため、食品に様々な調理操作を加えることにより、いかに目的にあったおいしい食べ物にするかを学ぶ学問である。調理学では、食べ物の「おいしさ」や各食品のもつ特性とそれに関わる調理操作の意味を科学的に理解し、栄養士として食事作りを実践するための基礎知識を身に付けることを目的としている。

(3) 授業の流れ

調理学の授業の15回の授業テーマ及び各回における協働板にコメントするテーマを表1に示した。16回目に試験を実施した。

表1 調理学の授業のテーマ及び協働板のテーマ

NO	月日	授業形態	授業のテーマ	協働板にコメントするテーマ
1	5月8日	C-Learning	オリエンテーション調理学の意義・目的	調理で「知りたいこと」または「苦手なこと」
2	5月15日	C-Learning	食物の味/食事計画と献立作成	食物の味について。美味しいとは何か。
3	5月22日	C-Learning	食文化の歴史	食文化のスライド学習、本日の学習で印象に残ったこと、感じたこと
4	5月29日	C-Learning	調理法と調味料の役割	本日の学習で印象に残ったこと、感想など
5	6月5日	対面授業	穀類の特徴と調理①米	好きな米料理
6	6月12日	対面授業	穀類の特徴と調理②小麦粉	小麦粉を使った料理
7	6月19日	対面授業	デンプン・いも類の特徴と調理	好きないもの料理
8	6月26日	対面授業	油脂の特徴と調理	好きな揚げ物料理
9	7月3日	対面授業	豆・豆製品の特徴と調理	知っている豆料理や豆の加工品
10	7月10日	対面授業	魚貝類の特徴と調理	好きな魚料理
11	7月17日	対面授業	卵の特徴と調理	好きな卵料理、マスターしたいと思う卵料理
12	7月24日	C-Learning	牛乳・乳製品の特徴と調理	好きな牛乳・乳製品の料理（作りたいと思う料理）
13	7月31日	C-Learning	肉類の特徴と調理	肉について、資料を読んで肉の部位とその特長を書く。
14	8月7日	対面授業	野菜・くだもの特徴と調理	野菜や果物をつかったもので関心のある料理
15	8月21日	対面授業	寒天・ゼラチン・カラギーナンの調理	寒天やゼラチンを使った料理

C-Learning のみのオンライン授業（5月に4回、7月に2回）と対面授業（9回）の両方の授業形態で授業を実施したが、対面授業においても、C-Learning の協働板やレポート機能などを活用して授業を行った。

（４） C-Learning で活用したコンテンツ

C-Learning では、毎回の「出席登録」、「教材倉庫」、「協働板」、「レポート」を活用した。

①出席登録

事前に出席登録日を設定しておき、授業時間の開始時に学生に出席登録させた。

②教材倉庫

教材倉庫には、予習・復習が授業時間外にできるようスライド資料を授業日の数日前に入れて、視聴可能な状態にした。対面授業では、キーワード等を書き込める印刷物を別に配付した。オンライン授業では、学生が教材倉庫にある資料を自主的に読み、学習した。

③協働板

授業時に、毎回の授業テーマに関連する協働板のテーマを示し、必ず協働板に一人一言ずつコメントさせた（表1）。対面授業の場合は、授業開始直後の導入の時間に書き込みを指示し、その日の授業テーマへの身近な話題として、主として自分の好きな料理を中心にコメントさせた。クラスメイト達の書き込みも様々であり、短時間で学生達の興味がどういったものに向けられているのかを把握することができたので、テーマの内容へと話題をつなぐことが可能であった。

なお、C-Learning のみの授業の場合では、教材倉庫の資料を読んでから、学んだ内容や学習で印象に残ったことなどについて、授業時間内にコメントさせた。特に、第13回の肉類のテーマでは、自主学習後に一人ずつが肉の部位の特長をコメントすることにしており、学生が相互にコメントを確認し、繰り返し目に触れることにより、理解が深まったのではないかと考える。

④レポート

授業の最後には、レポート機能を使用し、その日の授業の振り返りや感想などを提出させた。昨年までは、毎回振り返りシート（ミニツツペーパー）の記入を行わせていたが、本年度はC-Learning 授業から開始したため、レポート機能を活用した。毎回の学生の授業に関する率直な感想や理解度が把握できて良かった。また、質問等が書かれていた場合には、次回の授業に追加の解説を行うなどの工夫をすることができた。

3. 授業評価と今後の課題

学生による授業評価アンケートの結果、調理学では学生達の自己評価は、「調理の分野への興味や関心」、「自分の知識や技術が身に付いた」という項目の評価は高かった。教員についての評価項目や総合的な満足度も良好であり、C-Learning のみの授業日もあったが、総合評価としては昨年度と同様の結果であり、概ね満足してくれていたものと考えている。

今回、C-Learning を使用した授業を行い、対面授業においてもC-Learning を授業に取り入れて実践できたことは大きな収穫であった。C-Learning のみのオンライン授業では、対面授業と異なるために、顔が見えず、双方向でできることに限界があることを実感したが、学生一人ひとりの理解度や学びについての思いなどがコメント等で把握できる点については、利点と感じた。C-Learning の授業での活用については、さらに工夫し授業改善したいと考えている。

遠隔授業におけるアクティブ・ラーニングのための幾つかの技術的工夫

短期大学 保育学科 黒木 貴人

1. はじめに

本報告においては、今年度実践した授業の中で行った幾つかの技術的工夫について紹介する。特定の授業実践事例の紹介というよりも、筆者が担当した授業全般における工夫の紹介となることを予めお断りしておきたい。なお、一部重なる内容は「令和2年度大学・短大FD委員会研修会」の実践報告の中で触れているので、そちらも参照していただきたい。

2. 音声データによる講義配信

筆者の担当するいずれの授業においても、○教材倉庫の資料に基づき授業内容を理解する、○資料の内容に関する議論等を、適宜協働板で行う、○授業の最後にコメント（レポート）を提出するという、いわゆるスタンダードな形で行った。教材倉庫にUPする資料の文字情報を多くしてしまうと、学生がその授業のポイントとなる内容をうまく掴めない可能性が高くなってしまう。そのため、資料に載せられる情報は平時の対面授業以上に精選する必要がある。

そのような課題を克服する一方途として、ボイスレコーダーにあらかじめ講義を録音し、それを音声データとして教材倉庫にUPするようにした。あまり長すぎてもいけないと思い、録音時間は概ね45～60分程度になるように心がけた。その音声データと共に教材倉庫の資料の内容を理解し、それを踏まえて協働板内のワーキングやプラスα資料の内容も各自学んだ上でのレポートの提出を行うことで90分の授業となるような形で構成した。

データ容量は使用機器や設定にもよると思われるが、1回の講義（45～60分）で概ね30～50MB程度であった。これは市販のボイスレコーダーの標準設定で録音したものである。この程度のデータ容量であれば、学生がスマートフォンで利用する際もそこまで気にならないと考えられる。実際、データ容量に関する学生からの問い合わせはなかった。

筆者の場合は、もともと所有していたボイスレコーダーを使用した。現在はスマートフォン・タブレット端末・パソコンには録音機能が標準装備されている。そのため、比較的利用しやすいツールであるとも言える。ただし、録音の設定や環境によってはうまく再生できなかつたり音質に課題が生じたりするため、教材としてUPする前に録音データを再生してチェックすることは必須であると言える。

また、筆者の場合は音声とパワーポイントの資料（PDF）を別々に作っていたが、パワーポイントのデータに音声を載せるというやり方もある。文字情報だけでなく音声の情報も活用する手段は様々にあるので、それぞれの授業の性質や学生の状況に応じてうまく利用していくことが肝要であると言えよう。

音声データの活用は、学生からも一定の評価があった。短大・学芸学部の4つの教職科目で実践したが、「音声データがあってスムーズに学習することができた」という授業評価アンケートの

記述もいくつか見られた。

3. ハイパーリンク

学生が自宅等で授業内容に関する発展的な内容により多くアクセスできるようにするための手段として、パワーポイントの「ハイパーリンク」の機能を後期の授業からは活用した。ハイパーリンクとは、指定された別のデータ（ウェブサイトやテキストデータなど）を開くことができる機能のことである。学生は、ハイパーリンクをクリック（タップ）することで指定された情報へアクセスすることができる。

ハイパーリンクを活用するメリットとして、第1に教材倉庫にUPする資料を整理できる。多くの内容を扱おうとするとどうしても教材倉庫にUPする資料が多くなってしまいがちだが、そうすることで学生が何回も教材倉庫に入り直す手間がかかる。ハイパーリンクを活用することによって、パワーポイントの資料一つに多くの資料を載せることができる。

第2のメリットとして、長文のテキストデータも活用できることが挙げられる。筆者の場合、授業内で教育関連の法律を扱うことが多い。条文全文を印刷すると、膨大な量となつてとても学生に配布することはできない。そのため、平時の対面授業においては法律の条文を一部抜粋する形で紙媒体の資料を配布していた。しかし、ハイパーリンクを活用することにより、生の条文全文が掲載されているリンクにアクセスすることが可能になり、自分のペースで触れることができる。

このように、ハイパーリンクを用いることによって、授業内容に関する発展的内容へどのようにアクセスすればいいか、どのような情報にアクセスすることが良いのか、ということを学生が主体的に考える契機になり得ると考えられる。実際、ハイパーリンクの資料から発展的に課題を考え、授業後に質問をしてくる学生も少なくなかった。

なお、筆者はPowerPointをメインに授業資料を作成し、そこにハイパーリンクを作成していたが、同機能はWordやExcelでも同様に搭載されている。また、ウェブサイトのリンクだけでなく自分で作成したデータをGoogleDriveなどにUPし、それを共有設定することによってハイパーリンクへ貼ることができる。

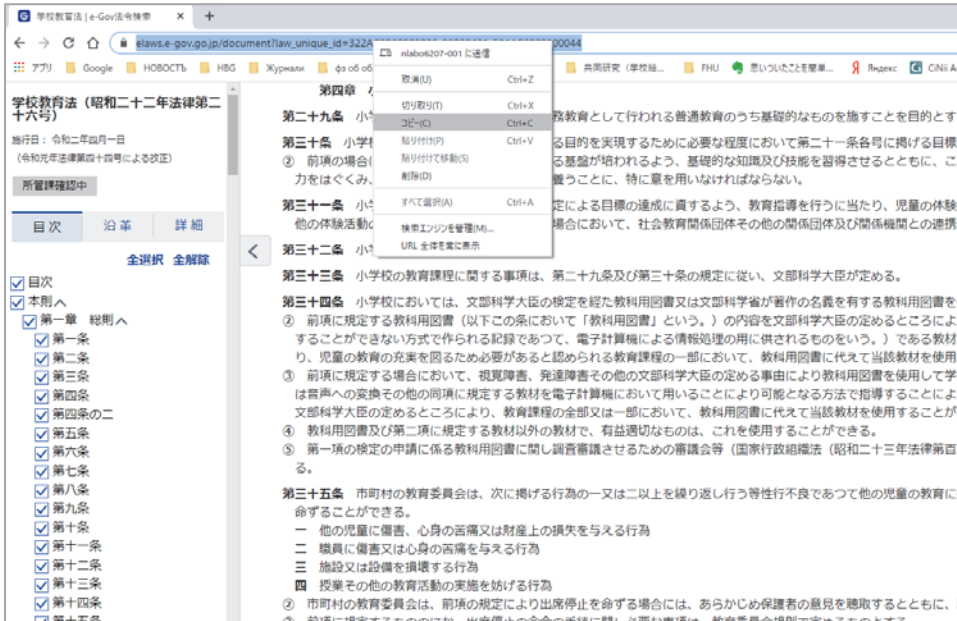
4. おわりに

以上、筆者が今年度行った技術的工夫を紹介した。すでに同じような工夫をされている先生も少なくないと思うが、細かく些末なことであってもこのような情報をお互いに共有することはコロナ禍の授業実践においては大事なことだと言える。実際、音声データの活用については他の先生が実践されていることを真似しようと思ったことがきっかけである。

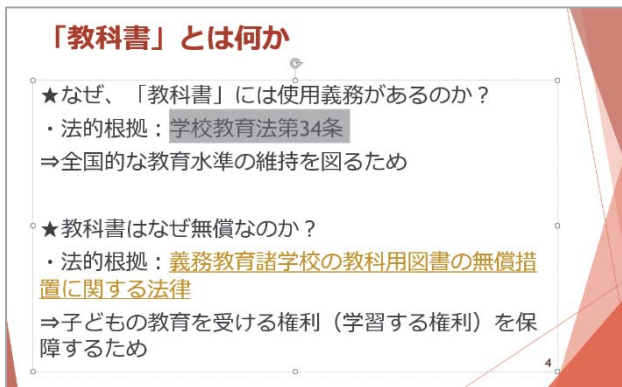
なお、次ページにハイパーリンクの作成例を掲載しているので、多少の参考となれば幸いです。

【参考】ハイパーリンクの設定の仕方

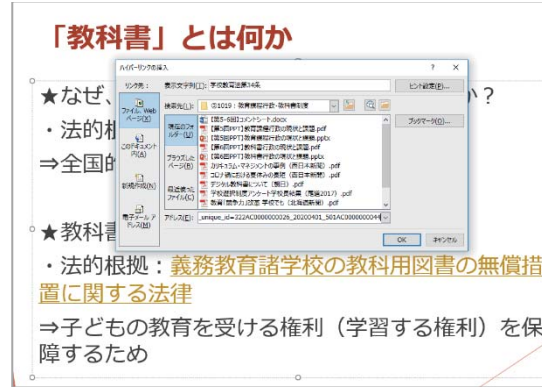
①リンクさせたい情報(URLなど)をコピーする



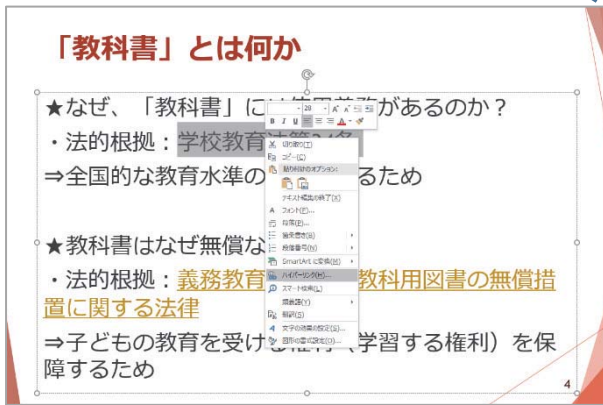
②リンクを張り付けるところをドラッグ(選択)する



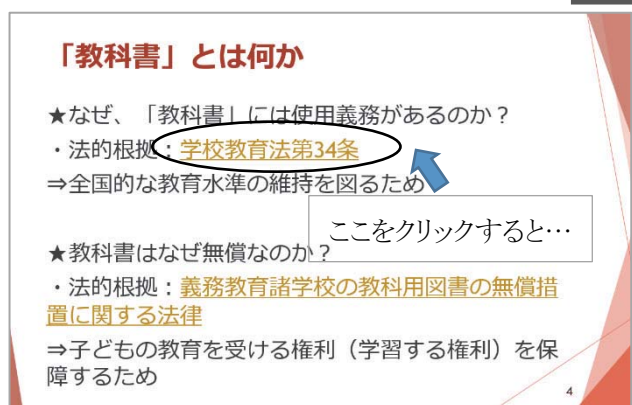
④「アドレス」へコピーした情報を張り付ける



③右クリックし、「ハイパーリンク」をクリックする



⑤ハイパーリンクの作成完了



主権者教育における模擬投票授業の実践報告

学芸学部 子ども学科 二階堂 年恵

1. はじめに

学芸学部では、1 年次前期において、「フレッシュマンセミナー(文化に生きる)」(必修)を開講している。16 名の教員によるオムニバス授業である。授業の目的の一つに、「グループ活動や一斉活動、その中での対話、アクティブ・ラーニングを通して学生の人間形成を促す」がある。

私が担当させていただいているテーマは「市民社会の一員であること」で、その内容は、社会参加に必要な素養の一つとして、人権意識を持つこと、主権者であること、そのために必要な知識や技能、価値観について理解し、考えることとしている。

そこで、主権者教育において多く取り上げられる選挙についての理解と、グループになっていくつかの政策について討論し、最後に自分たちの意志を投票する模擬投票授業を実践することにした。

2. 実践内容

この模擬投票の授業は、平成 27 年に選挙権を有する年齢が 18 歳以上に引き下げられ、これに伴って小学校においても主権者教育の重要性が検討されているのを踏まえ、筆者自らが小学校 6 年生向けに作成し、市内の小学校で実際に行った授業を、学生たちが、小学生になったつもりで、実践してもらった。

授業では、実際の政治の働きと通底する要素が多い「学校の近くの空き地に作りたいと思う施設」をテーマに、施設の設置を公約とする模擬投票を行うこととした。(実際行った小学校での実践授業の前に、事前に児童にアンケートを実施し、自分が必要だと思う施設を挙げさせ、その中の上位 3 つの施設[保育園、公園、老人ホーム]を、3 人の市長候補に割り当て、それらの施設の設置を公約としていただいた)小学生と同様に、学生 3 名に、いずれかの施設の設置を公約とする市長候補になっていただいた。

まず、「広島市長を選ぶ」の指導案(6 年生)を読み、「保育園党」、「公園党」、「老人ホーム党」各 1 名、立候補者を募り、3 名の立候補者が、それぞれ「保育園」を、「公園」を、「老人ホーム」を作りたい理由(以前授業実践させていただいた小学校 6 年生が作成したもの)を演説してもらった。それらを聞いて、他の学生たちは、自分は、何を作って欲しいのか、自分の意見・理由をワークシートに書いてもらった。

それを基に、学生達に 4 名で 1 グループとなってもらい、自分たちのグループは何を作ってもらいたいのか、ディスカッションをさせた。

最後にグループの代表が、自分たちのグループの意見をまとめ、投票箱に投票してもらった。

開票作業には、学生 2 名が選挙管理委員となって、1 名が投票用紙に書かれてある立候補者の名前を読んでもらい、あと 1 名がホワイトボードに投票結果を正の字で書いてもら

った。

投票結果は、子ども学科の学生数が多いからかもしれないが、一位が「保育園党」、二位が「老人ホーム党」、三位が「公園党」になった。

授業の最後に学生たちに書いてもらった自由記述の一部は以下のとおりである。

- ・日頃から、政治に関するニュースを見たり、記事を読んだりして、問題となっていることについて自分なりの考えを見つけていきたいと思った。
- ・模擬投票を実際にしてみて、選挙の流れが良く分かって、次回の選挙の時にはぜひ行こうと思った。
- ・グループでの話し合いは、人それぞれの意見があり、聞いていてとても面白かったし、新しい発見があり楽しかった。最後はグループ全員が納得出来る答えが出たので、良かった。
- ・若者の投票率は、高齢者の半分ということを知って驚いた。これからの未来は、若者が担っていかなければならないので、もっと選挙に行くべきだと思った。

自分たちのグループが考えて投票した施設が、当選しなくて残念に思うグループがいたが、選挙は最終的に多数決で決まる。そのため、自分が投票した候補者が大差で敗れると、1票の重みを感じにくいかもしれない。同じ1票でも、一人ひとりに考えさせる時間を十分設けることで、学生に1票の重さを考えさせることが重要であろうと考えた。

また、選挙に敗れたからといって、少数派の意見に意味がなくなるわけではない。選挙に参加するという狭義の主権者教育を超えて、一人ひとりが政治や社会にどのような考えを持って参加していくかということ尊重することにより、より充実した主権者教育を行うことが出来ると思われた。

3. おわりに

今回の実践で得られたことは、第一に、学生から広島市長候補を立て、実際に候補者には演説、他の学生には、演説に対する自分の意見について討論するグループディスカッション、模擬投票まで体験してもらったことで、学生たちは、選挙に対してこれまでは遠くを感じられていたものが身近なものに感じられるようになったことが、大きな収穫であったように感じられた。

第二に、この模擬投票授業を受けて、身近にある政治的課題について、自らの問題として考え、討論、判断して、自分の意見を持っていきたいという感想を沢山得ることが出来、今後、起こるであろう政治的諸課題に対して、自分はどう接していけばよいのかの主権者意識を身に付けることが出来たようにうかがえたことである。

今後は更に、実際に、地域での小学校、中学校、高等学校で、模擬投票の出前授業を実践されている、明るい選挙推進協議会とも連携しながら、模擬投票授業を实践し、主権者教育のより一層の充実を図っていきたいと考えている。

声楽教育におけるアクティブ・ラーニングの活用と課題

学芸学部 音楽学科 藤井 雄介

1. 従来のレッスン

音楽教育における教師対受講者による授業形態、所謂マンツーマンの実技レッスンにおいてのアクティブ・ラーニングを考えると、通常のクラス授業における受動的学修の質的転換を図る場合とは、様々な面で事情が異なっている。

もちろん教師だけが実演や技能的な説明を行い、受講者の演奏を一切伴わない実技レッスンというものは、特殊な場合を除いて現実的ではない。そのことから、音楽のレッスンそれ自体を「アクティブ・ラーニング」と言うこともできる。多くの場合受講生が実際に楽器を弾いたり声を出したりして、それについて教師が随時改善点を指摘し、どのようにしたらより良い演奏効果が得られるか、実演を交えながら説明する。このよう作業の繰り返しでレッスンを終えることが殆どであろう。筆者も声楽の分野に足を踏み入れてから、そのようなレッスンを受けながら学修を重ね、また指導の立場になってからは自分が受けてきたように、受講生に対してレッスンを行ってきたし、そのことにさしたる疑問を持つということもなかった。

しかしながら、本当に自分の行ってきた従来のレッスンそのものが、受講生にとって真の「アクティブ・ラーニング」(能動的な学び)であるか否かを改めて考えてみたとき、それは受講生にとってかなり「受動的」な方向に傾いているのではないかと気づいた。もっと言えば、先に述べたレッスン形態は「受け身一辺倒」に陥りやすい。受講生は一見能動的に声を出しているようではあるが、筆者(教師)からの改善点の指摘や実演を含んだ説明の、言わば執拗な繰り返しにより、自発的な演奏をしなくなっているように感じたのである。例えると、野球のキャッチボールを初めて経験する者が、理想とするボールの投げ方も受け方も何も教わっていない状態で、離れたところに立っている相手(教師)へとりあえずボールを投げてみるとする。そうすると有無を言わず一方的に「ちがう、こうやるんだ!」と向こうから豪速球が返ってくる。なんだか向こうで早口で色々投げ方のことを言っているがよくわからない。でも聞き返すのも悪いのでとりあえず受け流す。と、こうした不毛なことを延々と繰り返すようなものである。極端な例ではあるが、このような状態で受講生をいたずらに萎縮させ、疲弊させてしまわないように、アクティブ・ラーニングをどのように促すべきか、今年度のレッスンの中で実践した2例を挙げてみたい。

2. レッスンの中での実践例

(1) 学生A(女声)

教師が提示した曲以外にも、常に自分でも課題曲を探し、積極的にレッスンに臨む様子が見られる。しかし声換点(中音域から高音域へ声に移り変わる際のギアチェンジ部分のようなところ)において、声帯のコントロールが効かず息と声が詰まり、旋律がうまくつなげられない(レガートができない)ことがある。解決法としては呼気の圧力を一定にするため、主に下腹部から脇腹につながる筋肉群によって横隔膜の動きを制御することが重要である。学生もこの現象が良くないことは自認しているが、それが癖となってしまう、上記の方法を提示してもなかなか解決しないことが多かった。

そこでまずこの状態を自分でどう思っているか、どのようにしたいか、その為にはどのようなことに気をつけるべきか言葉にしてみよう、と言う声かけを行った。最初は言葉に詰まり、上手く説明ができなかったが、何度かレッスンを繰り返すうちに、このようになっている原因を探ることをはじめとし、自己分析が徐々にできるようになってきた。緊張感も相まって、曲の歌い出しの声がうまく出せないことも多かったが、少しずつ改善されてきたように感じる。

また模範となるような歌手の口の開け方の画像、演奏動画を一緒に試聴しながら、どのような点を真似すべきかなど、学生の自発的な感想や意見が出るまで一緒に考える、ということも行った。教師がある技能に関して「こうあるべき」という例を示せば時間的には短くて済むが、効果を見ると些細なこと、簡単な表現であっても、学習者自身が考え、言葉として発することの大切さがわかる。

(2) 学生B (男声)

学習意欲は見られるが、やはり今まで歌ってきた中での癖がついてしまっており、とくに顎周りを硬くしてしまい、表情筋だけに頼った歌唱を行っていた。顎の動きが硬く、口が開かないことで、発声とともに重要である歌詞の発音にも支障をきたしていた。ここで当然「力を抜く」という助言をするが、力を入れようとしている自覚はなく、気がついたら力が入り、体全体も硬直してしまっているという状態であった。

一番の問題となるのは「歌う」という動作を意識しすぎて必要以上の身体の「構え」が起こっていることである。その解消のため、まず非常にゆっくりと歌詞を喋ることからスタートし、どこで硬直やつまずきが起こっているかという、その確認作業を行った。単に出来ないところを通り過ぎるのではなく、原因と結果を同時に認識するように促した。

また筆者がこれまで同種の課題をどのように解決してきたか、自身も過去の自己分析を行いながら説明を行った。これは簡単な作業のように思われるが、例えば自転車が乗れるようになる前と後のように、技能を習得した後では「どうしてできなかったのか」という理由が自分でもわからないことが多分にある。筆者自身の技能習得過程を振り返る良い契機ともなった。

加えて学生Aと同様に模範となる歌手の歌唱映像や音源資料を使用したり、開口動作に係る筋肉のストレッチ動画を見たりしながら、自分の状態を言葉にして改善方法を考えていくことで、少しずつではあるが癖の矯正が可能となってきている。

3. 実践の成果と今後の課題

前項の実践例にみるように、声楽レッスンにおいて受講生のアクティブ・ラーニングを促進させる為には、教師が受講生と同じ位置（目線）から同じ方向（理想）を見る、ということが大いに有用であるといえよう。今年度はコロナ禍における対面レッスンということもあり、音楽、特に声楽部門にとっては非常に厳しい条件の中でのレッスン実施を迫られた。その中でお互いの飛沫を避ける為、距離をとり、かつ文字通り同方向を向いてレッスンを行うことがあった。これが先に述べた「同じ方向（理想）を見る」という点でかえって良い方に働いたケースもあるように感じる。対面をしていると、理解した、しないに関わらず、教師の言うことを黙って聞かなければいけないと言う心理が働いて、冒頭に述べた悪いキャッチボールのような事態が起こりやすい面もあるだろう。

また声楽においては、教師が確認できる受講生の顔や体の動きから、声帯や呼吸器官、呼吸に関係

する筋肉の状態を推測するということに限界がある。この為受講生自身が、自分の体の中で何が起きているかを認識し、修正する他にない。理想とする声を出す為にどのようなことをすべきか、自分自身の技能の足りているところ、足りないところに対して客観的に向き合っただけで考えられるように、教師の適切なアシストが必要であることも再認識した。

しかしここで大きな矛盾とも言える問題点が生じる。それはすなわち「自己流」による引き戻しが起こってしまうことである。レッスン中の教師とのやりとりや、受講生の自覚や試行錯誤の繰り返しによって、1回のレッスンの終盤にはかなりいい状態で仕上がり、双方満足感の中でレッスンを終えたとする。だが翌週レッスンを始めてみると、全く元の状態に戻り、むしろ前週より悪い状態になってしまうということがままある。音楽のレッスンにおいてこのような現象は珍しいことではないが、やはり教師側、受講生側も落胆は否めない。このような場合何があったかよくよく聞いてみると「レッスンでやったことを思い出し、自分で何回も練習した」という答えが返ってくることが多い。受講生に自覚はなくとも、レッスンによって修正した軌道のずれが、自己流による練習によって修正前よりかえって大きなものになってしまうのである。こういう場合「レッスンが終わったら歌わずに、次のレッスンまで何もしない」という勧めをすることがある。往々にしてこの助言が声楽においては功を奏することが多いのも確かである。いい状態で終わったものが、何もせずに時間を置くことによって定着するのかもしれない。

3. 総括

レッスンを継続的に受講している者であっても、しばらく受けていない状態であっても、最終的に舞台上に立ち演奏をする際にはどうあっても「能動的」にならざるを得ない。最初に述べた「受け身一辺倒」のレッスンを続けていると、いざ舞台上に放たれたときに「自力」がほとんどなくなっているということになりかねないのである。レッスンの中で、演奏本番での自分をイメージした練習も必要になってくる。ただ1曲を最初から最後まで通して歌う、というだけではなく、その途中で自分の身体や精神に何が起きると想定されるか、シミュレーションをしながらの練習が非常に効果的である。

もうひとつ、専門的に音楽を学んでいく上での根幹に関わるとも言える課題が存在する。それは技能のあるなしにかかわらず「どのような歌を歌いたいか」という理想を持つことの重要性である。「この曲を歌ってみたい」「この歌手のような声を出したい」というごくシンプルな理想が、その後の学修意欲に大きく関わってくるように思う。もしかすると歌を始めたきっかけはそのようなものであったかもしれない学生が、技能のないこと（知らないこと）を理由に方向性を見失ってしまうことがあり、歌自体が嫌になってしまうケースも見られた。もちろん複数の技能を習得した上で新たな理想が生まれてくる、ということもあるが、まずは0から1に踏み出した時の衝動を忘れさせないようにしたい。見失いそうな場合は、一度自分の好きなもの、嫌いなもの、またその理由を紙に書き出してみることも有効である。

我々教師は音楽分野のレッスンが持っている（ように見える）見かけのそれに囚われず、真の「アクティブ・ラーニング」の体を成したレッスンが提供できるように、教師自身も研鑽を続けなければならないと強く感じている。

アクティブラーニングによる看護技術教育の実践

— 授業科目「援助方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で ICE モデルを活用した講義・演習の展開 —
看護学部看護学科 基礎看護学領域 石川孝則、迫田千加子、新川雅子、川田綾子、武智朋子、
佐々木秀美

はじめに

臨地実習では、学内で学んだ知識と技術を使い、その時々の場合に最も適すように応用して実践することが求められる。この看護実践能力の育成には、「知る」「わかる」という段階から「状況に合わせて実践できる」という段階へ到達させるような教育が必要である。今回は、看護学部での基礎看護技術を教授する授業科目「援助方法論」において、ICE モデルの活用（I：知識、C：つながり、E：応用）を基盤として臨床の場を想定しながら、知識と技術を統合して看護実践に結びつけるように実践しているアクティブラーニングによる教授過程を紹介する。

1. 授業科目「援助方法論」の位置づけ

援助方法論の科目は、援助方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに分かれており、各科目の構成について表1に示す。

表1. 援助方法論の構成

教科目〔必修〕	単位数（時間）	開講時期	授業概要
援助方法論Ⅰ	2単位（60）	1年後期	看護実践で共通に必要なとされる基礎的援助技術
援助方法論Ⅱ	2単位（60）	2年前期	日常生活の援助に必要なとされる基礎的援助技術
援助方法論Ⅲ	2単位（60）	2年前期	診療の補助に必要なとされる基礎的援助技術

2. 援助方法論の概要

1) 目的・ねらい

患者中心の看護の実践に向けて、患者の安全・安楽・自立・個別性に配慮し、患者の健康の維持・増進・回復を図ることができるよう、看護実践に必要な基礎的知識・技術・態度を学習する。

3. ICE モデルを活用したアクティブラーニング

1) ICE モデルを活用した授業進行方法

授業の進行は、講義・演習・自己練習の3段階で構成し、講義で学んだ知識と根拠（I：知識）を、演習での技術体験を通して結び付け（C：つながり）、技術発表やその後の反復技術練習によって、根拠に基づいた技術と患者への配慮を統合させた技術力（E：応用）として定着を目指すように進めている。また、演習での技術体験においては、看護者の視点だけでなく、援助を受ける患者側からの視点、あるいは、第三者からの客観的な視点を踏まえた気づきが得られるように、看護師役・患者役・観察役を交替で体験するようにしている。

授業進行における各段階のフェーズ（活動要素）と身につく力、及び、学習過程でのICEの段階について表2に示す。

表2. 援助方法論の学習段階（教授段階）

授業の段階	フェーズ（活動要素）	学習の体験	身につく力	ICEの段階
講義	ビジョンゴール設定	授業開始時のレポート	課題発見能力・目標設定力	I
講義	必要な知識の修得	講義	必要な知識・既習学習との統合力	I
演習	技術のイメージ化	技術デモ見る	技術を想起する能力	I・C
演習	技術の立体化	手順書の構成	根拠に基づく実践力	I・C
演習	知識と技術のつながり	実施体験	基礎的な看護技術力	I・C
演習	配慮の統合	患者役・助言役	配慮する実践力・態度・コミュニケーション力	C・E
演習	状況に合わせた技術へ応用（経験の開始）	発表体験・複数回の実施	状況を見極める力・知識・技術・態度の統合力	C・E
演習	振り返りレポート	臨床を想起した自己課題の抽出	自己課題の発見力・解決力・臨床を想起する意識と能力	E
演習・自己練習	状況に合わせた技術へ応用（定着）	反復技術練習・技術試験	内面化した看護技術力	E

4. ICE モデルを活用した看護技術演習の実際

1) ビジョンゴール設定と知識の修得 (I:知識)

授業開始時に、テーマ「患者中心の看護を目指して」のレポートを提出することで、全員が、ICE モデルの考え方を踏まえ、本授業にどのように取り組み、どのような能力を身に付けたいかという、ビジョンとゴールを明確に意識できるようにする。

2) 根拠に基づいた看護技術の立体化 (C:つながり)

(1) 演習での技術デモンストレーション

演習ではまず、基礎的看護技術について教員によるデモンストレーションを見学して、技術をイメージ化するとともに、手順書をもとに講義で学んだ知識とを結びつけることで根拠に基づいた看護技術の実践として立体的に想起できるようにする。

(2) 看護技術の体験学習

演習では、看護師役・患者役（観察役）の各役割を交替しながら看護技術の体験を行う。患者役（観察役）の学生が適宜確認し、必要時に助言することで、技術の評価・修正を同時に行いながら効率的に技術力向上を目指すようにする。

(3) 患者への配慮の視点を統合

演習では、できるだけ実際の臨床状況に基づくように患者役の状態を設定し、原理・原則に基づきながらも、患者の身体状態や心理的状况に配慮した援助ができるように進めていく。この患者役としての体験は重要で、援助を受ける側として“されてよかったこと”“されていやだったこと”の体験は、自分が看護者になったときに患者の心理に目を向けるきっかけとなる。



写真1 看護師・患者役での演習

3) 状況に合わせた看護技術へ応用 (E:応用)

演習での看護技術の体験においては、グループメンバーでのディスカッションや、iPadで撮影した動画を視聴するなどして、自分の技術を多方面から評価・修正して技術力を高め、自分の体験を客観視して評価する視点が定着するようにする。また、演習終了後は「振り返りレポート」にて、自分の看護技術を総合的に評価するとともに、「実習に臨んだときは患者にどのような援助をしたいと考えるか」という、臨床を志向した課題抽出が自らできるようにしている。



写真4 動画での実践の振り返り

5. 実際の状況と学生の学び

令和2年度は、新型コロナウイルスの感染予防対策を踏まえた授業の実施であり、マスクとフェイスガードは常時着用とし、可能なかぎりのソーシャルディスタンスを保ちながら演習を実施した。

学生は、制限があるなかでも自分の援助を客観的に評価しながら、自らの課題抽出ができており、リフレクティブな思考で看護技術を向上させていく基本姿勢は多くの学生に定着しつつあるとの実感が得られた。また、学生からは「この授業が始まると看護師を目指しているという実感がわいてきた。うまくできたらうれしいし、逆のこともあって落ち込むこともあったが、それも学びだと思う。」という意見もあり、この授業での体験をよくもわるくも看護師への成長として捉えていくという前向きな学習姿勢が養われている状況があった。自らの体験を学習の中心とする本授業は、リアルな状況において知識・技術を「使い」「実践する」アクティブラーニングであり、自分の体験の中から得られた能動的な学びがあることから、看護師に向けての成長の実感に結びついているものと思われる。その学びの蓄積は、学生の自信となり、さらなる動機づけにつながるものと考えられる。

広島文化学園大学アクティブ・ラーニング実践報告 コロナ渦における保健体育科教育法の実践について

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 前田一篤

1. はじめに

教員養成課程においては、学生の実践的指導力の保証が求められる。その中でも、教員養成段階の学生が教科指導力を身につける場として重要な役割を果たすのは、マイクロティーチングや模擬授業である。本学科における保健体育科教員養成課程においても同様に捉えており、これまで模擬授業を中核として様々な工夫を用いて学生指導にあたっている。これらの授業づくりの過程において、学生らは自らで考え、行動し、その内容について吟味することが求められることから、必然的にアクティブ・ラーニングを実践してきている。

本学科では、教科指導法の授業として、一年次後期に担当されている「保健体育科教育法Ⅰ」、二年次前後期に担当されている「保健体育科教育法Ⅱ・Ⅲ」、三年次前期に担当されている「保健体育科教育法Ⅳ」を通して、学生の教科指導力の向上を意図した授業展開をおこなっている。とりわけ、マイクロティーチングや模擬授業を取り入れるのは「保健体育科教育法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」となっている。

しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響により、対面授業の実施が困難となったため、マイクロティーチングや模擬授業の実施が従来通りには実施できない事態となった。今回は、そのような中でも、遠隔授業と併用して学生の実践的指導力の保証をするために実施した内容について、「保健体育科教育法Ⅲ」の一部を取り上げて紹介する。

2. 授業の実施方法

「保健体育科教育法Ⅲ」は、二年次後期に担当されている科目である。従来は、30人前後の受講者をグループに分け、それぞれのグループが中学校学習指導要領に示されている運動領域の中



写真1 体育館で行うダンスの模擬授業

から1領域を担当して50分間の模擬授業を実施することとしてきた。なお、それぞれのグループが担当する運動領域の重複は避けて、全員が可能な限り多くの単元に触れられるように設定することとしている。



写真2 グラウンドで行う陸上競技の模擬授業

模擬授業の実施に関しては、教材研究および指導案の作成、教材・教具の準備、場所の確保等、原則としてほぼ全てのことを担当するグループが主導して行う。資料の収集や教材理解、指導案の作成過程については、グループの要望や状況に応じて教員からの指導を行っている。また、模擬授業実施後は全体での協議会を実施し、教師役の学生の反省や、生徒役の学生からの意見、指導教員からのフィードバックを即時的に全体で共有する形態を取っている。

後期全体を通した流れとしては、教材研究およびリフレクションのパートと、模擬授業の実施パートを交互に実施し、学習した理論や知識等について実践を通して確認・定着させることを意図したものであるとしている。

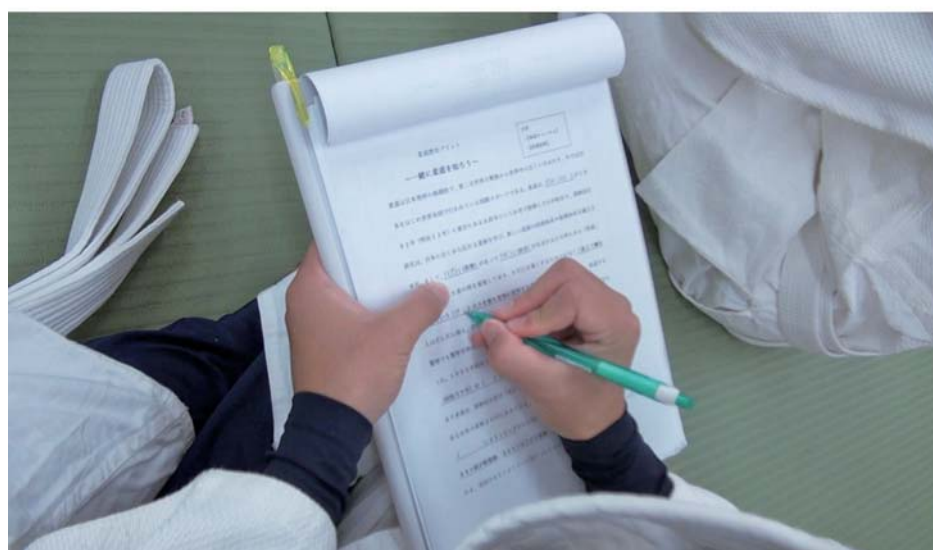


写真3 武道の模擬授業担当グループが作成したワークシート

3. コロナ渦における対応について

今年度については、先述した理由から対面授業の実施に制限を設けざるを得なかった。そのため、対面以外の実施が困難な模擬授業を除く、各グループが行う教材研究や個人のリフレクション等については遠隔で実施していく方法をとった。

模擬授業の実践を振り返るにあたっては、文章や画像を用いるより、動画の視聴を通して振り返ることがより具体的なイメージを生起させることに有効である。しかし、オンラインで動画を視聴したり、指導教員が同時に講義やフィードバックを行ったりすることについては、インターネット環境を主な理由として、学生が平等に受講することが難しい場面が多々ある。

そこで、模擬授業後の個人のリフレクションについては、模擬授業の様子を撮影した動画を、動画共有サイト「YouTube」にアップロードし、いつでも動画の視聴を通したリフレクションができる状況をつくった。動画を共有するにあたっては、該当する動画の URL を知っている者だけ視聴することができ外部から干渉することが比較的低い「限定公開」として学生に周知した。この動画の視聴を一定期間内に行い、学生個人が模擬授業の振り返りをまとめる方法をとった。



写真4 動画共有サイト「YouTube」のサンプル

4. 成果と課題について

子どもの学習について考え、授業を実施、その内容について検討する模擬授業の形態がアクティブ・ラーニングそのものであり、これまで多くの実践が為されてきた。今回紹介した内容も同様で、必然的に学生が能動的に学習するものであった。

従来であれば、模擬授業の動画視聴を通して、学生自身のリフレクションと教員からのフィードバックを同時並行で行っていた。この方法では、模擬授業で生起した出来事について振り返る中で、即時的に教員からフィードバックすることができることに一定の効果があると考えられる。しかし、このとき学生は、動画の視聴・振り返る思考（リフレクション）・教員からの指導（フィードバック）の3つを同時に行わなければならないため、模擬授業の実践について深く考察することは、時間的に余裕のない状態となっていたことが課題であったと考えられる。

今回の実践においては、コロナ渦における対応ではあったが、動画共有サイトを活用すること

で模擬授業の振り返りを、学生自身がいつでも何度でもできる状態とすることができた。その点においては、時間的余裕があったことから思考が深まり、学生自身の考えやその対応策についての自主的な学習につながっていたと考えられる。実際、学生が振り返りを記述した内容を比較してみると、従来型では教員のフィードバック内容についての記述が大部分を占めていたが、今回は模擬授業直後の協議会や過去の講義内容と関連させて学生自身の自発的な気づきを記述することができていた。このことから、遠隔授業においても学生の授業に関する知識や思考が深まることがわかった。

その一方で、教員からのフィードバックをする時間を確保することが課題として挙げられる。今回の方法であれば、学生が振り返りの成果を提出するタイミングが一定ではないため、個々の気づきに対するフィードバックを全体に共有するまでにタイムラグが生じてしまう。即時的にフィードバックをする従来型と比較して、学生が振り返りをする思考のリアルさが減少してしまう点がデメリットとなる。遠隔授業においても、動画の視聴と教員のフィードバックを同時並行で行うことも不可能ではないが、学生のインターネットやハード面などの学習環境もそれぞれ違うため、ライブ配信形式の振り返りは現実的ではない。この点についての工夫が必要である。

以上のように、遠隔授業においても学生が従来以上のアクティブ・ラーニングを実践し、教員としての実践的指導力を身に付けるために行った工夫について紹介した。今回の実践では、可能な限り“これまで通り”を保証することを意識してきたものであるが、今後はこれらの課題を全て解消することで、これまで以上の成果をあげる実践をしていきたい。

4. C-Learning を用いた遠隔授業紹介

広島文化学園短期大学 C-Learning 実践報告

コミュニティ生活学科 海切 弘子

C-Learning を用いた遠隔授業紹介「ライフステージの栄養学実習」

食物栄養学科 江坂 美佐子

C-Learning を用いた遠隔授業紹介

保育学科 三川 明美

広島文化学園大学アクティブ・ラーニング実践報告

C-Learning を用いた遠隔授業

学芸学部 子ども学科 山内 優佳

2020 年度前期講義における C-Learning 利用の報告

学芸学部 音楽学科 山澤 洋之

C-ラーニングシステムを使った遠隔授業の体験と感想

看護学部 看護学科 中村 哲

「栄養と生活習慣病Ⅱ」における C-Learning を用いた遠隔授業紹介

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 鬼塚 純玲

広島文化学園短期大学 C-Learning 実践報告

コミュニティ生活学科 海切 弘子

1 はじめに

例年、対面授業で行っていた調理実習がコロナ禍で実施できなくなったが、C-Learning を活用することにより、家庭での実習を試みた。C-Learning はもともと対面授業の補助教材としてレポート提出などで活用されてきたアプリケーションであるが、コロナ禍で対面授業が困難になってきた今、遠隔授業において、出席管理や小テスト、レポート管理等ができるメリットをふまえ、学生は主体的に実践したことを報告しやすい、教員は一人一人の報告をもとによりの確な指導に生かせると考え実施した。

2 実施期間

令和2年4月 24日(火)～8月6日(火)

令和3年1月 19日(火)～2月2日(火)

3 方法

前期は「調理学」90分講義形式の授業(15回)のうち5回をC-Learning, 10回を対面授業で行った。後期「調理学実習」「調理学演習」90分×2コマの調理実習の授業の中で、前期学んだ科学的根拠理解の要素を盛り込んだ実習内容について調理技術の習得を図り、C-Learning によるレポートと対面による実技試験で習熟度を確認した。後期は15回授業のうち2回C-Learning で授業を実施した。

対象者は、後期「調理学実習」「調理学演習」を履修生は全員前期に「調理学」を履修していた学生だった。9月21日に1回目スタートした実習授業を12回(うち調理実習10回)実施後、テーマ「後期学んだ実習内容の中から1つ選んで調理し写真と感想を提出すること」を課題とし、自分が都合の良い時間に調理し提出させた。また、調理技術をどこで習得しているのか、習得するために調理実習はどの程度貢献できるのかを調査するためアンケートを行った。

4 結果

(1) 学生のレポート(写真と感想)を以下に示した(図1)



炊き込みご飯と鮭の竜田揚げとわかめと豆腐の味噌汁を作りました。炊き込みご飯の具は人参、椎茸、ごぼう、こんにゃく、鶏肉、油揚げを入れました。炊飯器に炊き込みご飯のコースがあったのに気づかず、普通の白米コースでセットしたので少しだけ硬かったけど味は良かったし、おこげもあって美味しかったです。竜田揚げの鮭は、醤油、酒、おろし生姜に味をつけて揚げました。家で魚料理をしたことがなかったので、良い経験になりました。味噌汁はだしがきいていて美味しかったです。



私は中国料理3で作ったメニューの中の三色酢の物とトマトの卵スープ、鶏の水煮を作りました。鶏の水煮は授業が終わった後に作ったことはあったのですが、他の2つは作ったことがなかったのでチャレンジしました。いざ1人で全てを作ってみると時間が思ったより、かかってしまいました。しかし最後まで1人で調理をすることが出来たのでとても良かったです。水煮を乗せている皿に少し彩りが少ないかなと思い、家族みんなが好きなタマゴの燻製を作りました。調理が終わり、家族に食べてもらったら「すごく美味しい！」と、とても喜んでもらえました。私も作ってよかったなと感じました。これからも授業で学んだ調理法を応用していろいろな料理に挑戦していきたいです。



クリスマスメニューで作った、ローストビーフを作りました。前回、学校で初めて作った時は火が通り過ぎてしまって肉が硬くなったので、今回は全体的に時間を少し短めにして作ってみました。すると、とても丁度良い感じに完成しました。タレは前回と同じバターとポン酢で、美味しく頂きました。家族にも食べてもらって、みんなが美味しいと言ってくれたので嬉しかったです。ローストビーフは時間さえあれば簡単に出来るので、また作ってみたいと思います。



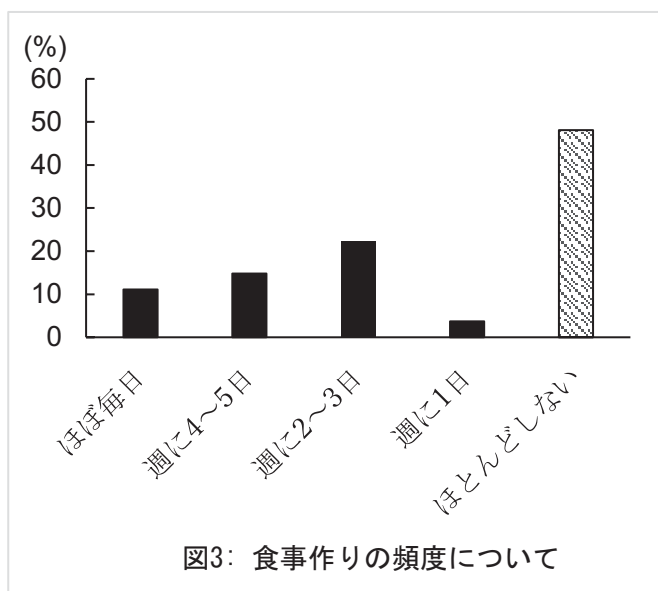
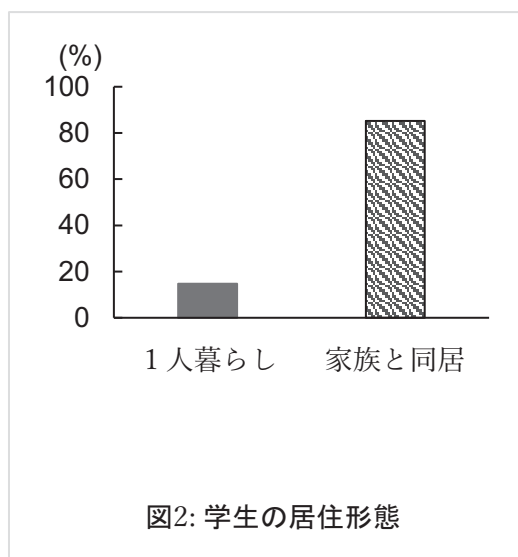
私が作ったのはグラタンです。中にじゃがいもをいれたりたまねぎいれたりチーズで焦げ目を少し出したりしました。スライスチーズを上に乗せるだけで焦げ目ができてとても美味しそうにみえました。私は小さい頃からグラタンが大好きでした。味はじゃがいもが主で玉ねぎも入っていたので栄養素もいいと思いました。チーズも大好きなのでとてもおいしかったです。簡単に料理を作れるようなレシピを自分でも作ってみんなに教えてあげたいなと思いました。

図1:提出レポート

「習った料理の中から一品」という課題にもかかわらず3品から4品の献立を組み立てて調理師提出した学生が10%いた。また、行事食で学習したローストビーフとホワイトソースを作るところから学習したマカロニグラタンに挑戦した学生が多数いた。

(2) アンケート結果

学生の80%が自宅生(図2)、食事作りをほとんどしない学生がおおよそ50%であった(図3)。また、自宅で調理をしない理由としてアルバイトにより帰宅時間が遅くなる、同居している母親が作ってくれるが多数だった。今回のC-Learningでの実習課題提出については、「完成まですべて一人でできるので良かった」「コロナ対策でやむを得ない方法だと思う」「対面で10回実習を行った後だったので一人で実習できた」「通学時間がかからないのが良かった」と肯定的にとらえている学生が半数以上を占めた。計量スプーンの使い方はおおよそ理解できたとするものが80%近く占めたが、計量できるようになってと答えた学生は20%だった。



5 成果と課題

レポート課題の代表的な例を見ると、献立として組み立て一人で調理し、完成させた学生が10%おり、また、日頃、調理しない魚料理に挑戦したり、小麦粉でホワイトソースを作ったりした学生もいた。C-Learningでの写真付きでタイムリーに報告でき、評価をもらえることがやる気になったようだ(図1)。一人一人が連絡・相談を通じて質問することができ、対面の実習時間では十分に個別対応できにくい消極的な学生とも個別にやり取りができるので、この度のように10回程度基礎的な実習を積み重ねた後の課題提出としてC-Learningを用いるのは有効であった。また、彼女たちは、前期の講義でC-Learningを使って教材倉庫の資料を読み、協働板で意見を書き、レポートを提出するという学習スタイルが身につけていたこともC-Learningでのレポート取り組みにも柔軟に対応できたと思われる。今回のように、レポート提出と合わせて、小テストを使って毎回の振り返りなどを行うと、より調理する機会も増え、知識や技術の定着につなげることができたと思う。

6 終わりに(今後に向けて)

C-Learningはレポートの評価を共有し、意見交換をするなど学生同士がディスカッションし、気づき学びあうことへと発展させていくことでさらに深まった使い方ができると考える。また、調理実習はグループ学習であり、グループ役割分担で自分の仕事だけをやるだけでなく、ひとりで一つの料理を完成させることの積み重ねが有効であることから、今後の実習授業での課題を出すときにどのような課題の提示がより技術習得につながるかを考えるきっかけとなった。学生自身の技術習得の確認ツールとしてC-Learningを使った実習課題提出は有意義であることが示唆された。

C-Learning を用いた遠隔授業紹介「ライフステージの栄養学実習」

食物栄養学科 江坂 美佐子

1. はじめに

令和2年度前期の授業は、新型コロナウイルス感染症の影響で、全授業がC-Learningを用いた遠隔授業でスタートした。C-Learningを用い、教育の質を落とさず対面授業の開始までどのような授業をしていくのか課題があった。特に、実習科目は時間が135分と長く、通常の調理実習や栄養計算ソフトを用いた献立作成演習ができないため授業内容と方法を変更する必要があった。ここでは、「ライフステージの栄養学実習」（食物栄養学科2年生前期に開講する栄養士免許必須科目、グループA履修者21名、グループB履修者21名）の授業の流れや学生に行ったアンケート結果について報告する。

2. 授業の実施

(1) 授業準備

全教員に配付された操作マニュアル「C-Learningで遠隔授業をする（教員の事前準備編）」を参考にして、授業準備を行った。

【授業を実施するにあたって気をつけたこと】

- ・学生はスマートフォンで授業を受けるため、字の大きさに配慮した資料作りによること。
- ・突然の遠隔授業開始となり、手元に教科書がないことを前提とすること。
- ・授業の流れや時間配分を最初に伝え、協働板や小テスト、アンケートの回答を促すこと。
- ・学生自身の振り返り及び学生の理解度を把握するために、授業内容について授業の中で振り返りテスト（小テストを用いる）を行うこと、その結果を授業の振り返りに活用すること。
- ・協働板は、レポート課題と同じ内容にし、じっくりと考える時間を設けた後に、コメントをする時間配分によること。
- ・協働板では、意見を受け止めコメントしたことや内容を認める発言を全員が出そろった頃に返信すること。否定はしないが、解釈を誤っている学生には正しく伝えること。
- ・補足説明を事前に別ファイルに作成し、必要に応じて早く回答できるよう準備すること。
- ・前の回の振り返りを授業の始めに行い、内容の要点を確認すること。

(2) 授業の実施

C-Learningによる授業実施の基本的方針に沿って実施した。実際の授業実施に際しては、「C-Learningで遠隔授業をする（授業実践編）」を参考にし、「連絡・相談」「教材倉庫」「協働板」「小テスト」「レポート」「アンケート」を使用した。

- ① 教材作成 パワーポイントで作成した。教科書や参考書をスキャンし、切り取って出典を明記して貼り付けた。通常口頭で説明している言葉を文章で書き入れ、ポイントや次の資料の着眼点、小テスト前の要点整理、演習内容について理解しやすいよう工夫した。教材のページ数は平均で12ページであった。

3. 学生へのアンケートの実施と結果

授業改善を目的に5月の最後の授業時（GAは4回目、GBは3回目）に学生へアンケートを行った。質問内容は、①資料はわかりやすかったか②授業の流れ、時間配分はちょうど良かったか③レポートの内容、提出期限は良かったか、だった。「アンケート」の「クイックアンケート（はい/いいえ※コメントあり）」で作成した。42名中40名の回答があった。結果は、全員が「はい」と回答した。学生のコメントを紹介する（同様なコメントはまとめた）。

① 資料がわかりやすい

- ・写真や例えが書かれているので分かりやすかったです。
- ・授業のテーマについてポイントが丁寧にまとめてあり、とてもわかりやすいです。
- ・文章だけでなく写真やイラストがあり、イメージしやすかったです。
- ・協働版での質問に答える時に、資料を見て理解してから答えられるのでいいです。
- ・何度も見るできるのでしっかり復習できるのがいいです。
- ・自分のペースで見返しができました。

② 授業の流れ、時間配分

- ・本日のスケジュールに細かいタイムスケジュールと内容が書いてあり、課題に取り組みやすかったです。
- ・時間配分ちょうど良かったです。
- ・ゆっくりのペースなので集中できた。
- ・献立のメニューを考える時間もたっぷりあって良かったです。
- ・少し早いなど思った時もあったけど、そこまで気にならなかったです。
- ・献立を考えて共有した後に、他の人の意見を参考に、もう一度献立を考え直す機会もあり、とても良かったです。
- ・全員の考えも知りながら出来たし、考える時間も十分にあったのでよかった。
- ・献立を考える時間が多く、しっかりと考えをまとめることができました。
- ・最初は慣れませんでしたけど、ちょうどいい時間配分だったと思います。

③ レポート内容、提出期限

- ・提出まで時間がしっかりあるので、焦らず考えることができました。
- ・提出期限にゆとりがあったので焦らず考えることができました。
- ・例などもあり、どのように書いたらいいかが分かりやすかったです。
- ・レポートでしっかり対象者にあった食事を考えることができたと思います。レポートの返信ではどこが良かったのか、考え直した方がいいのか指摘してもらえてすごく勉強になりました。期限も献立をゆっくり考えれるくらいあって良かったと思います。

④ その他

- ・授業資料は紙じゃないので見返す時に毎回教材倉庫から開いて見るのが手間だなと思いました。やはり資料はすぐ見返せる紙が良いなと実感しました。

4. まとめ

学生の状況に配慮した C-Learning の授業の実施に努めた結果、授業の流れや時間配分、資料、レポート内容や提出期限が良好であることがわかった。対面授業開始後、補足説明や必要に応じて資料配付を行った。この結果、授業評価アンケートの学生満足度は、GA4.9、GB4.6で昨年度より向上した。また、この経験が後期終盤の C-Learning の授業に活かされた。遠隔授業であっても学生の状況や理解度に合わせた授業を行うことができたと考える。

C-Learning を用いた遠隔授業紹介

保育学科 三川 明美

1. はじめに

C-Learning の言葉を聞いた時、自分にはできないし、もう無理だから、ついていけないという風に思うことにして、目を背けていた。今更新しいことに挑戦する必要もないだろうと、遠い世界のことだと思っていた。

ところが、去年からのコロナ禍の中で、他人ごとではなくなる事態に直面することになった。全員が C-Learning を使って学生に授業をするというのである。正直慌てたということに間違いはない。逃げていたものから逃げられなくなってしまった。作っていただいたマニュアルを見ながら孤軍奮闘の毎日が始まったのである。

2. 授業の準備

自分の授業である子どもの食と栄養は1年生が対象であるため、まず大きな問題点は、学生が C-Learning を使いこなすことができるのかということであった。何もわからないものが分からない学生に教えるなどというとんでもないことをしているわけである。しかし、これは杞憂に終わった。学生は難なく使いこなすことができていた。

2 つ目は学生が教科書を持っていないということである。そのためまず教科書を要約することから始めなければならなかった。右も左もわからない学生に、要約した文章で、こちらの思いが伝わるのか。教科書の意味が分かるのか。不安を抱えながらの要約であった。また課題に対する適切な回答が得られるのかという不安もあった。

言葉遣い、この言葉はわかるのか、できるだけ簡潔にと思いながら、試行錯誤の連続であった。

何とか出来上がった教材を、教材倉庫に収めるための、PDF に変換するのも初めてのことで、これもまた驚きであった。

レポート作成のための課題を考え、レポートを作成させる、教材を理解してくれたかどうかわかるようなテーマにしなければならない。文字数も何文字に設定するのかなど、ここでも課題は山積であった。

初めてのことばかりで、マニュアルを見ながら挑戦すること、授業の教材を作ることの二つの課題に取り組みながら、何とか授業は開始されたのであった。

3. 授業の実際

子どもの食と栄養の授業が始まり、出席をとること、これを忘れる学生が数名出て、課題の提出で出席にするなど臨機応変な対応が必要な場面が出た。

教材倉庫の課題はよく読んでくれて、レポートもなんとなく書けていた。一安心であった。

5月の最初の C-Learning を終わると、7月・1月の C-Learning は、お互いに慣れ、スムーズ

に進んだ。

しかし、教材を作ることには慣れず、あまり良い教材とは言えなかったと思う。7月・1月は教科書を持っているという安心感から、おざなりな教材作成になったのではないかと思い反省している。

出席をとることや、教材などの公開なども予約ができることが分かり、予約にしたのだが、レポート提出の締め切りを守ることができない学生が数名出て、締め切りを過ぎても、レポートを公開の状態にしたままにするなど、甘い対応になった。

4. 今後の課題

子どもの食と栄養の授業では、教材倉庫の課題を読んで、レポートを書かせるということに終始した。協働版を使いこなすことができなかった。今後 C-Learning をするようなことがあれば、協働版を使ってディスカッションをさせるなどの工夫も必要になるかと考えているところである。

また、レポートの締め切りを時間内にきっちりと終わらせるよう厳しく対応することの必要性を感じた。

出席についても、きちんと出席をとらせるということもしていく必要性を感じた。

最初にきちんとおけば、学生はできると思うので最初が肝心だということを感じた。

セミナーの授業では、協働版を他の先生方の協力もいただいて協働版を使うことができた。学生はさまざまな意見を書き込んでいたので、子どもの食と栄養の授業の中で協働版の活用を工夫していけるようにしたい。

5. まとめ

C-Learning という新しいツールから逃げていた者が、逃げられなくなり、使わざるを得なくなった。まだまだ、使いこなすところまではいっていないのが現状である。C-Learning に使われているというほうが正しいのかもしれない。もっと、勉強して、学生によりわかりやすい教材を提示し、的確なレポートを書いてもらえるよう努力していきたいと思っているところである。

広島文化学園大学アクティブ・ラーニング実践報告

C-Learning を用いた遠隔授業

学芸学部 子ども学科 山内優佳

1. 背景

教養の外国語科目は1年次がほとんど全員受講する科目である。科目内容としては高等学校までの外国語科授業を踏まえたものであり、学生にとっては馴染みのある科目と大学における学修科目の橋渡しの存在であるといえる。授業者としては、従来の対面授業においてもこのような背景を念頭におき、特に初回の授業では丁寧なオリエンテーションができるよう心掛けている。

令和2年5月はC-Learningを使用して授業が実施されるという、誰にとっても大きな変化の年であったが、丁寧なオリエンテーションや説明を行うこと、新しい知識や技能を学べるステップを設けることは、従来の対面授業とそう変わらないとも考えられる。

本稿では、C-Learningを利用して配布される提示資料作成時の配慮事項、提出を求めた課題の種類や双方向性を確保する工夫を報告する。

2. 提示資料

(1) PDF 資料作成時の配慮

スマートフォンで操作するということを念頭に置き、場合によっては用紙のサイズ、フォント（サイズの検討、ユニバーサルデザイン[UD]フォントの使用）を適宜昨年度は異なる形式で作成した。

対面授業では口頭で説明されることが、オンラインではすべて文字と画像の情報になるため、PDF資料の枚数は対面で配布されるレジユメよりも大幅に増えている。また、PDF資料と、協働板やレポート画面の往復をすることもある。こういった状況から、受講生がPDF資料の中で「迷子」になることが予想された。この対策として、図1に示すメニューページを、すべてのPDF資料の1ページ目に作成することとした。また、資料をWordで作成する過程で、目次にはドキュメント内ハイパーリンクを設定した。例えば、1つ目の課題である協働板への記入を終えてPDF資料を再閲覧した際には、図1で示す「(2) 説明を読んで、レポートを提出する。」をタップもしくはクリックすると、PDF資料の該当ページが表示される。

(2) 音声資料作成時の配慮

授業を通じて、PDFの説明のみでは説明が不十分になる場合もあることが、検討すべき課題となった。通常の対面授業では様々な活動を行っていた英語Iでは、同様に多様な取り組みをしたことにより、「次に何をしたら良いかわからない」といった問い合わせが、1年次生の受講生約120名のうち、1~5名ほど存在した。また、4年次生が受講する専門科目においては、講義形式での説明を省くことができない側面がある。文章ばかりの説明では十分に理解できないことも懸念される。特に6月の対面授業を通じて、オンライン授業期間の感想を聞き、授業の反応をみることによって、オンラインにも音声が必要であるような実態が顕在化した。

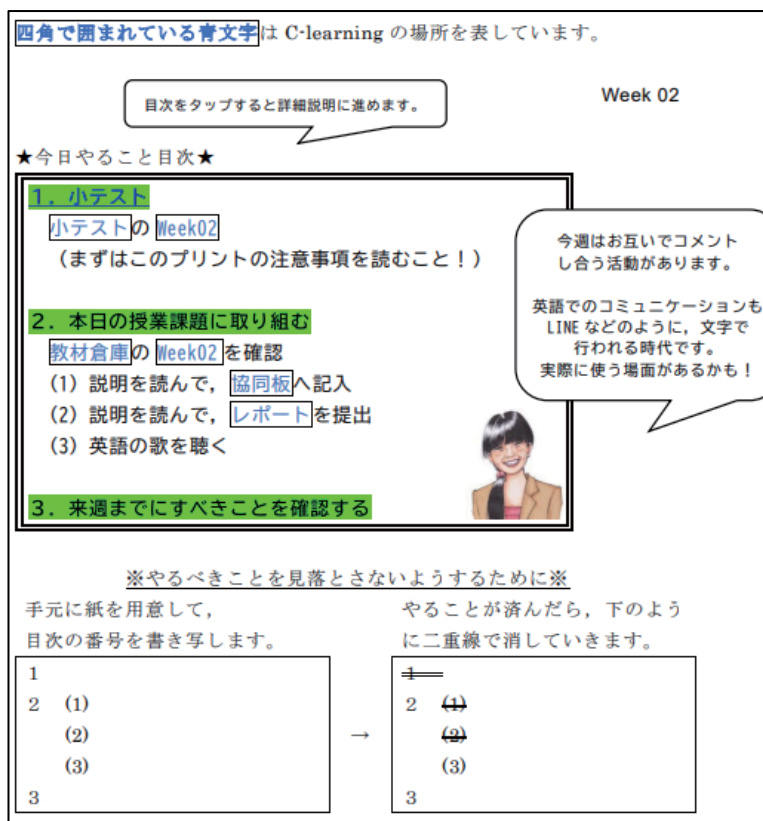


図 1 配布用 PDF 資料の第 1 ページ（毎回の授業資料で提示）

そこで、受講生には、「C-Learning で PDF 資料を見ながら音声を聞く方法」の説明資料を提示したうえで、Word や PowerPoint で作成した PDF のレジメとともに mp3 ファイルを提供した。

音声録音は Windows 標準搭載のレコード機能で行った。録音中に言い淀みが生じた場合は、長めに無言の時間をとったうえで該当箇所を言い直して録音した。言い淀みと無言の時間は、無料の音声編集ソフトである Audacity を用いて削除した（図 2）。また、録音時の部屋の雑音を一括で削除した。今年度の授業では十分な準備時間を確保できておらず、明らかな言い淀みや繰り返しを削除するにとどまった。質を高めるのであれば、効果音を入れるなど、メリハリをつけることによって（YouTube 等の動画視聴世代である）受講生の集中力を保つことが可能ではないかと考える。

（3）質問への対応

授業者が細心の注意を払っていても、説明が不明瞭な点や、デバイスや C-Learning の不具合は必ず発生する。そして大量の問い合わせが授業者 1 人に集中すると対応が遅れるという負の循環に陥る。そこで、5 月の授業開始時にすべての授業で協働板と LINE オープンチャットを設置し、質問の場として設けた。また、後期のオンライン対応の際には Google meet を質問の場として活用した。

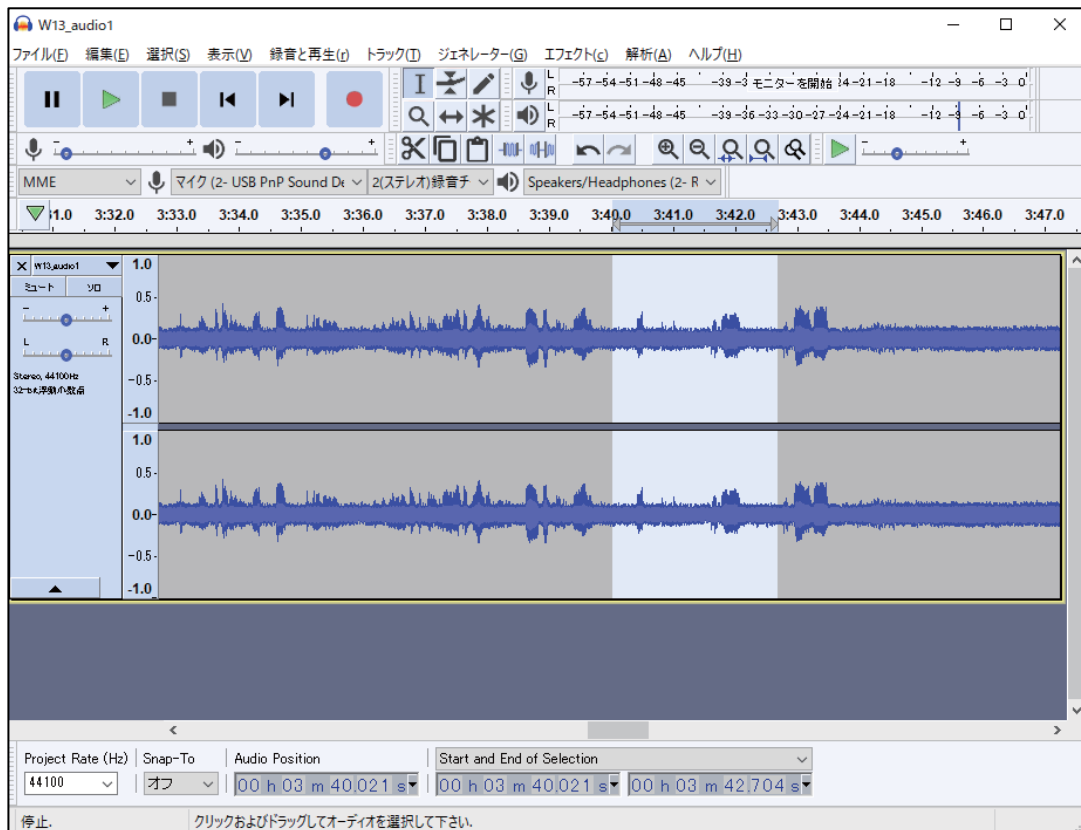


図2 言い淀みや無言部分の削除（Audacityの利用）。

協働板では、下記のような注意事項を記載した「質問板」という匿名の協働板を設置した。直接のメールや連絡・相談を使って連絡する者もいたが、全体に関係する質問であれば、受けた質問を協働板でも共有することにより、同様の質問が来ることを避けつつ、教室のような共有空間を作り出せるようにした。

- ・自分と似たような質問がないか、まずはほかの人の投稿も探す。
- ・『先生に通知』にチェックを入れると、早めに対応できる。
- ・教員以外が答えても良い。(学生同士で対応するほうが、解決が早い場合もある。)

LINE オープンチャットは、C-Learning が一時的に使用できないなど問題が発生した場合の緊急連絡用として、初回の授業で全員に登録を指示した。実際に今年度発生したG Suite 機能ダウンの際には、LINE オープンチャットが大いに活躍した。また、学生は通常友人同士のやり取りにLINE アプリを使用しているため、HBG メールやC-Learning を確認する習慣がなくなかなか連絡が取れない学生に連絡を取ることも、オープンチャットで可能であった。

友人間で使用されるLINE グループとの大きな違いは、オープンチャットでは参加者同士で個別のプライベートアカウントを知ることができないという点にある。受講生同士の個人情報や連絡先が共有されることなく、安心して使用することができる。また、表示名をオープンチャットごとで設定することができることも、授業で活用しやすい特徴である。LINE のアカウントではニックネームを設定している者も多いが、授業用オープンチャットでは学生番号と名前（例：01文化花子）で登録するよう指示することで、参加者一覧が学生番号順に並び、容易に登録者の把握をすることができた。

後期に Google meet を利用した理由は大きく 3 点である。1 つめは、授業資料に mp3 ファイルを追加した理由と同様、文字情報の理解に困難を感じる学生への支援について 5 月の時点で課題として明らかになった点である。2 つめは、後期頃から Google meet が Gmail アプリに実装されたことにより、全学生が追加でアプリケーションをダウンロードすることなく meet を利用可能になった点である。そして 3 つめが、大学における C-Learning を利用した学修経験を積み重ねたことにより、後期には操作や授業進行上の質問が出てくることなく、学生のデバイスの面でも、通話による支援が可能になった。期間中も文字情報で質問できる者は協働板や連絡・相談機能で解決できており、meet の使用実績は、1 名が 1 回使用しただけではあったが、受講生の中で特に電子機器の扱いに不慣れた学生でも、問題なくアクセスして通話に参加することができた。

3. 課題の提出と双方向性の実現

(1) 協働板

授業において対面教室空間をオンラインでも体感するためには、受講生同士の交流も重要である。英語 I のように受講生が多い授業においては、グループワークができるように、小グループごとの協働板を作成する取り組みを行った (図 3)。

受講生が特に少ない卒業研究 I・II においては、受講生個人ごとに協働板を作成し、ファイルのやり取りをする場とした (図 4)。従来はメールで提出するようにしていたが、メールが増えるにつれ提出順序が明確でなくなることが多々あった。協働板では未読の表示が付くため、古い

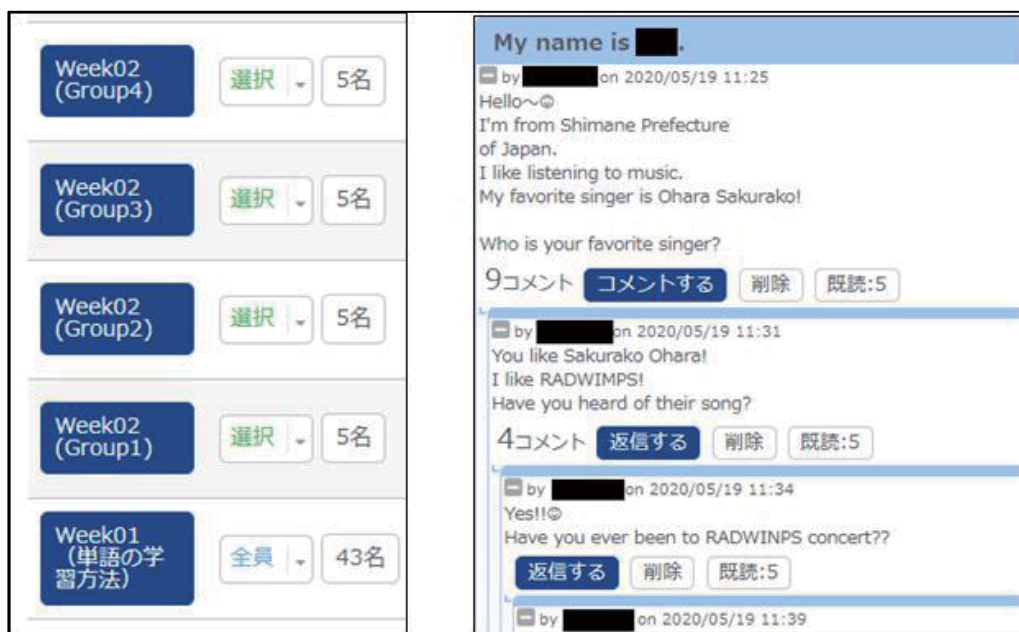


図 3 協働板上のグループワーク (英語による自己紹介と質問)。受講生が多い場合、読み込みに時間がかかるため、小グループだけの協働板を作成した (左)。受講生同士のコミュニケーションを基本として (右)、コミュニケーションがスムーズにいかない協働板に教員が例となる投稿をして、受講生の発言を促した。また、全体に対して総評としてのフィードバックを投稿した。

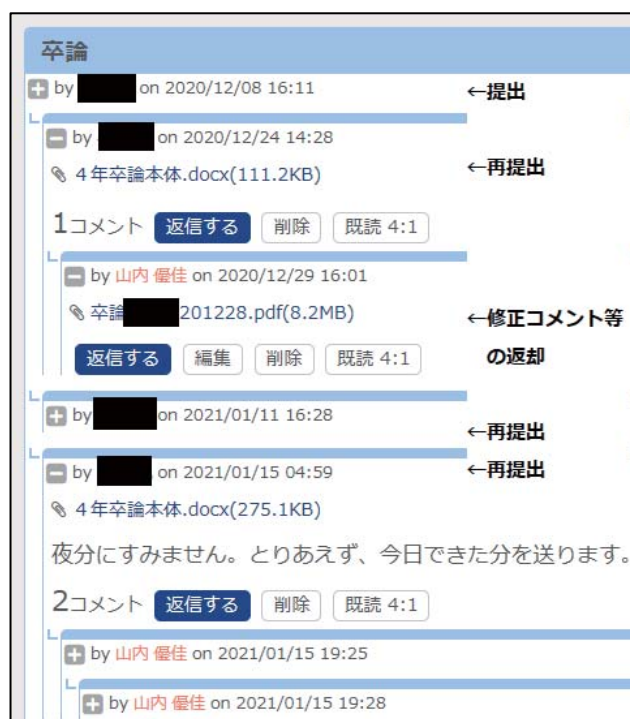


図4 卒業論文の添削。「卒論（本文）」「レジュメ」「スライド」といったスレッドを立て、該当するファイルを投稿・返却する場とした。

ファイルを開覧するミスを防ぐことができた。やり取りの往復が視覚的にわかりやすい点、ファイルのやり取りが深夜や明け方であってもメールの受信（着信音）がないという点も利点であった。（必要に応じて、「先生に通知」にチェックすることで連絡するよう指示していた。）

(2) レポート

英語 I の授業では、文字情報のみのやり取りでは音声面の指導が行き届かないという問題がある。レポート機能では、学修内容に応じて、スマートフォンの音声入力を使った課題（図5）や、音読課題、発表動画の提出課題（図6）を設定した。図6の発表動画はレポート共有の機能により、受講生同士で感想を共有する場を設けた。

4. おわりに

双方向性や対話は、あらゆるダイナミクスで実現されるべきであると考え。特に外国語授業においては、言語そのものだけでなく、言語使用を実践的に学ぶことができる場になるべきである。この度のC-Learningを利用した授業では、通常の授業では意識しながらも自然な環境の中で行われていた教員対学生（1対全体と1対小グループや個人）および学生対学生（1対1や、グループ内のやり取り）の対話が、通常とは異なる形で可視化されたともいえよう。

報告者は前年度までの対面授業においても、ほとんど毎週C-Learningの小テストやレポート機能を使用していた。しかしながら今年度のように全面オンラインという授業形態においては、これまでは「教室空間の中で使用されるツール」のひとつであったC-Learningが、ツールでは

なく「教室空間そのもの」になるという点に大きな変化があったと感じている。次年度以降は本学においてもオンラインミーティング機能の活用が期待される声を耳にする（使用されてしかるべきであると考え）。今後も、道具やアプリケーションが変化していく中で、このような教室空間をいかに作り上げるのが、授業運営の重要な観点になると思われる。



図5 発音に関する授業内の提出レポートとフィードバックの例。受講生は、スマートフォンの音声入力機能を英語入力に設定し、指定された英単語を発音することによって入力した。スマートフォンが認識できなかった発音について、教員からフィードバックを行った。



図6 英語スキット作成課題への提出作品の例。スキットの台本をテキスト入力、発表動画ファイルを提出する課題を設定した。通信容量に問題があった1~2名には個別で対応した。

2020 年度前期講義における C-Learning 利用の報告

学芸学部音楽学科 山澤 洋之

1. C-Learning を利用した背景について

1-1 新型コロナウイルス感染予防対応として

本学では、新型コロナウイルス感染症の予防として、対面授業を中止しすべての科目において C-Learning を実施してきた。音楽学科でもレッスンや合奏を伴うもの（管楽・合唱）を除き実施をしてきた。学生の登校が制限されている期間に実施され、学生のネット環境を考慮し、全学生が利用可能な G-Suite を利用しての Meet やインターネット会議ツールである Zoom などは利用できず、また大容量になる動画や音声ファイルといったものも利用せず、C-Learning の基本機能を使った講義の実施をすることになった経緯によるものである。

1-2 資料の効果的な配布方法として

対面授業開始後にも C-Learning を利用した。それは、資料の管理という面で非常に有用であり活用できるからである。(3-1 にて後述)

1-3 出席・課題の管理として

同様に、対面授業開始後にも人数のやや多い授業において、C-Learning を用いて出席の管理や課題提出の管理を行った。これは、本学の出席システムがイントラネットによるものでありすべての教室で利用できるものではないことに対し、C-Learning はインターネットが接続できる環境であればどこでも接続でき、出席を管理できることから利用をした。同様に、課題提出の際も学生が登校することなく、オンラインで提出からこちらの評価まで可能なことから利用をした。

2. 実際の利用方法

2-1 合奏（講義）・音楽表現活動論での利用

合奏（講義）・音楽表現活動論での主な利用は前述 1-1 に述べたものであり、本来の講義で説明する予定のものを図や写真に置き換え極力文章を減らし、1 画面あたりの文字数を調整しながら資料を作成した。学生の多くは、スマートフォンを利用して C-Learning の講義を受けており、Word で作成した 10.5pt の文字では非常にわかりにくく、単調になるため学習意欲を低下させるのではないかと考え、資料の作成には PowerPoint を利用し、作成したスライドを Pdf に変換しスマートフォンの 1 画面に 1 スライドになるようにした。

下図は合奏（講義）のスライドの一例である。内容を整理し、フォントを調整し、スマートフォンの画面でも見やすいように配置。また、電子媒体であることの利点であるカラーでの資料作成を心がけた。

腕の構造を知ってから上げてみよう

- ・「腕」を上げると言いましたので、皆さんはきっと「腕」に意識をおいて上げてくれたと思います。しかし、腕を上にもっていく動作は実は腕にある筋肉は関係ありませんね。そう、「肩」の周りの筋肉と関節の動きが重要になります。腕（上腕）とともに、肩甲骨が動きます。逆に言うと、肩甲骨が動かないと、腕は耳の横まで上がりません。
- ・片手を背中から肩甲骨のあたりに手を置いてもう一度腕を上げ下げしてみましょう。
- ・また、脇に手を挟み同様に腕をあげさげしてみましょう。
- ・どうですか？先ほどまでの動きに比べスムーズにうごきますよね。これが「知覚」による運動となります。

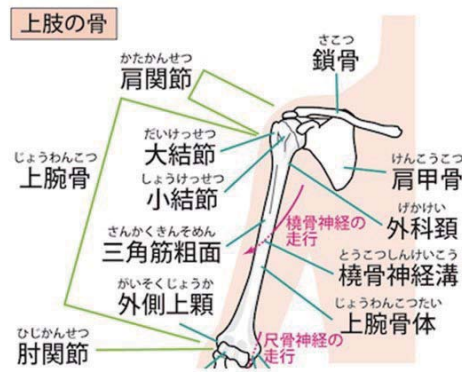


図 1 合奏（講義）第 4 回「腕と手の動きを理解しよう」スライド 9 枚目より

また、この期間においては、出席、協働板、レポートを利用し講義を行った。

2-2 打楽器アンサンブルでの利用

打楽器アンサンブルは演奏・実習系の科目ではあるが、学生の登校禁止期間には 2-1 のように C-Learning による講義を行った。対面授業開始後での利用として出席確認に利用をした。

対面授業開始後も 1 限科目は 30 分短縮で行われたため、演奏系講義である授業として、出席確認の時間を短縮するために学生が自ら C-Learning にアクセスし出席を登録することにより教員による出席確認の時間を短縮した。(3-2 にて後述)

2-3 管楽・オーケストラでの利用

管楽・オーケストラでは、7 月の登校再禁止期間にも C-Learning を利用した。本来演奏による合奏を行う講義であり休講にし、演奏会前に補講という形を行う選択肢もあったが、登校再禁止期間を利用し、本学の学生の知識面での不足を補うため上田・白石・山澤 3 名が 3 回に渡りそれぞれの切り口で知識面を補う内容を展開した。

3. C-Learning の利点

3-1 資料の管理と学生の負担、および紙資源の削減

C-Learning の利点として、資料の管理があげられる。学生側のインターフェイスでは各講義事にまとめられておりさらに（教員側の入力・管理方法によるが）講義内容ごとに資料へのアクセスが容易である。これは従来の紙媒体によるプリントでは、学生側に整理を委ねられている事による弊害（紛失・混同）が起きていた。それを考えると管理された C-Learning 上の資料は検索も容易で使いやすく、教育の質の向上に繋がる。

また、半期の履修科目の紙媒体による資料はかなりの量におよび、学生の通学上での荷物の増加の原因となっている。C-Learning 上の資料であれば、必要に応じてアクセスすればよく、また学内 Wi-Fi を使うことにより学生の経済的負担もない。

また、教員側も不必要な印刷を行う必要が無く、紙資源を削減する事ができる。

登校禁止期間中の C-Learning 上の資料を印刷して配布した事例を聞いたが、SDGs など地球環境への配慮が叫ばれる昨今、紙資源の削減は本学においても急務であり、そういった無駄を極力無くしていくためにも C-Learning での資料管理は有用であると考える。

3-2 出席管理の容易さ

多くの授業において、出席確認は講義時間内に行われる。これを C-Learning の出席機能を使うことにより大幅に削減できる。また、確認キーの機能を使うことにより教室にいない学生の代返も防ぐことができる。(しかしながら、確認キーの伝達による不正代返、C-Learning のログインアカウントの共有による不正代返は可能ではある)

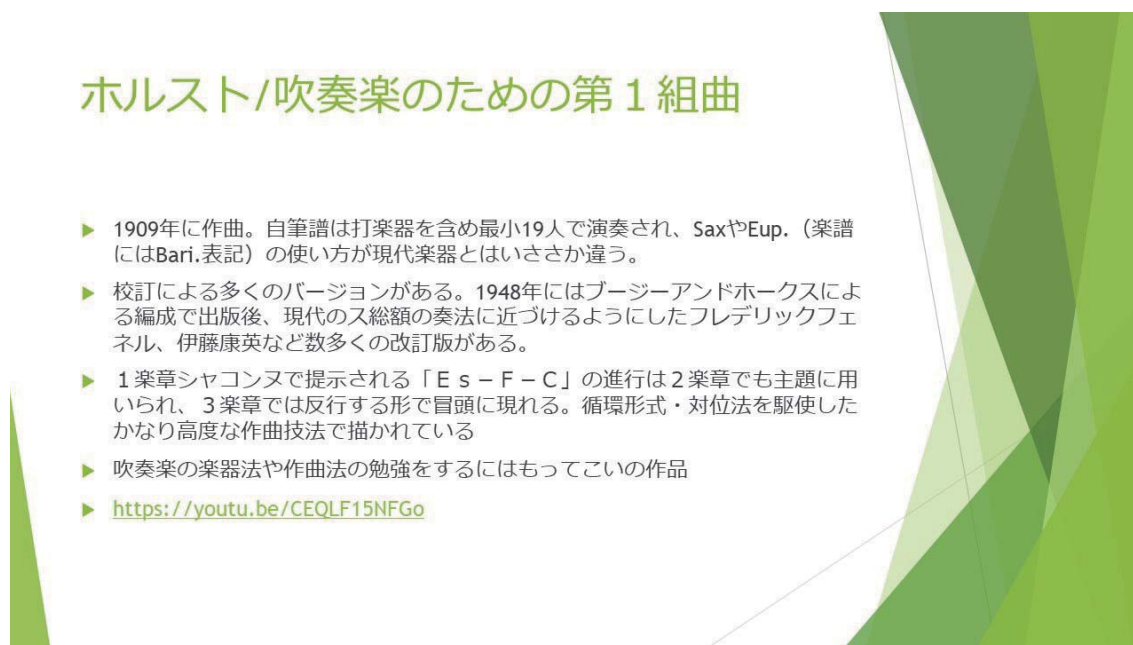
また、システムと違い、一定の曜日・時間の講義の出席設定が容易であり、予約機能を使うことにより講義開始時に教員側が設定する事も少なくすることができる。一覧画面では、それぞれの学生の出席率も自動で算出され成績管理などに役立てる事ができる。

また、PCの無い教室での管理や、学外などからでもアクセスが容易である。

3-3 インターネット資料へのアクセスの容易さ

紙媒体の資料では、難しかったインターネット資料へのアクセスが容易であることも C-Learning の利点としてあげられる。

以下は合奏・オーケストラでの資料の1枚であるが、楽曲の解説文章の下に YouTube へのリンクを張ることにより、学生が資料を読んだ後に楽曲を視聴する事が容易である。



ホルスト/吹奏楽のための第1組曲

- ▶ 1909年に作曲。自筆譜は打楽器を含め最小19人で演奏され、SaxやEup. (楽譜にはBari.表記) の使い方が現代楽器とはいささか違う。
- ▶ 校訂による多くのバージョンがある。1948年にはブージーアンドホークスによる編成で出版後、現代のス総額の奏法に近づけるようにしたフレデリックフェネル、伊藤康英など数多くの改訂版がある。
- ▶ 1楽章シャコンヌで提示される「E s - F - C」の進行は2楽章でも主題に用いられ、3楽章では反行する形で冒頭に現れる。循環形式・対位法を駆使したかなり高度な作曲技法で描かれている
- ▶ 吹奏楽の楽器法や作曲法の勉強するにはもってこいの作品
- ▶ <https://youtu.be/CEQLF15NFGo>

図 2 8/11 管楽・オーケストラ「知っておきたい吹奏楽の名曲」スライド5枚目より

また、説明が専門的になりすぎて別に説明を追加参照させたいときや、参考になるサイトへのリンクも文中に組み込む事ができ、学生の自学習の助けになる資料を作成し配布しやすい利点もある。

4. C-Learning の弱点

4-1 本学のシステムとの非連動性

3-2 で述べたように、出席管理において C-Learning の利点を挙げたが残念ながら HBG システム

と連動していないため、出席や成績を反映させるためには教員により、システムへの手入力が必要である。2重の手間がかかり、また手入力であるためヒューマンエラーへの懸念もある。講義や成績管理に複数のシステムを利用するメリットは全く感じられない。

4-2 システムダウン時の対応

C-Learning 側でのシステムダウンが起きた場合、本学では対応できず、予定されている講義は中止ないしは補講となる。

4-3 G-Suite の利用との比較

C-Learning でできる事のほとんどがG-SuiteのClassroomを利用することで可能であり、また、学生のHBGメールアドレスに紐づけられたGアカウントでC-Learningでは難しい機能を利用することができる。学生の学費の範囲でG-SuiteとC-Learningを二重に支払っていることになる。このメリットも費用対効果を考えると全く感じない。

4-4 インタラクティブなコミュニケーションが難しい

感染症予防の観点から文科省が発表したICTを利用した遠隔授業についてのレポートでもビデオ通話機能の活用による講義配信を推奨しており、C-Learningで行っている自習型講義を前提としていない。協働板の活用を呼び掛けていたが、大人数講義においてはスレッドの流れも速くなりすべての発言を追うだけで時間がとられる。また、チャット機能ではないので即時反応性も劣る。

5. 今後への提言

5-1 学生を含めたICT教育の推奨

ユビキタス社会が到来している昨今、ICT教育は最も重要な課題だと考えられる。今回の対応において、本学では最も環境の悪い学生にターゲティングしC-Learningを利用した教育を行ったが、ポストコロナにおける社会がどのように変化していくかを考えた場合、その対応は正しかったかを検証すべきである。

情報弱者をつくらないためにもICTの観点から学習内容だけではなく学校方針、また経営戦略に基づく育てたい学生のあるべき姿を考えるとこのコロナ禍を機会とし、ICT教育を推進すべきだと考える。

インターネット環境の脆弱な学生へは、還付による形で現金を支給するのではなく携帯Wi-Fi端末を貸与するなどの対応により、「最も環境の悪い学生」をICTにおける「最低限の環境がある状態」にすることにより、積極的な講義が展開できたはずである。

今後、再流行時に再度閉校した際や未知の感染症などオンラインを強いられる際の教学の質の向上を徹底的に考える必要がある。そのためには最低限でもMeetやZoom、個人レッスンなどではFacetimeやSkypeといったビデオ通話型の導入が必要である。

5-2 システムの見直し

4-1で述べた通り、C-Learningとシステムの互換性が無く、その入力や管理が手間であること。また4-3で述べた通りC-LearningとG-Suiteと同じような機能がある事を考えると、システムそのものが最適であるかを考えたい。

教員の出席・成績入力や学生の履修登録などがイントラネットでしかできず、今回のように登校を制限されている状態では管理が難しく、結果多くの手間とミスが起きた。

また、学校側から学生へのオフィシャルな伝達方法がHBGメールだけであり、大量に送られる

メールから学生が必要な情報を取り出すことが難しい状態も起きている。

C-Learning の資料・レポート管理、HBG システムの成績・出席管理、学生への連絡掲示といった機能を併せ持つポータルサイトの導入を希望したい。その際には学生証・職員証に組み込まれている FeliCa を利用した出席確認システムもぜひ導入していただきたい。

5-3 育てたい学生の像

C-Learning を通じて行われている授業は学生にとってもどうしても受け身の授業になりがちである。インタラクティブなツールを使った遠隔講義や、アクティブラーニングを推奨した講義など ICT を利用することにより行えることは多い。令和の世の中において、社会と協働する広島文化学園の卒業生を送り出すという視点において、最低限の ICT 機器を使いこなせる能力は必須であり、そのための機会を与えることは大学として必要であると考え。様々な方法が考えられるが、いくつかの大学で既に行われているように入学時に学生に 1 台ずつ機器を与えるのも、一つの方法ではないかと思われる。

C-ラーニングシステムを使った遠隔授業の体験と感想

看護学部看護学科 中村 哲

「遠隔授業はいかがでしたか？」と今更ながら問われると、「いやあ、ホトホト疲れましたよ。」と答えるしかない。この感想は今も変わらない。特にC-ラーニングのシステムでは協働板によるチャットと言うか、質疑応答は可能なものの、Gメールへのアナウンスが同時に届く。それはそれで有難いが、直接の返信は不能であり、手間がかかる。講義へはほぼ全員参加が確認できた。しかし、本当に講義になっているのかが不安であった。毎回の課題として的小テストやレポートには大多数が返信してくれたものの、数人は、これらの課題にはまったく反応してくれない。思い余って直接電話をすると自宅の外であったり、移動中の道路わきであったりする場合もあった。のっけから本学C-ラーニングの悪口を欠いてしまい申し訳ないが、他のリアルタイムの音声画像を用いる双方向システム（ZoomやTeams等）による講義の体験から言うと、そのような気持ちが強い。しかしながら、C-ラーニングには教材倉庫等の管理が簡便で、講義の振り返りとしての仕組みはしっかりしているようにも考えられる。音声画像による講義は確かに学生にとっても疑似的な体験として有用であろうが、15回以上の講義記録の保存やレメディアルとして使うのも経済的には負担が大きいのかも知れない。

講義での具体的なC-ラーニング活用には主にパワーポイントのpdf版と講義解説用として5-6部に分割したWMAファイルを講義資料として使用した。これは受講する学生がスマホを使う場合にファイルの容量が大きいと読み込むことが出来ないということで、余儀なくされたためである。看護学部の場合は「公衆衛生学」を主として対面授業を行う事が比較的多く出来たので音声資料は担当した科目中では1-2回にとどまった。しかし、非常勤講師として講義したスポーツ健康学科の科目「衛生学および公衆衛生学」では初回から最後までpdfと音声資料をC-ラーニング上に格納して、学生に活用してもらうことになった。また、そこでは期末試験もC-ラーニングの小テストとレポート機能を活用し実施した。しかしながら、試験の実施に関しては、失敗であった。何故かという、設定した選択問題の解答時間が5分と短すぎたこと、また、解答開始時間が通信障害なのかどうか分からないが、学生の側でアクセスが遅れてしまい、十分に考える時間がかけられなかったこと、さらには記述問題で、2つの質問で共に400字以内の制限をしたにもかかわらず、質問枠を2つに分けなかったため、解答が制限されたことなど、今考えれば十分に使いこなせていなか

ったと反省せずにはいられない問題が起きた。そのため、C-ラーニングによる試験について、学生からは多くの非難が寄せられる結果となってしまった。それで、今期のような非常事態の試験は、講義課題によるレポート評価や、可能であれば、講堂での対面による試験紙での実施が良いのかも知れないと思うに至った。

既に本学では Zoom や Meet, Teams 等 Google で活用できるリアルタイム動画による双方向式対面学習機能が大学キャンパス内外の会議で使われてきている。このような形式であれば、学生を小グループにランダムに分け、15 回の講義でローテーションを組み個別対話を通じた指導も可能となるかも知れない。また、日本中の通信機能が 5G に拡大されれば上記のような支障もなくなるかも知れない。今後は C-ラーニングに Zoom や Teams 同様の機能が加わることを期待したい。

「栄養と生活習慣病Ⅱ」における C-Learning を用いた遠隔授業紹介

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 鬼塚 純玲

1. はじめに

「栄養と生活習慣病Ⅱ」は、2年次後期に健康福祉コースの専門科目（選択）として開講される科目である。同年前期には「栄養と生活習慣病Ⅰ」が開講されており、そこで学修した代表的な生活習慣病に関する栄養学的知識を復習したうえで、生活習慣病罹患者に対する献立作成や調理実習の体験を通して、生活習慣病予防の重要性を理解することを主な目的として展開している。具体的な流れとしては、各疾病（糖尿病、脂質異常症および高血圧症）の罹患者に対する献立をペアで作成し、発表させた後、学生同士で評価を行い、最も人気のあった献立を用いて調理実習を実施することとしている。しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、対面で調理実習を実施することが困難となった。そこで、本授業ではC-learningを利用して遠隔で調理実習を実施することを試みた。本稿では、その取り組みを紹介する。

2. 授業の流れ

(1) 課題の提示

C-learningの「ニュース」機能を利用して、調理実習のテーマ（糖尿病、脂質異常症または高血圧症）、レシピの保存場所、提出締め切りを提示した。

(2) 動画の撮影

受講生は、C-learningの「教材倉庫」に保存されている各疾病用のレシピに従って自宅で調理を行い、その様子を動画で撮影した。

(3) 動画の提出

受講生は、撮影した動画を指定された期限までにC-learningの「レポート」カテゴリにある指定の場所に提出した。

(4) 提出の確認

締め切り後に提出の有無を確認し、レシピに掲載されているすべての料理を調理した様子が確認できない場合は、C-learningの「連絡・相談」から個別に連絡した。また、動画の提出がない場合は欠席とした。動画の提出がない場合に欠席とすることは、事前に注意喚起している。

3. 評価と課題

調理の様子を動画で撮影する際の注意事項は、C-learning授業となる以前の対面授業で丁寧に説明したが、学生間でそれを遵守できているものできていないものの差が大きかった。具体的には、撮影角度の問題で手元が全く見えていないものや、分量を正確に量っていないもの、レシピに掲載されていない材料を使用しているものなどがみられた。この点については、初回の実習における課題の提示の際に再度注意事項を伝えておくべきだったと考えるが、3回目の実習の際

に改めて伝えた後の実習においても遵守していないものがいたため、学生が課題をきちんと読むための工夫も必要であると考えられる。

本稿では動画の提出にC-learningの「レポート」機能を使用したけど、学生の中には動画の容量が大きすぎてC-learningでは提出できないものが数人おり、相談が相次いだ。事前に予期された課題であったため、そのような場合はメールで送る等の工夫をするよう伝えていたが、メールで送ることもできない学生もいたため、Googleドライブの共有フォルダを作成し、そこに保存させるなどして対応した。一部の学生は、あらかじめ動画を倍速で撮影したり、調理の全行程をわかりやすく編集するなどして提出していたため、そのような技術を事前に伝えておくすべての学生がスムーズに提出できたのではないかと考える。また、C-learningの「レポート」機能に、添付できるファイルの数の制限(3つまで)が設けられていたために、すべてのファイルを提出できなかった学生も数名いた。これについては、現在よりも多くのファイルを添付できるようになればより実用的になりありがたいが、事前に添付できるファイルの数を把握し、周知しておくべきだったと考える。

動画の内容に差があったとはいえ、ほとんどの学生が真面目に取り組んでおり、上記のような課題に対応することができれば遠隔で実習を行わせることは可能であると感じた。来年度どのような状況になるかはわからないが、再度C-learningで実施しなければならない状況になった際には、今回の課題を改善し、学生にとって有意義な実習となるよう取り組んでいきたい。



写真1 調理の様子



写真2 糖尿病のメニュー



写真3 脂質異常症のメニュー



写真4 高血圧症のメニュー

5. 学生参画型 FD 活動

短期大学

学芸学部

看護学部

人間健康学部

令和2年度 学生参画型FD活動
FD委員会主催 学生の意見を聴く会 (短期大学)

日時 令和2年9月24日(木) 15:30~16:00

場所 会議室3 (本館2階)

出席者:短大FD委員:岡田、久松、三川、学生部:金田

松元副学長、廣兼学生部長、学科長(今井、村田、清見)、

学生代表者:教育改善委員(馬野、新原、稲木、神田、秋田)

欠席者:学生代表者(有光)

学生による授業評価アンケートの結果に関する授業の改善方法について

資料:学生による授業評価アンケート平成元年度前期・後期の結果公表資料

(1) 平成元年度学生による授業評価について学生から以下のような意見があった。

①教員及び授業について

○良いこと(継続してほしいこと)

コミ:学生の理解に合わせた丁寧な授業をしていただける。授業で習ったことを見直すだけで、検定に繋がる内容が良い。先生に相談しやすい雰囲気が良い。

食物:授業の教材やプリントが解りやすく、テスト前など要点がまとめやすい。教員との距離が近く、困った時も相談できるところが良い。授業で話し方が工夫されていて、聞き取りやすい。

保育:授業で現場の話が聞けるのが良い。先生方の熱意が感じられ、学生のことをしっかり考えてくださっているのが良い。

○改善してほしい(改善したほうがよいと思う)こと

コミ:注意が甘いことがある。座学での私語が気になる。(グループワークの延長線上でたまにある。)居眠りを注意して欲しい。

食物:シラバスを見ていない人も多いと思うので、1回目の授業で授業の到達目標を伝えて欲しい。アンケートで到達目標について回答しづらい。

保育:授業内容が理解できていない人がいても先に進んでいく授業がある。授業の進度はあると思うが、学生のペースに合わせて進めて欲しい。

②学生自身について

○良いこと(継続してほしいこと)

コミ:遅刻や欠席をしないよう心掛けているところ。質問や発言が積極的である。グループワークやペアワークなど協力的に取り組めるところが良い。

食物:遅刻や欠席をしないように心掛けている人がほとんどで良いことだと思う。

保育:真面目で意欲が感じられる。

○改善してほしい(改善したほうがよいと思う)こと

コミ:授業中私語が多い。話を聞いていないことが多々ある。遅刻が当たり前の感じがする。授業についての勉強。

食物: 専門科目、教養科目共に、一週間の勉強時間がもう少し増えればよいと思う。課題は出るが、30分程度で終わる内容。予習・復習の捉え方が難しい。どこまでやればよいのかがわからない。例えば、テーマなどを教えていただくとわかりやすいと思う。

保育: もう少し自習をした方がよいと思う。授業中にマイナス発言(めんどくさい、やりたくない等)をする学生がいるので、課題が出しにくいのかもかもしれない。課題は必要だが、課題が多くなると負担になる。

③その他

○ C-Learning での授業について

- ・ コミは実習がメインなので、チャットでは理解が難しかった。
- ・ 自宅にPCがない、プリンターがないなどの理由で資料や課題のプリントアウトは難しい。
- ・ 協働版の倉庫にある課題のレポートは、どちらも見ながらやるので難しい。課題を見ると、レポートが消える。
- ・ 保育の実習系は皆でやることが出来ない。身体表現など体を動かす授業では、体操やストレッチをやっていない人もいる。
- ・ 講義は対面授業の方がわかりやすい。

(2) 授業改善のための意見(授業担当者への要望や提案など)は以下のとおりであった。

① 施設について

- ・ ICT 支援室が時間どおりに開いていないことがある。早めに来てパソコンを使いたかったが、利用できなかった。
- ・ 子ども学科と授業が重なると、ピアノ練習室が使えない。ピアノレッスンを練習室で行うこともあり、練習室が足りない。
- ・ 冷房が効きすぎて寒い部屋がある(6102 教室)
- ・ 食堂についての現状は問題ないが、サラダなどが少なく、ご飯の種類を増やしてほしい。コンビニの自販機導入を検討してほしい。

② 学生自身について

- ・ 遅刻者に対して厳しく接して欲しい。遠くから来る人は、遅刻をしないよう早めに出発し時間どおりに来ている。遅刻しても悪びれることなく教室の前から堂々と入ってきて、授業が中断することもある。

(3) 令和2年度「学生の意見を聴く会」まとめ

新型コロナ感染対策の中、学生の率直な意見を聴くことができた。先生方の熱心な指導が伝わっている反面、授業運営での問題点もしっかりと話してくれた。学生には今後も教育改善委員として遠慮なく活発な意見を出してもらいたい。これらの意見は、今後、教育・授業改善に役立てる予定である。

学生参画型 FD 活動

学芸学部 FD 委員会

1. 学芸学部の取り組み

令和2年9月28日(木)に学芸学部FD委員3名(八島、山中、桑田)、学生教育改善委員4名(子ども学科4年生2名、音楽学科4年生2名)により、以下の通り教育改善に関する意見交換を行った。

(1) 平成元年度授業評価アンケートの結果について

1) 教員や授業内容について

アンケート結果から、学生の全体的満足度は高いことが分かった。このまま質の高い授業を維持してもらいたい。特に教材選択や伝え方についての評価が高いことや、学生から教員へ相談しやすい環境を継続してほしい。一方で、遅刻や欠席に対してもっと厳しく対処し、課題をしっかりと出すことで、学生が授業に主体的に取り組めるような素地を作ってもらえると、授業への関心が高まるように思う。

2) 学生自身について

全体的に授業に関する意欲や関心が高いのは良いと思う。一方で予習復習については十分に行われていない現状が見える。しっかりと予習復習に必要な時間をとって学習に取り組み、遅刻や欠席をなくして、授業中の態度や課題への取り組みが改善される必要があると思う。予習復習が行われていないと授業の進度に応じて難易度があがるとついていけなくなると思う。意欲の結果と実際の態度や取り組みが一致していないと思う。

(2) 授業改善のための意見

1) 授業について

①オンライン授業について

家にパソコンがなくスマホだけで通信環境が整っていないと難しい。授業時間とそれ以外のオンとオフがつけにくかった。話し合いは対面授業の方がよい。教材がデータで保存できるのはよかった。出席の信憑性なども含めて、評価の公平性が担保されているか気になる。

C-Learning の協働板機能を使ったやり取りではチャットのように自動で更新されず、やりにくかった。Zoom等のアプリを使用して話し合いが行えるとよい。表情が見えないとやり取りがしにくい。C-Learningだと普段意見を出さない人でも参加できるのは良いが、書かれる意見は同じようなものが多く、議論が深まっているかはわからない。

②授業全般

アクティブ・ラーニングをもっと取り入れて欲しい。講義の中で概論に留まっているものは、もう少し実践や事例などにも触れてもらいたい。コロナ禍での対面授業は演習・実習授業に絞って講義はオンラインなど区別してもよいのではないかと。特に就活生には配慮してほしい。対面授業でもC-Learningを活用した資料提供を行ってほしい。

2) 教育機器や設備について

一部設備の老朽化や美化に問題があるので改善してほしい。ノートパソコンの貸出期限が短いので、もう少し長くしてほしい。

(3) 今後の課題

今後も新型コロナウイルス感染拡大防止のための遠隔授業の実施が予想される中、学生教育改善委員の意見を受け、遠隔授業と対面授業のバランスも含め、授業運営の改善をどのように進めていくかについて、検討を行っていく必要があることを確認した。

令和2年度 看護学部アクティブ・ラーニング学生参画活動報告

1.FD/アクティブ・ラーニング委員会について

- 1) 目的:教職員組織によるアクティブ・ラーニング推進委員会と連携協働し、学生の主体的学びを促進するために、学生の意見を集約すると共に授業経営に参画する。
- 2) 役割:授業に対する学生のニーズを情報収集しFD/AL 委員会へ提供する。
学生の主体的学びを促進するための検討を行う。
学生に対して主体的学びの動機付けを行う。
教員とともに授業経営に参画する。

2.FD/アクティブ・ラーニング委員会 (AL 支援教員:林君江 出田聡子)

3 年次生:川根千明 田畑紗耶夏 上福浦朋美 山脇鶴稀乃(4 名)

主な活動:委員会開催、学年をこえた学びの促進(勉強会など)の企画などであるが、今年度は新型コロナウイルスのため、各学年から委員を募って会議を持ち活動することがほとんどできなかった。科目内での活動を紹介する。

3.今年度の主な活動について

1) 看護関連領域総合演習 『先輩に聞いてみよう』への参画

入学間もない1年生に毎年、参画委員が普段の学習方法、講義ノートの取り方のコツ、試験対策などを実際に使っているノートなどを見せながらレクチャーしている。小グループに分かれて各グループに先輩が入って担当するスタイルで実施してきた。

今年度は感染症対策で年度当初から遠隔講義になり、対面での小グループでのレクチャーはできなかったため、C-learning でのレクチャーとなった。3年生は事前に1年生から質問を募集し、質問へ回答するパワーポイントを作成し進めた。主な質問内容は学生生活について、勉強の仕方や講義ノートの取り方のコツ、試験について、実習について、コース選択についてなどであった。3年生は自分たちが困った体験を紹介しながら、どうやって乗り越えたかを丁寧にパワーポイントにまとめて紹介した。

2) 活動後の学生の感想

3年生の感想:直接メンバーで集まることができない中で資料を作ったり、打ち合わせをしたので1年生に上手く伝わるだろうかと当日まで不安だった。大変だったが、いきなり登校できなくなった1年生の不安が少しでも軽減できるといいなと思いながら実施した。

1年生の感想:登校できず、不安なことがたくさんあったが、少しやわらいだ、勉強を頑張らないといけないなとあらためて思った、不安だったが楽しみになってきたなどの安堵した気持ちや前向きな気持ちが表現されていた。

学生参画型 FD 活動の取組みについて

人間健康学部

令和 2 年度の授業について意見を聴取するため、学生参画型 FD 委員会を後期終了後に開催した。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、メールでの開催とし、学生教育改善委員の 4 名に参加をお願いした。

(1) 学生教育改善委員からの意見

- ・遠隔(個人メールなど)だから先生や友達に気軽に相談できた
- ・先生方からのメールや説明が残るので何度も確認できたことがよかった
- ・見落とし、テスト時の回答など先生と生徒の間のコミュニケーションが難しかった
- ・パソコンを使った授業、実技などは環境がない人もいたので対面の方が取り組みやすかった
- ・先生がスライドを見せながら解説している動画を入れた授業がわかりやすかったです。その他の授業は、覚えている限り資料が送られただけだったりとあまり新しいことを学んだ気がしなかった
- ・C-learning での講義はレポートで済ませることが多く、学びとしては内容が薄く感じてしまうこともあった

(2) 学生教育改善委員からの意見を受けて

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため遠隔授業が多かったが、その遠隔授業に対して否定的な意見も複数寄せられたため、学部内で共有し、改善に努めていきたい。

(3) 今後の課題

毎年、各学年から学生教育改善委員を選出していたが、今年度は対面授業が少なく十分な募集活動が行えなかったため、1 年生委員を選出することができなかった。次年度に新 1・2 年生の委員を選出し、4 学年揃った学生参画型 FD 活動を実施していきたい。

6. 学外アクティブ・ラーニング研修会等報告

2020 年度 ICT 利用による教育改善研究発表会参加報告

看護学部 看護学科 金澤 寛

学外アクティブ・ラーニング研修会等報告

－2020年度 ICT 利用による教育改善研究発表会参加報告－

看護学部 看護学科 金澤 寛

1. 研修会概要

【日時】令和2年8月25日(火) 10:00-18:00

【場所】アルカディア市ヶ谷(私学会館)Web 開催

【主催】公益社団法人 私立大学情報教育協会

【後援】文部科学省

【開催趣旨】本発表会は、全国の私立大学・短期大学教職員を対象に、教育改善のための ICT 利用による FD(ファカルティ・ディベロップメント)活動の振興普及を促進・奨励し、その成果の公表を通じて大学教育の質的向上をはかることを目的として、平成5年より実施している。最も優れた発表に対しては文部科学省大臣賞を、またこれに次いで優れた発表に対しては協会賞等を授与し、その教育業績を顕彰する。

【本発表会のねらい】教員個人や大学・学部等組織レベルでの ICT を利用した教育改善の取り組みと効果を公表することで、アクティブ・ラーニングによる教育方法の改善、学修成果の測定と可視化など、教育の質向上に向けた課題の解決策を示唆することを目指している。

2. 発表内容

発表は、Web 開催であった。Web 上で2会場(A会場・B会場)を設定し、参加者は興味のある会場にログインし参加した。A会場は、人文科学・語学・社会科学・幼児初等中等・芸術・スポーツ・環境・地域創生・キャリア教育・分野横断系(SDGs 含む)・その他、B会場は、初年次教育・情報基礎・情報専門・理学・工学・農学・生活家政・医療・データサイエンス・AI教育系・その他、であった。発表件数は37件、参加者は124名であった。

本稿では、特に本学において情報共有が望まれる発表についてのみ報告する。

(1) アクティブラーニング実現のためのオンライン授業における教師の協働(加納・赤木, 國學院大学)

アクティブ・ラーニングをベースとした共通教育科目を、FD研修の実施により、コロナ禍に短時間で同時双方向型オンライン授業(Zoom, Google Classroom 併用)に転換した。担当教員10名は ICT 利用実績における違いが大きかったが、授業内容に即した事前研修により学期開始直後からオンラインでの協働学習推進を可能にした。日常的な情報共有とサポート体制が奏功し、次第に ICT 関連の問題解決能力が向上、教師間の協働、学生間の協働、ひいては教師と学生の協働が強化され、学習効果につながった。

(2) オンライン授業の活用による大規模授業の革新と学生の参加意識, 理解度, 大規模授業の革新と学生の参加意識, 理解度, 満足度の向上(杉山章, 相模女子大学)

大教室での大規模授業の多くは大学生として基礎的な知見を習得する重要な授業である。しかし、教員の説明が聞こえにくく、プロジェクターが見えづらだけでなく、教員と学生のコミュ

ニケーションが不十分なままの教員による一方的な講義スタイルは現代の学生の関心や集中力を高めることは容易ではない。教育改善の試みとして事前の授業準備と ICT 環境の確認を行なった上で、オンライン会議システムを活用し、リアルタイムのオンライン授業と効果的な授業運営を組み合わせた実践では、学生の参加意識、理解度、満足度の向上が確認でき、オンライン授業の活用は大規模授業の革新につながる有用な授業形態の一つになる可能性を示した。

(3) サーバーの落ちない遠隔授業方式の成功例～100MB まで朝 8 時まで～(蒲池みゆき, 工学院大学 他)

新型コロナウイルス感染拡大を受け、工学院大学では遠隔授業タスクフォース(以下, TF)を立ち上げ、全科目遠隔授業化の方法について議論した。TF は、学生の契約通信容量制限や世界的トラフィック増大等の課題を踏まえた指針を示し、現時点まで学生に通信機器を貸与することなく、サーバーダウンや通信容量枯渇などの問題を生じさせずに円滑に遠隔授業を実施させることに成功している。その主な内容については、1.データダイエットの徹底(1 回の授業資料のサイズは 100MB 以内)、2.タイムシフトの徹底(学生はトラフィックの少ない朝 8 時までに授業資料をダウンロードする)、3.教員および学生へのマニュアル配布、説明会の実施と授業サポートの徹底、4.学生は「必ずしも PC は保有していないが、少なくともスマートフォンは所有している」ことを前提、これらを踏まえ、遠隔授業を実施した。

(4) 基礎化学実験の LMS を活用したオンラインの試み(永井, 他, 明治大学)

新型コロナウイルス感染症の急速な拡大に鑑み、明治大学ではオンライン授業を実施することとなった。そこで、対面授業に近い環境を構築すべく明治大学の LMS である「Oh-o!Meiji」システムとビデオ会議システムを併用した、オンライン実験を企画・実施した。①オンライン実験教材の作成、②オンタイムを意識した授業システムの構築、③ビデオ会議システムを利用した授業運用、④課題設定の工夫、⑤学生へのフィードバックと事後学習、を課題として授業を実施したところ学生に高評価であった。

(5) リアルタイム・メンタリング式 e-ラーニングによるプログラミング教育(桑原恒夫, 神奈川大学)

情報が必ずしも専門ではない大学 1 年生を対象に、C 言語の基本文法の諸項目の知識とそれらを使用したプログラミング・スキルを習得させる講義と演習の 2 つの授業を実施した。講義では、空欄補充型 e-ラーニングシステム、演習ではレポート管理システムを使用した。2 つのシステムとも、1 人の教員が多数の学習者に対し、学習者個々の解答内容に即してリアルタイムでアドバイスが可能なシステムである。両科目とも必修科目ではないにも関わらず、高い合格率を達成した。

(6) 初年次教育における e ポートフォリオ「今週の活動とトップニュース」の活用と初期成果(藤本元啓, 崇城大学)

初年次教育の一環として、自己管理、社会とキャリアへの関心、学修意欲と自学自習の促進、文章作成能力の向上、エビデンスに基づく自己評価と相互評価による振り返りの誘発を図るために、e ポートフォリオ「今週の活動とトップニュース」を開始した。その初期成果として、自己管理能力、社会動向への関心度、自学自習の習慣化、教員のコメントに対する肯定的な到達度と満足度は全て 80%を超え、自学自習時間はポートフォリオ実施以前と比較して増加し、PDCA サイ

クルを体得しつつある。

(7) 数理基礎科目のビデオ配信による学生の学習活動の深化と教育効果の評価(西誠, 金沢工業大学)

令和元年度前学期に、数理基礎教育課程の代表科目である線形代数 I・IIIにおいて、教員の協力を得て授業の説明および演習教材ビデオを e-シラバスのメディアサイトを通じて学生に配布した。その結果、授業の開講時期に合計で 90000 以上のコンテンツの視聴があり、学生が授業に応じて、ビデオを活発に視聴していることが確認できた。また、アンケート結果や成績状況により、授業ビデオは学生の学習にとって非常に有効なコンテンツであり、課外学習の充実や教育効果向上に役に立ったことがかくにんされた。

(8) 実習系科目における「高次技能習得型」反転授業の成果と課題(緒方泉 他,九州産業大学)

「内化と外化の往還」を繰り返し行う学習活動(知識の獲得・協調活動・表出活動・リフレクション)を通じた、実技系科目の「高次技能習得型」反転授業デザイン案による、教育改善の実践事例を紹介した。具体的には、「紐を結ぶ」、「物を包む」、などの生活技術の継承がなされていない国家資格「学芸員」を目指す学生に対して、反転授業により、あらかじめ「つまづき」を自覚させ、技能・コツの習得に向けた時間確保と模倣から習得へのプロセスの確立を目指した教育実践による成果と課題を提示した。

(9) クラウドを活用したシームレスなサポート組織によるオンライン授業運営体制の構築(松岡・佐野・高嶋, 筑波学院大学)

オンライン授業の全学的導入と運営には相応のサポート体制の構築が必要である。しかし、小規模の教育機関では、ヒト・モノ両面でのリソース不足により、専門部署の設置やスペシャリストの配置といった対策を十分に講じることができない。そこで、シームレスなサポート組織によるオンライン授業の導入と運営を試みた。その結果、わずか 3 週間で全学的なオンライン授業導入が叶い、その後も数百件のトラブル解決要請に迅速に対応しながら授業の安定運営を果たしており、学習障壁の解消や FD を通して教育効果の向上に貢献している。

(10) 医療系学部における数理・データサイエンス教育の実践と教育改善効果の検証(二瓶 他 北海道医療大学)

医療系学部における数理・データサイエンス・AI の共通基盤教育に対して ICT 活用による教育改善を図った。まず、Google Colaboratory を利用してデータに触れながら AI を学べる環境を構築し、統計ダッシュボードを利用してディプロマポリシーに沿った授業を設計した。また、オンラインアプリケーションを利用して問題発見課題解決型協働学修を実践した。解の定まらないような難しい問いに対して試行錯誤しながら演習に取り組むようにしたことで学びの達成感を醸成できた。さらに、データ分析における要求や洞察の場面で必要となる知識や技能の向上を認めた。

3. 総評

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大を受け、大学はオンライン授業を余儀なくされたが、本研究発表会に参加し、それぞれの大学で試行錯誤しながらもそれぞれの大学で可能なオンライン授業を実施していることがわかった。

(1)では、担当教員の IT リテラシーの知識不足はあるものの、授業内容に即した事前研修により学期開始直後からオンラインでの協働学習推進を可能にしており、日常的な情報共有とサポート体制が奏功し、教師間の協働、学生間の協働、ひいては教師と学生の協働が強化される結果となっていた。本研究発表会の全体を通して、教員のリテラシー不足はどこの大学でも問題点として挙げられているが、研修会やこまめな情報共有を通して学生・教員の協働がうまくいった良い事例であった。

(2)では、ICT を用いることで、大規模授業での生じるデメリットをメリットに変える授業案を提案実施し、その結果、学生の参加意識、理解度、満足度の向上が確認でき、オンライン授業の活用は大規模授業の革新につながる有用な授業形態の一つになる可能性を示した。

(3)では、大学が集中している都心の最大の懸案事項であるサーバーダウンに対応し、4 コマ×5 日=2GB/1 週、つまり月に 8GB=100MB に抑えることでデータのダイエット化に成功している。その際、原則的に動画配信は禁止である。

(4)(7)(8)では、オンライン授業が難しいとされる実習系の授業における取組みが報告されており、実習系の授業ではビデオ教材を作成し、その教材を用いた授業展開は効果があることが示されていた。本学においても実習系の科目が多数開講されているため、参考にできると考えられた。

(5)では、講義では、空欄補充型 e-ラーニングシステム、演習ではレポート管理システムを使用し、2つのシステムとも、1人の教員が多数の学習者に対し、学習者個々の解答内容に即してリアルタイムでアドバイスが可能なシステムであり、学生にとっては学習効果が高いと考えられる。

(6)では、初年次教育の一環として、自己管理、社会とキャリアへの関心、学修意欲と自学自習の促進、文章作成能力の向上、エビデンスに基づく自己評価と相互評価による振り返りの誘発を図るために、eポートフォリオ「今週の活動とトップニュース」を実施しており、700名の初年次学生を25クラス編成にし、20名の教員で対応している。近年、初年次教育の重要性が言われている中、学生が自発的に Web 上でポートフォリオを自発的に作成していくシステムが構築されている。具体的には、①今週の学修目標(自己実現の目標設定)、②毎日の新聞で興味を抱いた記事の見出し(社会動静への関心)、③②で特に興味を持った記事の概要 100-150 字(文章をまとめる能力の向上)、④③の批評 200-250 字(批判的能力と文章作成能力の向上、感想不可)、⑤毎日の自学自習内容(授業以外の課外授業とその所要時間数、授業以外の自学自習の習慣化)、⑥課外活動の内容とその所要時間数(スケジュール調整能力の向上)、⑦朝昼夕食摂取の有無、⑧睡眠時間数(健康管理の習慣化)、⑨今週の目標達成度 200-250 字(自己洞察とそれに基づく計画設定能力の向上)をもとに PDCA サイクルを回していくが、あまり意識せずに身につけられる点が優れていると感じる。

(9)では、小規模校でのオンライン授業への転換事例が報告されており、専任教員 27 名のうち 10 名の教員が体制づくりに協力し、情報共有をスプレッドシートで行った。その際に、対応事項、未対応事項、不可事項をそれぞれ色分けすることで、現状の可視化を図った。少人数教員での体制づくりのため、しっかりとしたサポートシステムの概念図を作成し、それに準拠して対応していた。また、学生からのトラブルについては、グーグルフォーム(多肢選択型)を利用し、自動振り分け機能を使うことで労働負荷の軽減に結びつけていた。

(10)では、Google Colaboratory を利用してデータに触れながら AI を学べる環境を構築し、統計ダッシュボードを利用し、実際のデータに触れながらデータ分析力を養う試みがなされていた。

実際に用いる課題は、①学生の関心、②将来像との関わり、③課題難易度の高いもの、を設定していた。効果の検証については、グーグルスライドを利用し、到達度を4段階で評価するとともに、学生が主語になるように各回で自己評価を行うことで、学生自身の到達度を客観的により具体的に把握することを可能にしている。

7. 授業教材ビデオ制作

給食実務実習室オリエンテーション DVD 制作

食物栄養学科 石尾 はつみ

簡易伴奏法の授業視覚化サポートをめざして

学芸学部 音楽学科 多田 愉可・桑田 一也

ソーシャルワーク演習（面接技法）の教材づくり

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 村上 須賀子

給食実務実習室オリエンテーション DVD 制作

食物栄養学科 石尾はつみ

1. はじめに

「給食計画・実務論」および「給食計画・実務論演習」は食物栄養学科 1 年次前期に開講されている科目である。給食の目的や重要性を理解するとともに、給食計画の立て方や、食事を提供するまでの具体的な栄養士の実務（栄養管理、衛生管理、作業管理など）について学び、演習を通して実践的に知識を修得すること、給食実務実習室の使用方法を理解することが目的である。実習室への入室方法や、給食における調理機器の具体的で安全・衛生的な使用方を理解することは、1 年次後期に開講される「給食計画・実務論実習」につながる、重要な学びのポイントである。普段触れることのない大量調理用の機器は繰り返しの使用によって操作方法を修得することが望ましいが、回数が限られているのが現状である。そこで、実習室への入室方法と調理機器の取り扱い方法について、学生が予習・復習用の教材として利用できるように実習室オリエンテーション DVD を制作することとした。

2. DVD の内容

基本的な使用方法と注意すべき衛生面については、必ず、解説することとした。

(1) 入室から身支度

実習室への入室、身支度・着替えの方法について解説を加えながら具体的に実施する。

(2) 検収室

検収室の役割と検収についての解説をする。

(3) 手洗い

手洗いについての解説をする、ただし、手洗い動画は別に用意があるため作成しない。

(4) 下処理室

下処理室と設置している機器について解説する。



写真 1 三層シンクと酸性水生成装置



写真 2 ピーラー

(5) 主調理室

主調理室と設置している機器について使用方法を含めて解説する。



写真3 回転釜



写真4 スチームコンベクションオーブン

(6) 洗浄室

洗浄室と設置している機器について解説する。

3. 今後の活用

来年度1年次前期開講の「給食計画・実務論」および「給食計画・実務論演習」の中で、実習室入室前の予習として、受講生に視聴してもらう予定である。また、C-learningの教材倉庫などを活用し、いつでも見返せるようにする予定である。前期の講義・演習で得た知識が後期の実習で発揮できるよう、夏季休暇中や、後期実習前にも学生が自由に見返せるように工夫していきたい。今年度の1年次後期に開講された「給食計画・実務論実習」では、実習室への入室回数が十分に確保できなかった場面もあり、すべての学生がすべての機器を使用できたわけではない。実習後のアンケートでは、「もっと機器をたくさん使ってみたかった」「使用できていない機器があるので、プリントで復習しようと思う」などのコメントがあった。静止画像だけでなく、解説付きの動画を見ることによって、より理解が深まると考えられる。学生の主体的な学びのため、2年次にも復習教材として使用できるよう、学科の教員と連携して、教材の公開を行いたいと考えている。特に、栄養士免許取得のための必須科目である「給食実務校外実習」の事前学習として、基本となる衛生管理、作業管理の復習のため活用していきたい。

簡易伴奏法の授業視覚化サポートをめざして

学芸学部 音楽学科 多田 愉可

桑田 一也

1. 制作にあたって

学芸学部音楽学科では多くの学生が教員免許資格取得を目指す傾向にはあるものの、ピアノ演奏を得意としない学生が少なくない。教員採用試験や学校教育現場において、ピアノ実技は必須となるため、音楽学科の教職必修科目である簡易伴奏法におけるサポートとして、教材開発を行うこととした。

中学校学習指導要領音楽編 第4章指導計画の作成と内容の取扱い(2.)内容の取扱いと指導上の配慮事項(2)のアには、(ウ)我が国で長く歌われ親しまれている歌曲のうち、我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの(共通教材)を含めた指導が明示されている。広島県教員採用試験の実技試験にも取り上げられるこれらの曲を弾きこなすことは、本授業の命題と考えられる。

そこで、ピアノ演奏の経験が少なくピアノ演奏スキルに不安を抱える学生が共通教材に親しみながら伴奏をする楽しさや習得の達成感を味わえるよう、コードネームに着目した教材を試みることにした。コードネームは読譜に比べ修得が早く、とくに歌唱共通教材では主要3和音が中心となっていることから使用されるコードの数は多くない。ピアノ演奏の画面上にコードネームを重ねることで視覚的にコード進行を捉えさせ、読譜が不得手な学生であっても曲調とともにコードの変化を理解し、旋律とコードの関係を学ぶことができる。これまで、歌唱共通教材のための視覚的教材はほとんど見当たらず、本授業を推進するためのサポート教材としての役割は大きいと考える。

2. 共通教材の概要

	作詞/作曲	拍子	調	テンポ	使用されているコード
赤とんぼ	三木露風/山田耕筰	3/4	変ホ長調	♩=60くらい	E ^b , B ^b (7), A ^b , E ^b aug, Cm, Fm7,
浜辺の歌	林古溪/成田為三	6/8	ヘ長調	♩=104~112	F, Gm, B ^b M7, C(7), C aug,
荒城の月	土井晩翠/滝廉太郎	4/4	口短調	♩=69~76	Bm, Em, F [#] m, F [#]
夏の思い出	江間章子/中田喜直	4/4	ニ長調	♩=63くらい	D, A7, G, C aug, Em9, F [#] m, B7, Em
早春賦	吉丸一昌/中田章	6/8	変ホ長調	♩=116くらい	E ^b , B ^b (7), A ^b , Cm, Fm(7), Edim7
花の街	江間章子/團伊玖磨	2/4	ヘ長調	Moderato	F, E7, B ^b , C aug, C(7), F7, Gm, Dm, G [#] dim,
花	武島羽衣/滝廉太郎	2/4	ト長調	♩=60~66	G, D, Am, C, Am, A7

3. コードによる簡易伴奏の留意点

教材用 DVD では画面上にコードを表示し、使用されるコードを理解できるように工夫をしたが、コードの基本形と併せて、転回形を学ぶことが重要となる。ピアノ演奏経験が少ない学生にとって、和音の跳躍はミスタッチのリスクが高くなり弾き歌いの場合においても相応しくない。より弾きやすくするために和音の転回が必要不可欠となる。運指については、コードを学ぶ段階で理解させる必要がある。コードによる簡易伴奏では曲調に相応しい伴奏形が求められる。楽譜通りでなくても、コード、曲調に相応しい伴奏形によって歌唱指導は円滑にできる。簡易伴奏法では読譜と同様に、楽譜からコードネームに置き換える練習が必要となる。

4. 制作を終えて

今年度の本制作にかかわっては、従来から計画を立てていたものの、コロナ禍のため制作が遅延したことで計画通りに授業の中では活用ができていない。よってその成果と課題を述べるには至らないが、次の効果を期待することができる。

- ・ 共通教材を知らない学生が多く、曲を知ることには時間を要していたが、授業の導入で本 DVD を使用することにより、曲調や曲の概略をスムーズに理解させることができる。
- ・ コードネームの指導とともに、曲中のコード進行の流れをつかませることに有効活用することができる。
- ・ 曲調とともにコードのトーンを感覚的につかませることができる。

来年度からの授業で本 DVD を活用することで、共通教材の伴奏を円滑に習得させることができるように努める。

ソーシャルワーク演習（面接技法）の教材づくり

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科

村上 須賀子

1. はじめに

コロナ禍で例年通りの教育が出来ない事態に至った。殊に学生参加の科目である演習や実習に影響を受けることになった。実習先から受け入れを断られ、学内実習を余儀なくされたこと、技術を伝授する演習を対面で出来なくなったことは、教育上、大きな痛手であった。幸いビデオ制作の機会を得て、この痛手を軽減することが出来た。

(1) 構成

3年生の医療機関志望学生2名と高齢者施設から断られた学生1名の計3名の学生に、事例の解説と読み込み、リハーサルを1日、録画と振り返りで1日費やした。

事例は「「面接技法入門」・対人援助のための相談面接技術——術逐語で学ぶ21の技法」岩間伸行著 中央法規を参考に組み立て、23分の面接技術のロールプレイのビデオを制作した。

(2) 内容

1. 事例の背景

ワーカーは総合病院勤務の社会福祉士である医療ソーシャルワーカー。来談者はAさん（80歳男性）の娘

Aさんの経過

肺炎で入院していたAさんは退院を2日後に控えていたがトイレに行く途中に転倒し、右大腿骨頸部骨折。内科から整形外科に転科し、手術を控えている。

面接場面

整形外科主治医より、退院支援に向けてキーパーソンである娘に面接してほしいと依頼があり、初回面接となる。

2. ビデオの構成

セッション①・初めて来談者を迎え入れる場面

医療ソーシャルワーカー：学生

来談者：学生

*まず、ロールプレイとは、その役割を演じたときに感じた自分自身の心の動きをしっかりと認識することにより、将来支援者となったときに適切な態度がとれるようになることを目的とすることを解説した。

【留意点】

*医療ソーシャルワーカーの役割を自己紹介し、本日の面接の意図を説明すること。

- * 来談者の不安を受け止めること。
- * 面接場面の意図を理解しておくこと。
- * 依頼された事例の家族構成、病態などを事前に確認し、頭にいれて臨むこと。

セッション②・コミュニケーションの基本

医療ソーシャルワーカー：学生
来談者：学生

【留意点】

- * うなずきのバリエーションもいろいろあるように顔の表情、手振り、声の出し方などノンバーバルコミュニケーションにも留意すること。
- * 私服、白衣の違いなど身だしなみ、アクセサリなど外観にも留意すること。
- * 机の上、椅子の位置など面接室の環境にも心配りすること。

セッション③・面接の展開場面

医療ソーシャルワーカー：教員・村上
来談者：学生

【留意点】

- * 介護保険など、社会資源の利用方法などの情報提供は具体的に解りやすく行うこと。
- * 他機関を繋ぐときも具体的な資料を示したり電話したり細かい配慮を行うこと
- * 来談者のポジティブな動きには、すかさずコンプリメントすること。
- * 来談者が病状やリハビリに関してどの程度理解しているか確認する。認識不足があれば再度医療関係者からの説明を提案すること。
- * 場合によってはカンファレンスの開催を提案する。
- * 自己決定の尊重から、医療ソーシャルワーカーのすべての提案に対して来談者の意向を確認すること。

セッション④・面接の終了場面

医療ソーシャルワーカー：教員・村上
来談者：学生

【留意点】

- * 尋ね残し、言い残しはないかゆっくり確認して終えること。
- * ワーカーが続けて相談に乗っていくという意思を伝えておくこと。

(3) 効果

録画された自分たちの姿を見て振り返り、気づけなかった癖や未熟さなど、新鮮な発見があったようで、個々人の自己覚知につながった。実習に行けなかったマイナスをプラスに転じることが出来た。

また、2年生の「ソーシャルワーク演習」の授業で完成させたビデオをラインで放映し、先

輩たちの失敗や留意点を盛り込んだ解説付きの面接場面を視聴させたところ、リアルに学べたことで、その後のディスカッションも活発で深まりがあった。2年生が来年度は自分たちもビデオ制作をしたいとの要望があり、今回のビデオのタイトルは「パートⅠ」とした。

録画の編集、キャプションなど、丁寧な対応をしてくださった広島ビデオセンターの宇都宮俊治氏に感謝である。



写真1 「面接技法 part.1」動画の一コマ

8. オープン・コモンズ／ラーニング・コモンズ利用状況 及び ICT 支援員の取組

阿賀キャンパス

オープン・コモンズ活用状況と ICT 支援員取組の報告

看護学部 看護学科 若狭 美乃里

長束キャンパス

ラーニング・コモンズ活用状況と ICT 支援員取組の報告

短期大学・学芸学部 弥富 純子

坂キャンパス

坂キャンパスにおける ICT 支援員の取り組み

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 鬼塚 純玲

オープン・コモンズ活用状況と ICT 支援員取組の報告

看護学部看護学科 若狭 美乃里

1. 期間 : 令和2(2020)年4月～令和3年2月
2. 場所 : 阿賀キャンパス2号館4階(オープン・コモンズ)

◇利用状況

	利用回数	利用人数	利用時間	BIGPAD 利用	ノート PC 貸出
利用状況	123 回	670 人	84 時間	20 回	1,782 回

◇利用内訳

	講義	セミナー	実習	国試勉強	地域貢献	会議	その他	合計
利用回数	8 回	15 回	42 回	41 回	0 回	13 回	4 回	123 回

3. 取組 : 今年度は新型コロナウイルス感染症防止のため、4月5月は休講に伴い図書館も臨時休館となった。6月に対面授業開始となり、マスク着用、手指消毒、ソーシャルディスタンスなど徹底した感染防止対策を施した上で短縮開館を実施した。オープン・コモンズは密を避けて、ゼミ単位の研究指導、グループ単位での学内実習、また4年生希望者による国試学修の場として活用された。11月下旬の全国感染拡大により休講、再開が繰り返され、1月からは完全に遠隔授業に移行された。利用回数123回670人、前年度比利用回数1.6%減、利用人数は30.7%減となった。その中でもお互いの顔や声を確認しながら他キャンパスとの意見交換やコミュニケーションをとるため遠隔会議やオンライン研修の場として盛んに活用された。



遠隔会議の様子



3密防止のための机配置とステッカー

4. ICT 支援員の取組 :

利用が多い看護学生・教職員のために、iPad、BigPad(電子黒板)、プロジェクターなど機器説明やトラブル対応を行った。オンライン会議のサポート体制を整備し、教職員や学生の問題解決を図った。遠隔授業を余儀なくされる一年となり、C-Learning(遠隔授業システム)について、スマホ版アプリのログイン方法、教材倉庫へのアップロードなど問い合わせが集中した。2月末までの支援員室のノートパソコンの貸出数は2,183台となった。

ラーニング・commons活用状況と ICT 支援員取組の報告

短期大学・学芸学部 弥富 純子

1. 期間 : 令和2(2020)年4月～令和3年2月
2. 場所 : 長東キャンパス2号館2階(1407教室)

◇利用状況

	利用回数	利用人数	利用時間	BIGPAD 利用	ノート PC 貸出
利用状況	272 回	1,127 人	394 時間	183 回	2,575 回

◇利用内訳

	講義	セミナー	自主勉強	補講	会議	合計
利用回数	198 回	55 回	13 回	2 回	4 回	272 回

3. **取組:** 感染防止対策として、4月5月は休講に伴い利用制限となった。6月の対面授業開始より、席数7席に半減・机の消毒・換気に注意喚起を行いながら利用を開始した。
 保育学科では1年間続けたゼミで、インターネット上のオンラインストレージで共同論文作成を継続した。子ども学科では電子黒板を使って発表直前のプレゼンテーションをゼミや指導教官で相互に評価し合う場となった。休講や入場制限はあったが、キャリア支援センターの就職支援として面接や就職試験のため電子黒板からZoomで接続する学生の活用など、新しい利用も見られ、利用回数は昨年度と同等であった。プレゼンテーションや発声を伴う練習やグループ学習には、最適な場所と好評を得ている。



1年間続けた保育学科ゼミ



子ども学科卒業研究発表練習

4. ICT 支援員の取組

4月当初より緊急事態措置の中、Web 会議・テレワーク・交代勤務などの対応において、自宅で大学のデータを扱うための注意喚起、具体的な ICT 活用法についてマニュアルを配信し、教職員の利便を図った。また長東キャンパス内では、遠隔授業導入マニュアル(Teams 活用編)を作成し、実際に C-Learning(遠隔授業システム)運用上で起きる問題を Teams のチームで共有して解決に導いた。支援員室のノートパソコンの貸出は2,244回(2月末)となり、活発に利用された。

坂キャンパスにおける ICT 支援員の取り組み

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 鬼塚 純玲

1. はじめに

今年度、坂キャンパスでは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため C-learning を利用した授業が多く実施されることとなり、ICT 支援の必要性が高まった。そこで本項では、昨年に引き続き ICT 支援室からのパソコンの貸し出し状況および ICT 支援員が学生および教職員から受けた相談内容について検討するとともに、今年度新たに実施した取り組みを紹介する。

2. パソコンの貸し出し件数

表 1 に 2019 年度と 2020 年度のパソコン貸し出し件数を、図 1 に貸し出し件数の月毎の推移を示した。キャンパス内への立ち入りが制限されている期間（4～6 月中旬、12 月中旬～1 月）を除いては、2020 年度の方が貸し出し件数は多くなっており、新型コロナウイルス感染拡大防止のために C-learning を利用した授業が大幅に増加したことが要因ではないかと考えられる。

表 1 2019 年度および 2020 年度のパソコン貸し出し件数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月
2019	126	300	225	198	67	120	445	367	246	268
2020	22	1	214	445	164	135	641	426	252	63

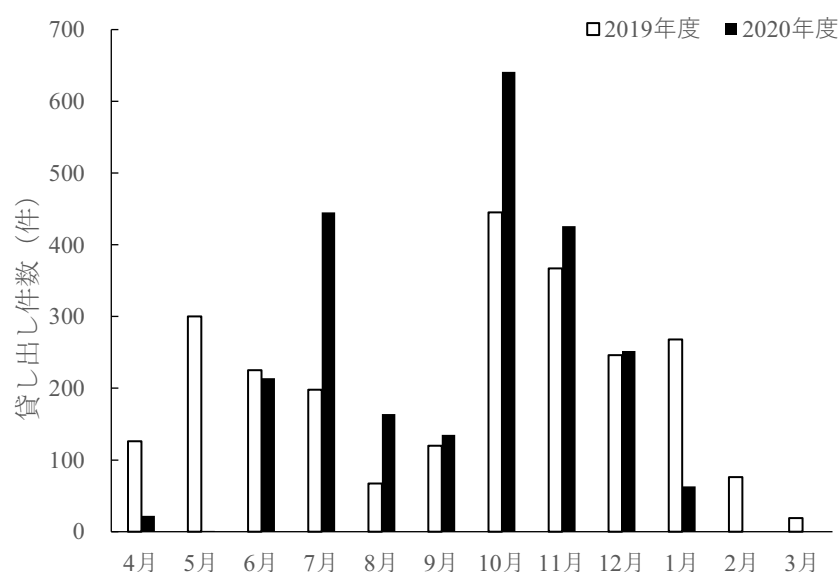


図 1 パソコン貸し出し件数の推移

次に、2019年度と2020年度のICT支援員によるサポート件数を表2に、C-learningに関するサポート件数を表3に示した。今年度は、授業でC-learningを利用する機会が大幅に増加したことに伴い、C-learningの利用方法に関するサポート件数が増加したため、教職員における全体のサポート件数が大幅に増加している。学生においては、昨年度と大きな変化はなく、C-learningに関する相談件数も予想と異なり、ほとんど変化していなかった。これは、後述のC-learning講習会の成果ではないかと考えられる。

表2 2019年度および2020年度のICT支援員によるサポート件数

	2019年度				2020年度			
	教員	職員	学生	計	教員	職員	学生	計
4月	47	44	77	168	101	24	32	157
5月	23	41	19	83	67	23	8	98
6月	24	30	28	82	64	41	30	135
7月	26	27	27	80	31	51	44	126
8月	22	16	11	49	36	53	20	109
9月	10	19	41	70	32	52	62	146
10月	21	23	39	83	40	58	45	143
11月	19	27	39	85	41	41	38	120
12月	19	28	25	72	40	51	21	112
1月	12	18	57	87	39	34	31	104
計	264	321	392	977	491	428	331	1,250

表3 C-learningに関するサポート件数

	2019年度				2020年度			
	教員	職員	学生	計	教員	職員	学生	計
4月	4	3	35	42	66	5	16	87
5月	0	0	2	2	40	1	5	46
6月	2	0	14	16	12	16	7	35
7月	0	2	3	5	8	7	7	22
8月	2	2	0	4	14	9	2	25
9月	2	0	6	8	14	7	4	25
10月	1	0	6	7	13	3	5	21
11月	0	1	6	7	8	2	9	19
12月	0	1	0	1	13	4	6	23
1月	0	0	9	9	21	1	4	26
計	11	11	84	106	209	55	65	329

最後に、今年度全面的に C-learning による授業が実施されることに伴い、人間健康学部では ICT 支援員が教員および学生に対して C-learning 講習会を実施した（写真 1）。学生においては前述のようにある程度の成果が得られたが、教員においては実際に利用してみなければ生じない疑問点やトラブルがあるため、講習会だけでサポートするのは難しく、継続したサポートが必要であると考えられる。



写真 1 専任教員に対する講習会



写真 2 非常勤講師に対する講習会

9. アクティブ・ラーニング実施状況

アクティブ・ラーニング実施状況調査結果

短期大学

学芸学部

看護学部

人間健康学部

アクティブ・ラーニング実施状況

1. 短期大学 FD 委員会

(1) アクティブ・ラーニング導入実績

短期大学では、全科目 306 科目中、206 科目について回答が得られた。最も用いられたアクティブ・ラーニングの手法は「コメントペーパー、ミニッツペーパー」(110 科目、892 回)であり、「情報収集と整理」(95 科目、468 回)、「実験・実習」(48 科目、435 回)と続いた。その他「小テスト」「ディスカッション」についても昨年度と比較し、大幅に回数が増えた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全科目で C-learning を使用したことが本結果に示されたのではないかと考える(図 1)。

(2) 普段の授業形態

普段の授業形態に関する回答においては、板書が中心の科目(58 科目)に比べ、パワーポイントなどパソコンでの内容提示が中心の科目(73 科目)が多かった。プリントを配布し書き込みさせる科目(116 科目)は、ノートを準備して書く(27 科目)より多かった。AL 室や ICT 機器を利用して実施する科目(58 科目)においても補足的にプリントを利用している科目が多いようである。

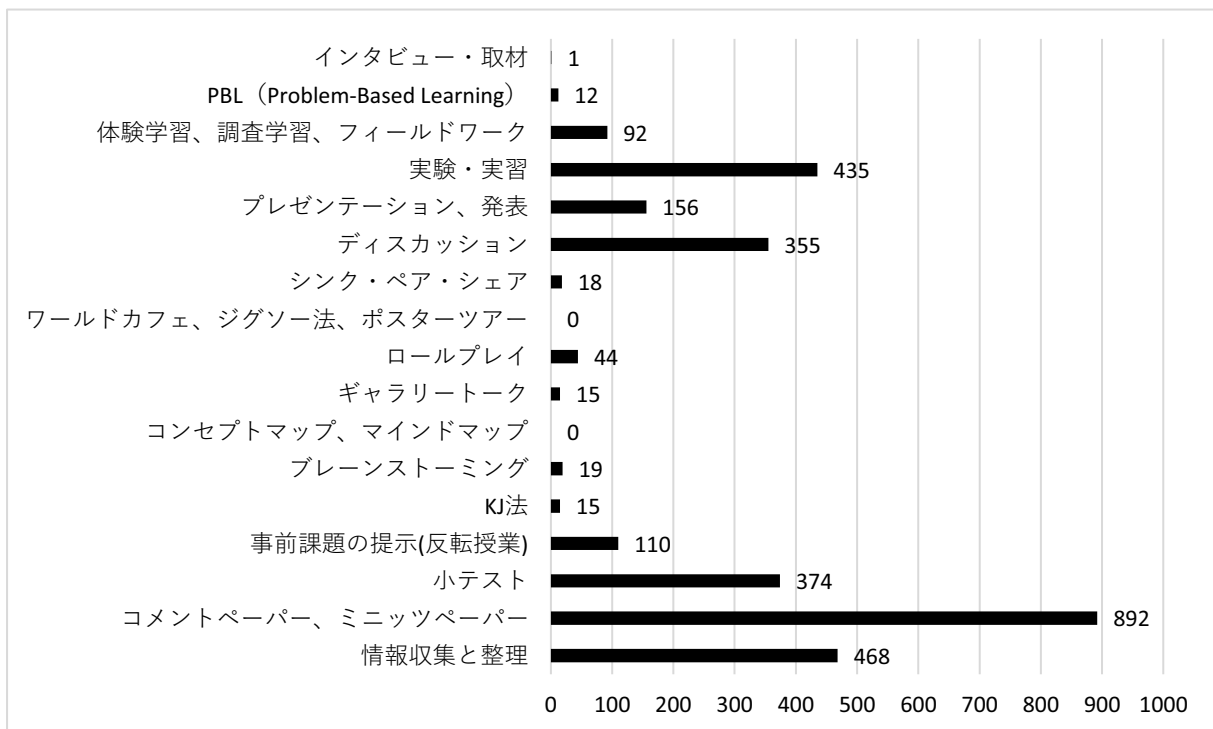


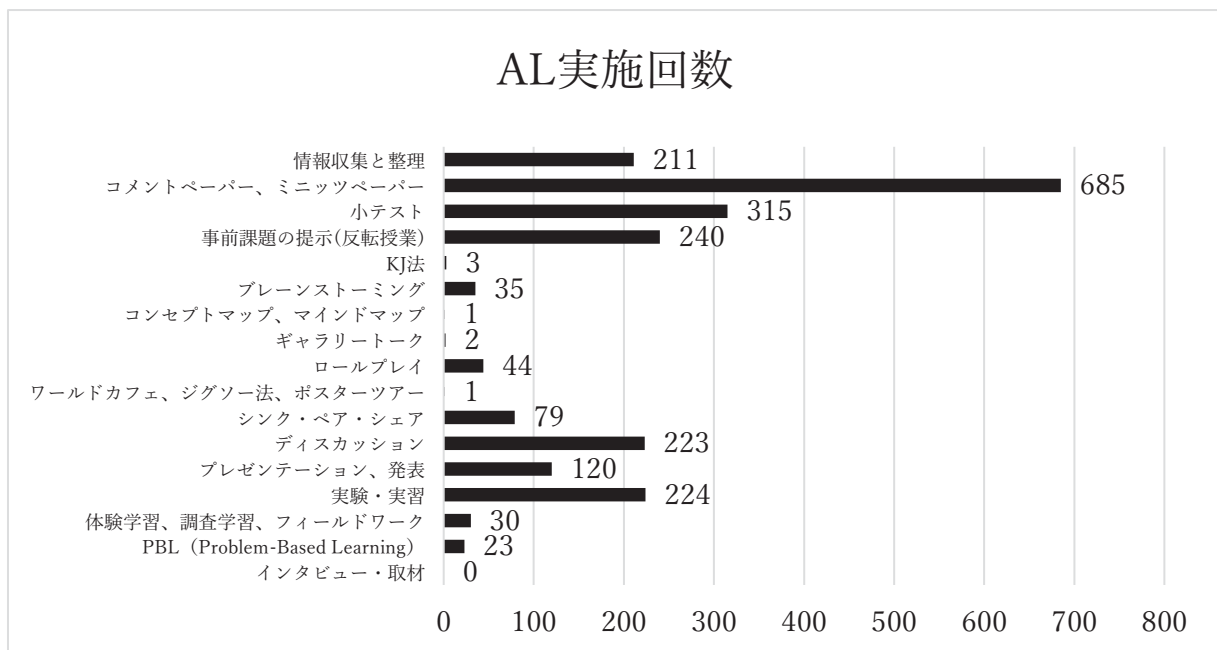
図 1 短期大学でのアクティブ・ラーニング技法の実施状況(回数)

2. 学芸学部 FD 委員会

(1) アクティブ・ラーニング導入実績

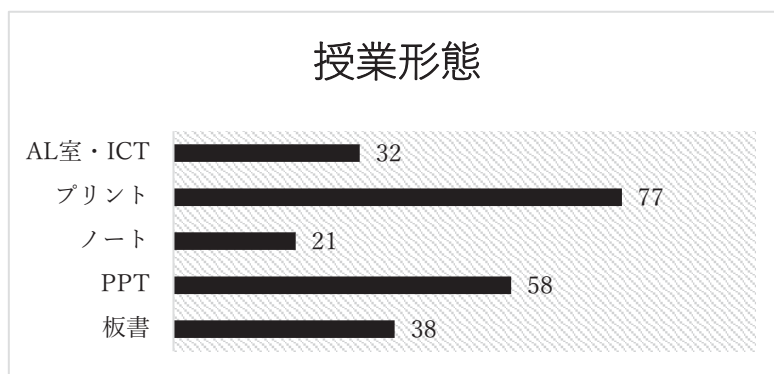
学芸学部では全科目 532 科目中、217 科目について実施状況への回答が得られた。多く用いられるアクティブ・ラーニング技法は「情報収集と整理」(74 科目)、「コメントペーパー、ミニッツペーパー」(59 科目)、「事前課題の提示(反転授業)」(51 科目)であった。実施回数では、「コメ

ントペーパー、ミニッツペーパー」(685回)、「小テスト」(315回)、「事前課題の提示(反転授業)」(240回)と続いた。昨年度まで多く実施されていた「実験・実習」はコロナ感染症拡大の影響を受け、本年度は実施回数に現象が見られた。



(2) 普段の授業形態

普段の授業形態に関する回答においては、パワーポイントなどパソコンでの内容提示が中心の科目(58科目)が多いが、板書使用(38科目)も依然として高い。また、プリント(77科目)やノート(21科目)を補足的に利用している科目が多いことがうかがえる。



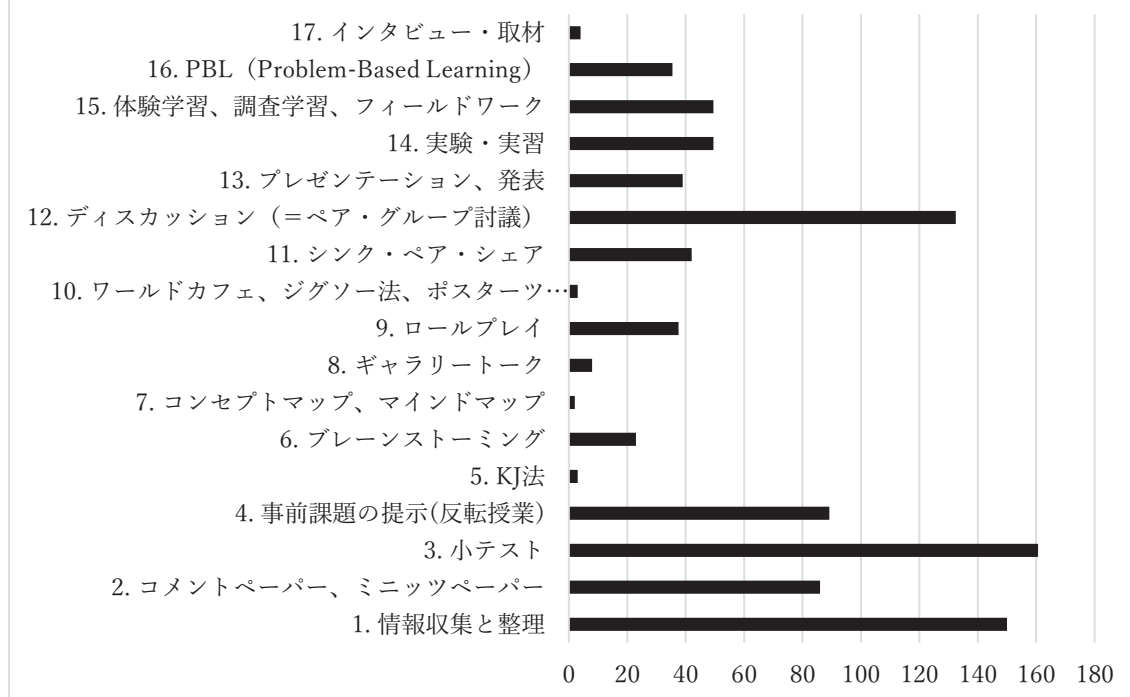
3. 看護学部 FD 委員会

177科目中の回答は37科目であった。

授業の形式:

授業の形式	科目数(%)
1. 黒板やホワイトボードでの板書が中心	3(1.1)
2. パワーポイント等パソコンでの内容提示が中心	21(56.7)
3. ノートを準備して書くよう指導	17(45.9)
4. プリントを配布し書き込みさせる	33(89.2)
5. AL室やICT機器を利用して実施	13(35.1)

看護学部看護学科での実施状況



看護学部看護学科での AL 技法に関しては、回答数が37科目(21%)にとどまっているが、全体の実施回数として最も多かったのは、小テストであった(図 X)。次いで多かったものは情報収集と整理であり、さらにディスカッション、反転授業、コメントペーパー;ミニッツペーパーの順にそれぞれの技法が多く使用されていた。これら5の技法の使用事例が全体として目立ち、約7割を占めていた。この中で、比較について若干の無理はあるが、前年で多かったロールプレイやプレゼンテーション、シンク・ペア・シェア、インタビューはかなり少なくなり、代わりに情報収集と整理が多くなっていた。このことは新型コロナウイルス感染症流行の影響があった結果と考えられるかも知れない。

看護学部ではアンケート結果に見られるすべての技法をこれまで継続して実施してきている。ただ、インタビューや、ワールドカフェ・ジグソー法・ポスターツアー、ギャラリートーク、コンセプトマップ、KJ法は全体から見るとマイナーな手法となっており、この傾向は前年までの傾向と同様で、同学科の特徴であると考えられる。

4. 人間健康学部 FD 委員会

(1) アクティブ・ラーニング導入実績

人間健康学部の今年度開講科目(156科目)中、最も用いられたアクティブ・ラーニング技法は「小テスト」(66科目、501回)であり、「情報収集と整理」(68科目、404回)、「事前課題の提示(反転授業)」(47科目、290回)、「コメントペーパー、ミニッツペーパー」(39科目、289回)と続いた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、C-learningを利用した遠隔授業が多数実施されたが、多く用いられるアクティブ・ラーニング技法に大きな違いは見られなかった(図2)。

(2) 普段の授業形態

普段の授業形態に関する回答においては、パワーポイントなどパソコンでの内容揭示が中心の科目（38%）、およびAL室やICT機器を利用して実施する科目（38%）が多い一方で、プリントを配布し書き込みさせる科目も多く（35%）、ICT機器を活用しながら、補足的にプリントを利用している科目が多いようである。

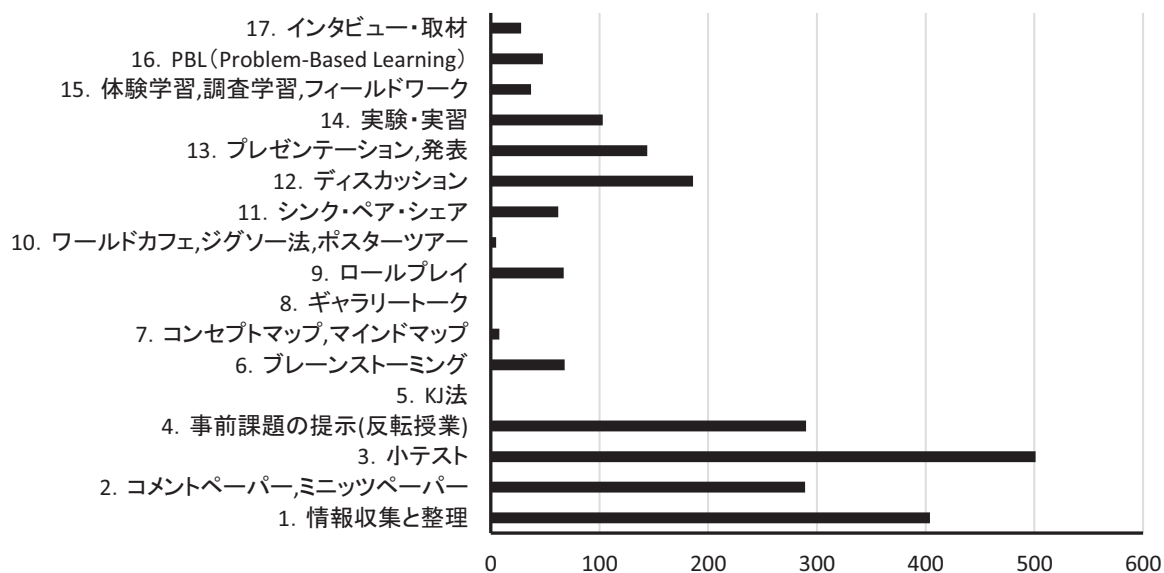


図2 人間健康学部でのアクティブ・ラーニング技法の実施状況

10. 令和元年度と令和2年度前期学生による授業評価の比較

1. 学芸学部・子ども学科（高西 実学科長）
2. 学芸学部・音楽学科（末永雅子学科長）
3. 看護学部・看護学科（佐藤敦子学科長）
4. 人間健康学部・スポーツ健康福祉学科（工藤隆治学科長）
5. 社会情報学部・グローバルビジネス学科（権 俸基学科長）
6. 社会情報学部・健康福祉学科（鶴岡和幸学科長）
7. 短期大学・コミュニティ生活学科（今井裕子学科長）
8. 短期大学・食物栄養学科（村田美穂子学科長）
9. 短期大学・保育学科（清見嘉文学科長）

学生による授業評価アンケート評価 －昨年度と今年度前期の比較概要－

すべて対面授業で実施した令和元年度前期の授業と遠隔授業が主体となった令和2年度前期の授業について、学生による授業評価アンケートの比較を学科ごとに行った。学生の授業アンケート結果は、全体的には昨年度前期よりも高い評価となっており、主にC-learningを使用した遠隔授業であっても、対面授業と変わらない学修効果があったことを示している。遠隔授業では、各教員は教育の質を落とさないように授業内容を工夫していた。その努力の結果が、学生の高い授業評価に繋がったものと思われる。

1. 学芸学部・子ども学科（高西 実学科長）

昨年度と今年度を比較すると、教養科目では、「満足度」、「授業科目」の目的や計画、「教員」の指導、手段、方法などが上昇した。C-Learning に取り組むことにより、授業の焦点化、精選化、構造化が進み、文字情報を中心とする科目においてプラスの影響が生じた結果と推察される。専門科目では、「教員」の手段が低下した他は大きな変化はなかった。新型コロナウイルス感染防止のため、特に専門科目で重視している対人的な関わり合いによる学び、グループ討議や実技、実習等を抑制したため、マイナスの影響が生じた結果と推察される。

2019年																		
区分	分類	科目数	あなた自身について				授業科目について				教員について						満足度	
			欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導		信頼
学芸・子ども	教養科目	7	4.2	1.9	3.7	3.5	3.8	3.9	3.9	3.8	3.8	3.9	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8
	専門科目	68	4.8	3.4	4.1	4.2	4.3	4.0	4.0	4.6	4.3	4.4	4.0	4.4	4.8	4.5	4.2	4.3
	共通・専門科目	4	4.3	2.4	4.1	4.3	4.2	4.4	4.4	4.4	4.4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.4	4.4	4.5
科目計	評価項目別平均	79	4.4	2.6	4.0	4.0	4.1	4.1	4.1	4.3	4.2	4.3	4.0	4.2	4.3	4.3	4.1	4.2
2020年																		
区分	分類	科目数	あなた自身について				授業科目について				教員について						満足度	
			欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導		信頼
学芸・子ども	教養科目	8	4.7	2.3	4.2	4.3	4.5	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.5	4.5	4.5	4.6	4.5	4.6
	専門科目	73	4.5	2.9	4.2	4.3	4.4	4.4	4.4	4.5	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.3	4.4
	共通・専門科目	4	4.5	2.3	4.2	4.3	4.3	4.3	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.5
科目計	評価項目別平均	85	4.6	2.5	4.2	4.3	4.4	4.4	4.4	4.5	4.5	4.5	4.4	4.5	4.4	4.5	4.4	4.5

2. 学芸学部・音楽学科（末永雅子学科長）

音楽学科の昨年度と今年度の授業評価を比較すると、「教養科目」「専門科目」「共通・専門科目」ともに満足度4.5以上の高さで、ほぼ変化はなかった。特に、専門科目では、全ての項目において、昨年度と同じか、あるいは高い数値となっており、科目内容により、C-Learning と対面のみでの授業方法に分けて実施したことが、学生にとって良い結果をもたらしたと思われる。

2019年																			
区分	分類	科目数	あなた自身について					授業科目について					教員について					満足度	
			欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導	信頼		満足
学芸・音楽	教養科目	3	4.6	1.9	4.3	4.1	4.3	4.4	4.4	4.6	4.5	4.5	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.6
	専門科目	228	4.6	3.7	4.6	4.7	4.7	4.6	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.8
	共通・専門科目	5	4.3	3.0	4.3	4.5	4.4	4.5	4.4	4.4	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.5
科目計	評価項目別平均	236	4.5	2.9	4.4	4.4	4.5	4.5	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6
2020年																			
区分	分類	科目数	あなた自身について					授業科目について					教員について					満足度	
			欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導	信頼		満足
学芸・音楽	教養科目	1	4.6	2.2	3.8	3.4	4.0	4.5	4.6	4.6	4.7	4.6	4.2	4.2	4.3	4.8	4.3	4.3	4.5
	専門科目	224	4.7	3.8	4.6	4.8	4.8	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8
	共通・専門科目	4	4.5	2.3	4.2	4.3	4.3	4.3	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.5	
科目計	評価項目別平均	229	4.6	2.8	4.2	4.2	4.4	4.5	4.6	4.6	4.7	4.6	4.5	4.5	4.5	4.7	4.4	4.4	4.6

3. 看護学部・看護学科（佐藤敦子学科長）

授業評価の昨年度との比較では、教養科目・専門基礎科目・専門科目間に大差はなかった。学生の自由記述には、毎回丁寧な質問への回答や自分のペースで質問ができた、協働版などを利用してみんなと意見交換をしながら行えたのがよかった等の意見が多くみられた。大人数講義のため、質問や発言のしにくさがある一方、C-learning では多くの質問や意見交換が活発に行われやすい環境であり、大人数講義における双方向性をより高める手段としてのC-learningの併用を進めていきたい。

2019年

区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	14	4.7	2.1	4.2	4.2	4.2	4.1	4.1	4.4	4.4	4.4	4.4	4.3	4.3	4.4	4.3	4.4	
専門基礎科目	16	4.7	2.4	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.1	4.3	4.1	4.2	4.2	4.3	4.1	4.2	
専門科目	39	4.5	2.5	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.1	4.2	4.1	4.1	4.2	4.2	4.1	4.2	
科目計	評価項目平均	69	4.6	2.3	4.1	4.2	4.2	4.1	4.2	4.3	4.2	4.3	4.2	4.2	4.2	4.3	4.2	4.3

2020年

区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	17	4.5	1.9	4.2	4.2	4.3	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	
専門基礎科目	17	4.5	2.5	4.1	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.1	4.2	4.1	4.1	4.1	4.2	4.1	4.1	
専門科目	38	4.4	2.7	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.1	4.2	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	
科目計	評価項目平均	72	4.4	2.4	4.1	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.3	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2

4. 人間健康学部・スポーツ健康福祉学科（工藤隆治学科長）

昨年度と今年度を比較すると、受講生が大人数となる教養科目及び専門共通科目では今年度の満足度は上昇し、一方少人数教育である健康福祉コース専門科目では若干低下している。予習・復習の項目の数字が、極端に低いことは、今年度も変わっていない。今年度前期は、C-learning が中心となる授業であったが、学生の授業に対する満足度などに影響はなかったと考えられる。

2019年																		
区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	20	4.2	2.2	3.8	3.7	3.8	3.9	3.9	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.9	3.8	3.9	
専門共通科目	7	4.3	2.4	3.8	3.8	3.9	3.9	3.9	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.9	3.9	3.8	3.9	
スポーツ健康コース専門科目	16	4.2	2.5	3.9	3.9	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0	3.9	3.9	4.0	
健康福祉コース専門科目	6	4.7	1.7	4.0	4.2	4.3	4.5	4.5	4.6	4.5	4.5	4.4	4.3	4.3	4.5	4.4	4.6	
科目計	49	4.3	2.3	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0	3.9	4.0	
評価項目別平均																		
2020年																		
区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	19	4.8	2.7	4.5	4.4	4.5	4.4	4.4	4.6	4.5	4.4	4.5	4.6	4.6	4.5	4.5	4.4	
専門共通科目	11	4.3	3.3	4.1	4.0	4.1	4.1	4.1	4.2	4.1	4.1	4.0	4.0	4.1	4.1	4.1	4.2	
スポーツ健康コース専門科目	23	4.4	2.0	4.0	4.1	4.2	3.7	3.8	4.1	4.1	3.9	4.1	3.9	3.9	3.9	4.1	4.0	
健康福祉コース専門科目	12	4.6	2.6	4.2	4.4	4.4	4.2	4.4	4.4	4.6	4.4	4.3	4.1	4.3	4.3	4.5	4.3	
科目計	65	4.5	2.4	4.0	4.1	4.1	4.0	4.0	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	
評価項目別平均																		

5. 社会情報学部・グローバルビジネス学科（権 俣基学科長）

昨年度と今年度を比較して、教養科目および学部共通科目、学科専門科目の満足度において、すべて、今年度の方が高い傾向が認められる。特に、学科専門科目は、授業評価のほぼ全項目において、評価が改善された。今年度前期は、前半、一部の期間中 C-learning を取り入れた授業を行ったが、学生の授業に対する満足度などに影響はなかったと考えられる。

2019年																		
区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	11	4.1	3.5	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	
社会情報学部 共通専門科目	14	4.2	2.6	3.8	4.1	4.2	4.2	4.2	4.3	4.3	4.3	4.2	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	
グローバルビジネス学科 専門科目	16	3.9	3.1	3.7	3.9	4.0	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0	4.0	
健康福祉学科 専門科目	19	4.1	2.5	3.8	4.1	4.0	4.0	4.0	4.1	4.2	4.2	4.0	4.1	4.0	4.1	4.0	4.0	
科目計	60	4.1	2.9	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	4.1	
評価項目別平均																		
2020年																		
区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	3	4.0	3.0	3.9	3.9	3.9	4.1	3.8	4.1	4.1	4.4	4.3	4.2	4.2	4.4	4.1	4.5	
社会情報学部 共通専門科目	6	4.0	3.7	4.0	4.2	4.0	4.4	4.3	4.3	4.1	4.2	4.2	4.3	4.3	4.1	4.2	4.4	
グローバルビジネス学科 専門科目	8	4.0	3.2	4.0	3.8	4.0	4.1	4.0	4.1	4.2	4.3	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	
健康福祉学科 専門科目	4	5.0	3.4	4.6	4.8	4.8	4.6	4.6	4.9	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5	4.7	
科目計	21	4.2	3.4	4.1	4.1	4.1	4.3	4.2	4.3	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.2	4.4	
評価項目別平均																		

6. 社会情報学部・健康福祉学科（鶴岡和幸学科長）

昨年度と今年度を比較すると、教養科目および学部共通科目については大きな違いは認められなかった。学科専門科目については、全体的に評価が高くなっており、特に予習・復習

については、大幅に改善された。2020年度前期は、前半C-learningで、後半対面での授業であったが、満足度には影響がなく好評であったことを示している。

2019年																		
区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	11	4.1	3.5	4.1	4.2	4.2	4.2	4.2	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	
社会情報学部 共通専門科目	14	4.2	2.6	3.8	4.1	4.2	4.2	4.2	4.3	4.3	4.3	4.2	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	
グローバルビジネス学科 専門科目	16	3.9	3.1	3.7	3.9	4.0	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0	4.0	
健康福祉学科 専門科目	19	4.1	2.5	3.8	4.1	4.0	4.0	4.0	4.1	4.2	4.2	4.0	4.1	4.0	4.1	4.0	4.0	
科目計																		
評価項目別平均	60	4.1	2.9	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	4.1	
2020年																		
区分	科目数	あなた自身について					この授業について											満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成		
教養科目	3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	
社会情報学部 共通専門科目	7	4.3	3.4	4.3	4.1	4.3	4.2	4.3	4.2	4.5	4.2	4.6	4.3	4.4	4.2	4.3	4.2	
グローバルビジネス学科 専門科目	6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
健康福祉学科 専門科目	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
科目計																		
評価項目別平均	17	4.3	3.3	4.2	4.2	4.2	4.3	4.2	4.3	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.2	4.4	

7. 短期大学・コミュニティ生活学科（今井裕子学科長）

2020年度前期は、前半はC-learningで、後半は対面での授業だった。2019年度と比較しても教養科目と専門科目ともに差は認められず、満足度に影響はなかったことがわかった。

学生の自己評価については、予習・復習の質問項目以外は、4.4から4.6の範囲であり、授業に意欲的に取り組み、知識や技術が身に付いたと感じていることがうかがえた。予習・復習の自主勉強では、科目ごとに予習・復習の具体例を学生に伝える必要があると考えている。授業・教員への評価について問題は検出されず、全体としては良好な評価結果が得られた。

2019年																	
区分	科目数	あなた自身について					授業科目について				教員について						満足度
		欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導	信頼	
教養科目	7	4.3	2.0	4.2	4.3	4.4	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.5	4.5	4.4	4.5	4.5	4.5
専門科目	57	4.5	2.2	4.4	4.5	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6
科目計																	
評価項目別平均	64	4.5	2.2	4.4	4.4	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6
2020年																	
区分	科目数	あなた自身について					授業科目について				教員について						満足度
		欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導	信頼	
教養科目	9	4.6	1.9	4.4	4.4	4.5	4.6	4.6	4.7	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.7	4.6	4.6
専門科目	52	4.6	2.3	4.4	4.5	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6
科目計																	
評価項目別平均	61	4.6	2.2	4.4	4.4	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.6	4.6	4.6

8. 短期大学・食物栄養学科（村田美穂子学科長）

食物栄養学科及び専攻科栄養専攻では、昨年度と今年度の各項目を比較すると、大きな違いは認められなかった。学生自身の授業に対する評価は良好であり、特に専門科目では、全

体の数値が昨年度より高かった。授業に対する評価については、前半はC-learning 授業で、後半は対面授業であったが、対面授業においても C-learning を授業内で活用する等、各教員が授業内容を工夫した結果、学生の授業に対する満足度が昨年度と同様、好評であった。

2019年																	
区分	科目数	あなた自身について					この授業について										満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成	
教養科目	9	4.4	1.6	4.1	4.1	4.3	4.4	4.4	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.4	4.3	4.4
専門科目	30	4.5	1.8	4.1	4.3	4.4	4.5	4.5	4.4	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.4
科目計	39	4.5	1.8	4.1	4.2	4.4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.4
評価項目別平均		4.5	1.8	4.1	4.2	4.4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.4
2020年																	
区分	科目数	あなた自身について					この授業について										満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成	
教養科目	9	4.7	1.5	4.2	4.2	4.3	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.4	4.4	4.5
専門科目	29	4.6	2.0	4.4	4.4	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.5	4.5	4.6	4.5	4.5
科目計	38	4.6	1.9	4.3	4.4	4.5	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.5	4.4	4.4	4.6	4.5	4.5
評価項目別平均		4.6	1.9	4.3	4.4	4.5	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.5	4.4	4.4	4.6	4.5	4.5

専攻科栄養専攻

2019年																	
区分	科目数	あなた自身について					この授業について										満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成	
専門科目	8	4.6	2.6	4.3	4.5	4.5	4.5	4.9	5.0	5.0	4.8	4.9	4.9	5.0	5.0	4.8	5.0
科目計	8	4.6	2.6	4.3	4.5	4.5	4.5	4.9	5.0	5.0	4.8	4.9	4.9	5.0	5.0	4.8	5.0
評価項目別平均		4.6	2.6	4.3	4.5	4.5	4.5	4.9	5.0	5.0	4.8	4.9	4.9	5.0	5.0	4.8	5.0
2020年																	
区分	科目数	あなた自身について					この授業について										満足
		遅刻・欠席	予・復習	態度	興味・関心	知識・技術	シラバス	目的	意欲・熱意	話し方	教材	理解度	双方向性	注意	対応	目標達成	
専門共通科目	13	4.5	3.2	4.3	4.5	4.4	4.4	4.4	4.8	4.5	4.6	4.4	4.5	4.7	4.8	4.4	4.7
科目計	13	4.5	3.2	4.3	4.5	4.4	4.4	4.4	4.8	4.5	4.6	4.4	4.5	4.7	4.8	4.4	4.7
評価項目別平均		4.5	3.2	4.3	4.5	4.4	4.4	4.4	4.8	4.5	4.6	4.4	4.5	4.7	4.8	4.4	4.7

9. 短期大学・保育学科（清見嘉文学科長）

昨年度と今年度を比較すると、専門科目の予習・復習を除くすべての項目において、教養科目及び専門科目共に今年度の満足度は上昇している。それは、各教員の授業改善に向かう意識の向上に加え、年度当初の C-learning を利用した授業において、各教員が新たな授業方法に戸惑いながらも学生一人ひとりと丁寧に向き合い、学生に力を付けるために誠実に授業づくりに努めたことが、その後の対面での授業に好影響を与えた結果ではないかと考えられる。

2019年																	
分類	科目数	あなた自身について				授業科目について				教員について						満足度	
		欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導		信頼
教養科目	16	4.6	1.6	4.3	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.5
専門科目	91	4.5	2.3	4.2	4.3	4.3	4.3	4.4	4.4	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3
2020年																	
分類	科目数	あなた自身について				授業科目について				教員について						満足度	
		欠席	予・復習	意欲	知識	シラバス	目的	進行	計画	熱意	声	質問	方法	手段	指導		信頼
教養科目	14	4.6	2.1	4.5	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6
専門科目	83	4.7	2.1	4.4	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.4	4.5

1 1. おわりに

広島文化学園大学・短大 FD 委員会

令和 2 年度前期の授業は、新型コロナ・ウイルス感染症のために、4 月の授業開始から遠隔授業を余儀なくされました。その後、感染者数の一時的な低下により、対面授業が再開されましたが、授業科目によっては多くの時間が遠隔授業となりました。

このような状況でしたが、大学・短大 FD 委員会は当初の予定通り、教職員によるピアレビュー（授業評価）、学外研修会参加、ビデオ教材制作、学生参画型 FD 活動の促進、学生による授業アンケート評価、全学 FD 研修会などを実施してまいりました。その活動内容をこの「2020 年度 アクティブ・ラーニング推進報告書」にまとめました。

今年度の報告書では本学で導入されている C-learning を使った遠隔授業に焦点を当て、このシステムを使ったアクティブ・ラーニングの授業紹介を特集として取り上げました。C-learning は基本的にはいわゆるオンデマンド方式であり、Zoom や Meet などのオンラインシステムとは異なり、授業のやり方にも工夫が必要になってきます。今回の遠隔授業の経験を今後の教育に活かし、通常の対面授業の中でも C-learning を活用することによって、よりよい大学教育につなげていかなければなりません。

学生の授業アンケート評価は、令和元年度と令和 2 年度の前期の比較で明らかになったように、遠隔授業を多く取り入れた令和 2 年度前期の評価は令和元年度と同じかもしくは高くなっている傾向にあります。このことは各教員が授業に工夫をほどこすことによって教育効果が維持され、学生の授業に対する満足度が十分であったと考えられます。

今年度の本委員会の重要な使命の一つは、ティーチング・ポートフォリオ作成のための準備を整えることでした。そのために、全学 FD 研修会において、広島大学教育本部の吉田香奈准教授を講師としてお招きし、ティーチング・ポートフォリオの作成についてのワークショップを開催いたしました。コロナ禍のために、対面でのワークショップは開催できませんでしたが、オンラインによる講演をしていただき、全学でティーチング・ポートフォリオを取り入れる下地はできたものと思われまます。

本報告書をご一読くださり、本報告書、本学のアクティブ・ラーニングの取組、及び FD 委員会に対するご意見等をいただければ幸いです。

広島文化学園大学・短期大学FD委員会規程

(目的)

第1条 広島文化学園大学(以下「大学」という。)学則第3条及び広島文化学園短期大学(以下「短大」という。)学則第3条の規定に基づき、授業内容及びその方法の改善を図り、アクティブ・ラーニングを推進し、教育の充実及び質向上を目指すために、大学・短大FD(ファカルティ・ディベロップメント)委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、委員長及び各学部・学科・研究科教員及び事務職員から選任された委員をもって構成する。

2 前項の委員長及び委員は、大学及び短大の学長がこれを任命する。

3 各学部・短大に、当該学部・学科及び研究科の委員からなる学部・短大FD委員会を設ける。

4 各学部・短大FD委員会に、それぞれ委員長を置く。

(任期)

第3条 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。欠員が生じた場合の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第4条 委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員・学生代表者の出席を求め、意見を聴取することができる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(所掌)

第5条 委員会は、大学及び短大のFD活動及びアクティブ・ラーニングの推進が持続的に実行されるよう、次の各号に掲げる事項を取り扱うものとする。

(1) 教員の教育活動改善のための方策に関する事項

(2) 講演会・研修会等の企画・実施に関する事項

(3) 学生の授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項

(4) FD活動に関する情報収集と提供に関する事項

(5) アクティブ・ラーニングの企画・実施及び評価に関する事項

(6) アクティブ・ラーニングに関する情報収集と提供に関する事項

(7) ティーチング・ポートフォリオに関する事項

(8) その他、学長の諮問する事項

(報告)

第6条 委員長は、委員会の議事及び結果を教学支援センター会議に諮ったのち、教授会に報告しなければならない。

(その他)

第7条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

1 この規程は、平成30年9月1日から施行する。なお、広島文化学園大学FD委員会規程、広島文化学園短期大学FD委員会規程及び広島文化学園大学・短期大学アクティブ・ラーニング推進委員会規程は廃止する。(組織改編に伴う改正。)

2 この規程は、令和2年4月1日から施行する。(一部改正)

編集委員

広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

委員長	人間健康学部スポーツ健康福祉学科	山崎 昌廣
副委員長	看護学部看護学科	佐藤 敦子
	食物栄養学科	岡田 正浩
委員	大学・短大事務局	湧田 耕辰
	社会情報学部グローバルビジネス学科	真嶋 正巳
	人間健康学部スポーツ健康福祉学科	房野 真也
	人間健康学部スポーツ健康福祉学科	鬼塚 純玲
	看護学部看護学科	中村 哲
	学芸学部子ども学科	八島 美菜子
	学芸学部子ども学科	小笠原 文
	食物栄養学科	江坂 美佐子
	広島 坂キャンパス学生部	田浦 智子
	呉 阿賀キャンパス学生部	堀本 かえで
	広島 長束キャンパス学生部	金田 直美
	広島 長束キャンパス図書館	弥富 純子

2020 年度 大学・短期大学 FD 委員会アクティブ・ラーニング推進報告書

発行年月日 2021 年 3 月 30 日

発行 広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

編集 広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

〒731-4312

広島県安芸郡坂町平成ヶ浜三丁目 3 番 20 号 広島文化学園大学

広島 坂キャンパス内

電話 082-884-1001

印刷 青木印刷株式会社

住所 広島県呉市安浦町内海北二丁目 1 番 6 号

電話 0823-84-2104